史　跡

上之国勝山館跡　Ⅳ

――昭和57年度発掘調査整備事業概報――

1983・3

上ノ国町教育委員会

史　跡

上之国勝山館跡　Ⅳ

――昭和57年度発掘調査整備事業概報――

序

昭和54年度から着手した史跡上之国勝山館跡の環境整備事業は、今年第４年次の事業を終了するところとなりました。

本年度は発掘調査1,700m²、環境整備事業1,290m²を実施致しました。発掘調査の結果、1473年創祀を伝える館神八幡宮跡地で、1770年建立の現上ノ国八幡宮本殿（上ノ国町指定有形文化財）の礎石と思われる配石が検出され又、付近にはそれ以前の柱穴等もあり、創建当時の遺構の解明は尚今後の課題となったところであります。

館神八幡宮跡南方の、旧沢地付近から発掘された大量の廃棄遺物の分析の結果数々の興味ある事実が報告され、まだこの作業は途中でありますが随分と勝山館の性格を推測し得るところとなりました。

人頭骨や、ウマ・イヌ・ネコ等の家畜類の出土は全く予想も出来なかったところであります。これについては札幌医科大学、百々、鈴木、西本の諸先生にご尽力を戴きました。

大量の遺物の出土は、1,500年代頃の勝山館の繁栄を示すものであり、今後はその背景を探ることが重要なことになって参りました。

環境整備事業は、北海道大学足達先生の御指導を受け、空壕跡、旧沢地形等について、その年代を明示する方法で表現が出来ました。序々にではありますが、館の姿がご覧いただけるようになりつつあります。

今年度も事業の推進にあたり、文化庁、北海道教育委員会をはじめとする多くの関係機関と諸先生に御指導と御援助を頂戴致しました。心から御礼申し上げます。

本書は57年度事業の概要をまとめたものであります。諸先生の御叱正をお願い申し上げます。

昭和58年３月

北海道桧山郡上ノ国町教育委員会
教育長　青　柳　　隆

序

昭和61年度から着手した史跡上之郷城山遺跡の発掘調査報告は、今年度より年次の報告書作成へとうつることになりました。

本年度は令和元年度，700㎡，東側斜面調査，290㎡の発掘調査，をもとに，発掘調査の結果，17ヶ所の平面型を区分される前期八郷窯跡群で，1770年登立の松上八郷八郷本窯（上ノ郷陶磁史研究会）の発見と記録の結果から実地調査，初年度には今年以前の結果があり，当年度内容の報告の作成は今後の課題となったことであります。

筑波八郷窯跡群の，二日間調査は，ほぼ全部出土した大量の陶器類破片の分析の結果，窯跡の発掘から年表が確定され，また，この窯跡は途中でおわりまで判明された陶器の焼成を推測し得ることになりました。

大陶窯や，ウマ，ハ，ヘ，ホ，ヒ窯の窯前の出土は今ケ谷も出来なかったことなどから出来ることはこれまでの（）は解決済み。信ケ，徳本，岡本の諸先生にご協力を願ました。

大型の陶器の出土は，300年間の窯出陶の変遷を示すものであり，今後は[illegible]

[illegible]

今年度の調査の成果は，[illegible]

本書は，[illegible]

昭和60年度

上之郷城山遺跡発掘調査報告

第　　　

本文目次

Ⅰ．調査の概要……1
Ⅱ．遺　　構……1
1．館神八幡宮跡……1
（礎石建物跡　石積の階段）
2．掘立柱建物跡……1
3．柵　　列……5
4．竪穴状遺構……5
5．空壕A、B……5
6．樋状木製品出土地区……7
（杭列、池、集石）
7．27K2、7区（旧沢跡）……7
Ⅲ．遺　　物……11
1．館神八幡宮跡周辺部の出土遺物……11
2．勝山館跡における出土遺物の小括……21
a．陶　磁　器……21
b．金属製品（銅、鉄製品）……33
c．鉄　　滓……37
d．骨　角　器……39
e．木　製　品……45
f．古銭（寛永通宝）……57
Ⅳ．勝山館跡出土の人骨及び動物遺存体……61
1．人　　骨……61
2．動物遺存体……67
Ⅴ．ま　と　め……71

挿図目次

第1図　グリッド配置図……1
第2図　礎石建物跡平面図……2
第3図　館神八幡宮跡セクション図……3
第4図　空壕A・B平面図（地形図）
セクション図……6
第5図　樋状木製品出土地区（25M・26M区）
平面図、セクション図……8
第6図　27K2・7区東壁・南壁セクション図10
第7図　舶載磁器（白磁1～5青磁6～9）……13
第8図　舶載磁器（染付皿）……14
第9図　舶載磁器
（染付皿13碗15・16赤絵14盃17・18）…15
第10図　国産陶器
（瀬戸・美濃19～26唐津27楽焼28）……16
第11図　国産陶器（盤、擂鉢、壺、甕）……17
第12図　国産陶磁器（徳利、香炉、水入）……18
第13図　鉄　製　品……19
第14図　銅　製　品……20
第15図　舶載磁器（青磁・白磁）……22
第16図　舶載磁器（染付碗皿）……24
第17図　舶載磁器（染付皿）……25
第18図　国産陶器（美濃碗皿）……27
第19図　国産陶器（天目碗）……28
第20図　国産陶器（鉄釉皿）……29
第21図　陶磁器分布図・変遷概念図表……31
第22図　鉄製品計測グラフ……33
第23図　鉄製品の点数および重量分布図……34
第24図　釘、鍋、小札、銅製品重量分布図……35
第25図　鉄、銅製品実測図……36
第26図　鉄滓計測グラフ……37
第27図　鉄滓分布図、相関表・実測図……38
第28図　骨角器．1……41
第29図　骨角器．2……42
第30図　骨角器．3……43
第31図　骨角器．4……44
第32図　木製品円グラフ……49
第33図　木製品（衣）1……50
第34図　木製品（食）2……51
第35図　木製品（食住）3……52
第36図　木製品（住）4……53
第37図　木製品（建築関係、その他）5……54
第38図　木製品（武具、その他）6……55
第39図　木製品（その他）7……56
第40図　銅銭拓影図……59
第41図　人骨、獣骨出土状況……65

写真目次

ＰＬ１　舶載磁器……75
ＰＬ２　国産陶器と舶載磁器……77
ＰＬ３　発掘区全景……79
ＰＬ４　空壕Ａ、Ｂ全景１（北方より）……80
　　空壕Ａ、Ｂ全景２（南方より）
　　空壕Ａ南北セクション
ＰＬ５　館神八幡宮跡全景……81
　　石積の階段全景
　　土留セクション
　　礎石建物跡全景（西方より）
　　礎石建物跡全景（南方より）
ＰＬ６　掘立柱建物跡全景1、2（東方より）……82
　　柵列全景（北方より）柵列部のセクション
　　石製品出土状況１
　　石製品出土状況２（臼）
ＰＬ７　27Ｋ２、７区東壁セクション……83
　　Ⅲｂ層下部遺物出土状況
　　（獣骨魚貝類、木製品）
　　Ⅲｂ層下部獣骨出土状況
　　Ⅲｂ層下部獣骨出状況
　　Ⅲｂ層下部木製品出土状況
ＰＬ８　舶載磁器と国産陶磁器（八幡宮跡）……84
ＰＬ９　国産陶器（八幡宮跡）……85
ＰＬ10　国産陶磁器（八幡宮跡）……86
ＰＬ11　鉄製品（八幡宮跡）……87
ＰＬ12　銅製品と陶器類（八幡宮跡）……88
ＰＬ13　石製品（八幡宮跡）……89
ＰＬ14　舶載磁器（青磁）……90
ＰＬ15　舶載磁器（白磁）……91
ＰＬ16　舶載磁器（染付碗）……92
ＰＬ17　舶載磁器（染付碗）……93
ＰＬ18　舶載磁器（染付皿）……94
ＰＬ19　舶載磁器（染付皿）、国産陶器……95
ＰＬ20　国産陶器（美濃）……96
ＰＬ21　上、国産陶器（鉄釉）下、鉄滓……97
ＰＬ22　金属器（鉄及び銅製品）……98
ＰＬ23　骨角器１……99
ＰＬ24　上、骨角器２（未製品）下、木製品１…100
ＰＬ25　木製品２……101
ＰＬ26　木製品３……102
ＰＬ27　木製品４……103
ＰＬ28　古銭１（古寛永）……104
ＰＬ29　古銭２（新寛永）……105
ＰＬ30　古銭３（新寛永）……106
ＰＬ31　人骨、獣骨出土状況……65
ＰＬ32　人骨１……107
ＰＬ33　人骨２……108
ＰＬ34　獣骨１……109
ＰＬ35　獣骨２……110
ＰＬ36　獣骨３……111
ＰＬ37　獣骨４……112

表目次

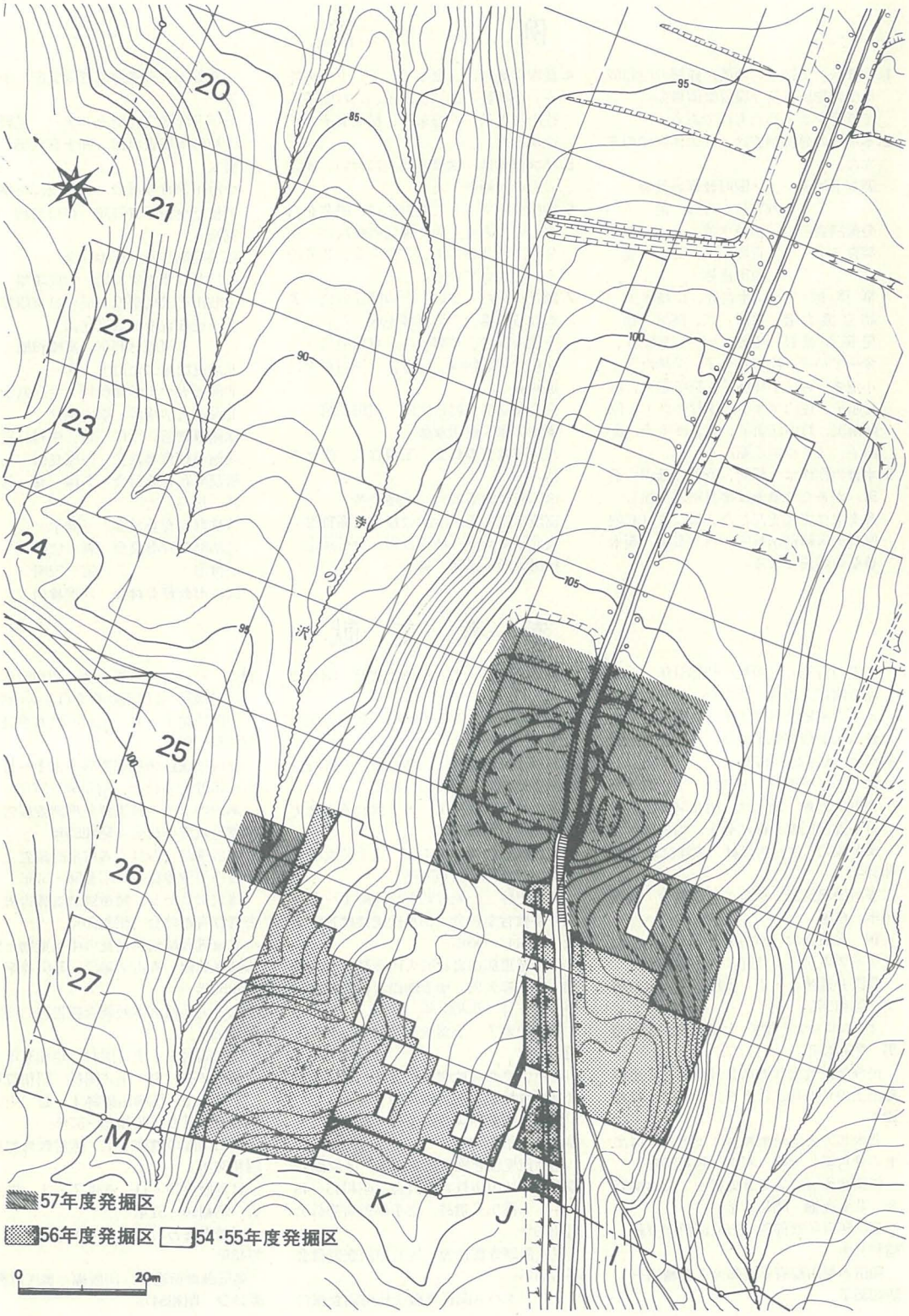
表１表　陶磁器集計表（第21図中）……31
表２表　木製品計測表(1)(2)……47
表３表　寛永銭の種別……58
表４表　Ｋ３出土の散乱人骨片一覧……63
表５表　勝山館出土第７号頭骨計測値……64
第６表　貝類出土量……68
第７表　柱状ブロックサンプル出土魚椎骨数
　　（耳骨を含）……68
第８表　鳥類出土量……68
第９表　27Ｋ区出土の哺乳類出土量……69
第10表　27Ｋ区以外の区から出土の
　　哺乳類出土量……70
第11表　ネコ四肢骨及び頭蓋計測値（mm）……70
第12表　イヌの頭蓋の計測値と推定体高
　　（単位mm）……70

例　　言

1.本書は、史跡上ノ国勝山館跡の昭和57年度発掘調査及び環境整備事業について概要をまとめたものである。
2.本年度の発掘調査は、次の体制でのぞんだ。
調査主体者　上ノ国町教育委員会
教育長　青柳　隆
発掘調査担当　松崎水穂
調査スタッフ　斉藤邦典、藤田　登
前田正憲
事務担当　山本吉春、山崎洋子
調査協力者　笹田　仁、藤岡　強
発掘作業員　上野ヒデ、加賀秋江、金子てい子、片石百合子、菊地たきえ小滝あけみ、小林静子、笹浪定子、沢村照子、佐山アキ子、中村キクエ、佐藤明美、竹内江美子、久未キミ子、森節子（アイウエオ順）
3.本書の作成は、松崎、斉藤、藤田、前田、があたり執筆は項目別に分担し、各文末に文責を記した。尚、Ⅳは札幌医科大学解剖学教室、百々幸雄、西本豊弘の両氏による。
4.整理作業には、金子てい子、小滝あけみ、小林静子、笹浪定子、沢村照子、佐山アキ子、布施末子、松原笑子、が従事した。
5.挿図作成は、執筆者が主に行い。前記のものが補助した。
6.挿図の中で示した北方位は、磁北を示すものである。尚、挿図の縮尺は、4分の1、3分の1、3分の2、2分の1、を用いている。
7.調査にあたっては、次の関係各位に多大なる御協力と御指導を賜った。
土地所有者、草間サユ、草間恒二
文化庁記念物課、仲野浩、牛川喜幸、黒崎直
奈良国立文化財研究所　沢田正昭
東洋文庫　渡辺兼庸
八戸市教育委員会　工藤竹久　佐々木浩一
浪岡町教育委員会　工藤清泰
宮城学院女子大学助教授　工藤雅樹
東北学院大学　熊谷公男、大石直正
秋田大学　遠藤　巌
一乗谷朝倉氏遺跡調査研究所　小野正敏
岩手県埋蔵文化財センター　昆野　靖
愛知県陶磁資料館　井上喜久男、柴垣勇夫
小浜市教育委員会　大森宏、杉本泰俊
若狭歴史民俗資料館　森川昌和　網谷克彦
福井県陶芸館　田中照久
石川県立郷土資料館　吉岡康暢
土岐市美濃陶磁歴史館　日東勝郎
北海道教育委員会文化課
河原林邦雄、高橋和樹
北海道埋蔵文化財センター
北海道大学工学部教授　足立富士夫
北海道大学講師　横山英介
函館博物館　千代　肇、中村公宣
函館市教育委員会　田原良信
松前町教育委員会　久保　泰、鈴木正語、松谷　太
八雲町教育委員会　三浦孝一
乙部町教育委員会　森　広樹
小樽市　宮　宏明
流山市教育委員会　穴沢義功

参　考　文　献

美濃の古陶　光琳社　昭和51年
原色陶器大辞典　淡交社　昭和47年
世界陶磁器全集 4、5、6、14 昭和51年他
貿易陶磁研究No.1～2　日本貿易陶磁研究会　昭和56～57年
世界大百科事典　平凡社　4、24、29
考古学辞典　創元社　昭和34年
日本貨幣図鑑　郡司勇夫　昭和56年
東遊雑記　古川古松軒　東洋文庫　昭和39年
参河後風土記　平岩主計頭親吉　慶長15年　自序
鋸　吉田金次　昭和54年
アイヌの民具　萱野　茂　昭和53年
香深井遺跡上・下　大場利夫、大井晴男　昭和56年
オンコロマナイ貝塚　大場利夫、大井晴男　昭和48年
民族学研究第3巻第2号別刷「千島群島出土の狩猟具及び漁具」馬場修　昭和12年
北大北方文化研究報告「モヨロ貝塚出土の骨角器」大場　利夫　昭和30年
新撰北海道史第5巻史料一　福山秘府全　北海道廳　昭和11年
福山秘府年暦部四　市立函館図書館　昭和31年
和田本福山秘府年暦部全　越崎宗一　昭和35年
新羅之記録　市立函館図書館　昭和12年
新北海道史第7巻史料一　新羅之記録　北海道　昭和44年
草戸千軒町遺跡　広島県草戸千軒町遺跡調査研究所　昭和43～54年
大坂城三の丸跡1　大手前女子大学史学研究所、昭和57年
大坂城三の丸跡大手口　大手前女子大学史学研究所　昭和57年
特別史跡　一乗谷朝倉氏遺跡Ⅰ～XⅢ　福井県教育委員会　朝倉氏遺跡調査研究所　昭和43～56年
岐阜県恵那郡岩村町大円寺跡出土の陶磁　井上喜久男　瑞浪陶磁資料館研究紀要　第1号　昭和57年
研究紀要7　千葉県文化財センター　昭和57年
青戸、葛西城址調査報告Ⅱ～Ⅳ　葛飾区葛西城址調査会　昭和49～51年
後城遺跡発掘調査報告書　秋田市教育委員会　昭和53年
胡桃館埋没建物遺跡第1次～3次調査報告書　秋田市教育委員会　昭和43～45年　大瀬川C遺跡　岩手県教育委員会　昭和56年
尻八館調査報告書　尻八館調査委員会　昭和56年
一戸バイパス関係埋蔵文化財調査報告書Ⅱ　一戸町教育委員会　昭和57年
堀越城跡　弘前市教育委員会　昭和53年
浪岡城跡Ⅰ～Ⅳ　浪岡町教育委員会　昭和53～57年
史跡根城跡発掘調査報告書Ⅰ～Ⅲ　八戸市教育委員会　昭和54～57年
瀬田内チヤシ跡遺跡発掘調査報告書　瀬棚町教育委員会　昭和55年
末広遺跡における考古学的調査上・下　千歳市教育委員会　昭和56・57年
遠矢第2チヤシ跡遺跡調査報告書　北海道教育委員会　昭和50年
北海道洲崎館跡発見の中世遺物と頭骨　松崎水穂他　考古学雑誌　第67巻第2号　昭和56年
上ノ国八幡宮本殿調査報告書　高原孝　昭和55年
上ノ国村史　上ノ国村　昭和31年
続上ノ国村史　上ノ国村　昭和37年
史跡　上ノ国勝山館跡Ⅰ～Ⅲ　上ノ国町教育委員会　昭和55～57年
桧山南部の遺跡　上ノ国村教育委員会　昭和30年
日本歴史10・11　近世2・3　岩波書店　昭和50・51年
函館志海苔古銭　市立函館博物館　昭和48年
奥尻島青苗遺跡　図版編　奥尻町教育委員会　昭和54年


20
21
22
23
24
25
26
27
85
90
95
100
105
沢
M
L
K
J
I
57年度発掘区
56年度発掘区
54・55年度発掘区
0
20m

第1図　グリッド配置図

Ⅰ　調査の概要

本年度の調査対象は、館後方部の一部（空壕ＡＢ）を含めた館神八幡宮跡周辺部が主体で、総面積1,700㎡である。（第１図）

調査は、４月17日から10月14日までの150日間行った。しかしそのうち雨天等による作業中止は約30日間もあり、特に前半の５月、６月は比較的雨天が多く作業の遅れが目立った。

調査内容は、館神八幡宮跡周辺部1,150㎡、25ＩＪ区約450㎡（空壕Ａ・Ｂの検出）、25、26Ｍ区の樋状木製品出土地区（空壕Ａと寺の沢の接する部分）約100㎡である。又、今回は、昨年度ほぼ終了した27Ｋ２・７区の木製品出土地区において４ｍ近い厚さで堆積するⅢｂ層（魚貝層）の層位転写を行った。しかし、行うに当っては、約２ヶ月余りの期間を要した。それは、直立状態のセクション壁が、雨天続きのため地盤がゆるみ大規模に崩れ落ちた為で、この崩れ土の排除と多量に含まれている遺物の採集作業を行った後に層位転写を行なわざるえなかったためである。

八幡宮跡周辺部は、５月１日より期間終了まで行ったが、確認された遺構が予想外に複雑な重複関係をみせ作業を遅らせた。尚、同地区を調査するにおいては、事前（４月27日）に八幡宮跡発掘等にかかる安全祈願を行った。ついては、宮司松崎辰彦氏をはじめに神社役員の方々には多大な御協力を得た。

25Ｉ・Ｊ区は、前半（４月）と後半（10月）とにわけて行い約３週間を要した。同区は低地より高台へ排土を運搬しなければならない比較的重労働の作業が続く為、やや季節の寒い時期を選んだ。25・26Ｍ区は７月より開始し、約２ヶ月半を要した。同地区の調査は、主に沢の中であるため湧水が多くやはり作業の遅れが目立った。

環境整備事業では、昨年度終了した26・27Ｋ区（道路状遺構を除く空壕ＢとＣ、27Ｋ２・７・20区の木製品出土区等を中心とする地区）と本年度検出した空壕Ａ・Ｂ（25Ｊ区）の約1,200㎡について張芝を行った。（検出後埋めもどした空壕ＢとＣには，ジュニパー130本、コトネアスター90本を植栽した。）　（藤田　登）

Ⅱ　遺　　構

１．館神八幡宮跡（附図１、２、第２図）

現存の八幡宮跡は、直径約20ｍの円形土留を有し、その内部に今回の調査で発見された礎石建物跡がある。（第２図）

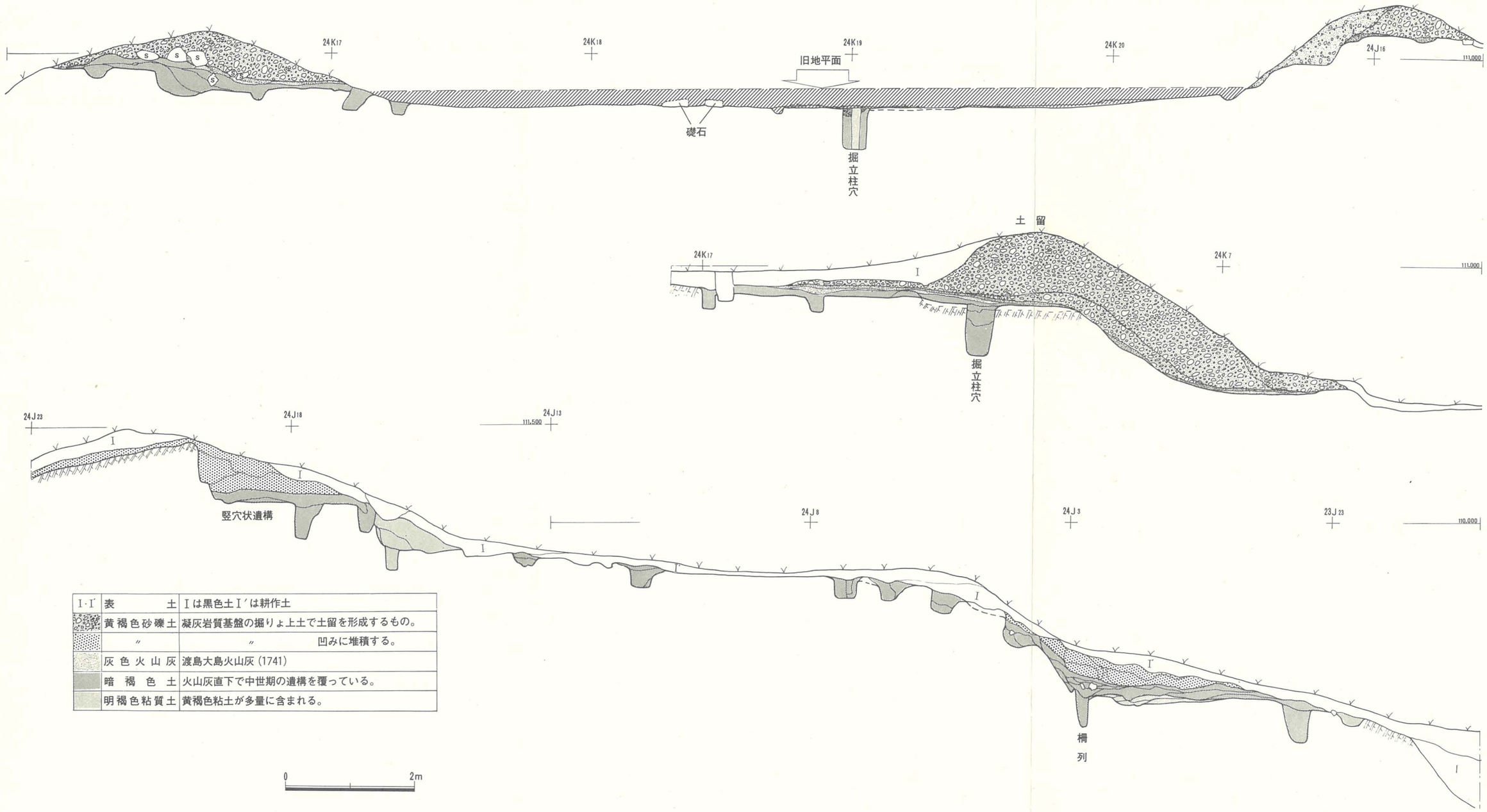
この建物跡は、５ｍ（４間）×3.5ｍ（３間）で、礎石列がよく遺存している。同建物の正面と思われる前面一帯に径５㎝～10㎝大の玉砂利が敷かれている。この八幡宮跡地は、昔から「館神様のお山」とか、「殿様の城があった所」として地元の人々には知られている。上ノ国八幡宮は、古くには文明五年（1473）武田信広が勝山館の館神として建立したもの（福山秘府より）に始まり、その後幾度かの修復がなされ、明和七年（1770）建立とされている現在の本殿が（板材に明和七年の年号が記されている）現上ノ国八幡宮に残されている。本殿の規模は2.15ｍ×1.84ｍで礎石建物跡よりは一回り小規模であるが、同本殿は、明治九年（1876）郷社になり、後に勝山館跡地より現在地へ移っている（上ノ国村史より）とあり、本建物跡は当時のものと考えられる。

礎石建物跡を囲む様にある円形土留は、南側は高さ約２ｍあるが北側は１ｍ程度である。南側の高い方は、基盤を削り出して形成しており、北側の低い方は、その削り土の盛土で形成されている。そしてこの土留の構築時は，白色火山灰が降下した時期（1741）より後のものとわかり、同じく火山灰に覆われていない礎石建物跡とほぼ同時期のものと思われる。（第３図）。尚、この土留上面一帯では、約1,300枚もの古銭（寛永通宝）が出土している。又、建物跡の東側約10ｍ離れた位置に石積の階段がある。長さ約５ｍ、幅2.5ｍで多少石の移動がみられるが５段～６段を有している。この階段遺構もやはり白色火山灰の直上にあり、同建物跡のほぼ同時期と思われる。（附図２）

２．掘立柱建物跡（附図２）

本調査で検出されたのは３軒で、（第１号～３号）全貌を明らかにできたのは、１軒のみである。第１号掘立は、規模が11ｍ（６間）×４ｍ（２間）で細長い建物である。北側の円形土留と一部重複している。柱間は、長軸列は1.5ｍ間隔で短軸列は２

第２図　礎石建物跡平面図



Ⅰ・Ⅰ′	表　　土	Ⅰは黒色土Ⅰ′は耕作土
	黄褐色砂礫土	凝灰岩質基盤の掘りょ上土で土留を形成するもの。
	〃	〃　　凹みに堆積する。
	灰色火山灰	渡島大島火山灰（1741）
	暗褐色土	火山灰直下で中世期の遺構を覆っている。
	明褐色粘質土	黄褐色粘土が多量に含まれる。

第３図　館神八幡宮跡セクション図

m間隔である。2号掘立は、北側の柱列が土留と重複しており検出していない。規模は9m（3間）×6m（3間）で1号よりやや幅広い。柱間も若干不規則で、長軸列は1間が1.5mだが残りの2間は約4mもある。短軸列は1間が約2m間隔である。南側の柱列は礎石列と重複している。尚、同建物跡の内部には長軸2m、短軸60cmで深さ約10cm程度の浅い長方形プランの土拡があるが性格は不明である。3号掘立は、長軸列1本と短軸列1本ずつしか検出していない（階段遺構と重複しているため）。それによると規模は、長軸列は9m（5間）、短軸列5.5m（3間）で2号とほぼ同規模のものである。柱間は、長軸列が1.5m、2m、2.2mとやや不規則だが短軸列はほぼ1.5m間隔である。柱穴はいずれも隅丸方形のプランを呈し、深さ60～80cmを有す。内部には角柱（寸法12～13cm）の痕跡を顕著に残している。中世期の建築様式によると、住宅は柱間が7尺で柱寸法は4寸2分を規準とした（建築学大系4－Ⅰ）。本遺構にもこれに類するものもあるが、全般に規則性がない。又、1間幅が6尺5寸の関西間（本京間）や6尺の関東間（江戸間）等があるが当時は主に前者にもとづいている。

3．柵列（附図2）

3号掘立の北側に位置し、その長軸列と方位を合わす。2本の柵列が交差しており、1本は長さ約18mでもう1本は約15mである。両者共角柱の掘立で、前者は7間分あり、後者は6間分である。柱間は前者が約2m～2.5mあり、後者は1.5m～2mである。両者の新旧関係は、前者が多少古い時期に構築されたものと思われる。（前者の掘込み面が後者のそれより下で確認された。）又、柵列に沿って石列の一部が残っている。これは、3号掘立と柵列の間には約1mの段差があり（柵列が一段下に位置する）、その立ち上り壁に幅約60cmの柵状の段を形成し、その段上に径約50cmの大礫（角礫）を並べているものである（PL4）。同遺構の構築時は前述の掘立柱建物跡と同時期のものと推定される。

4．竪穴状遺構（附図2）

本遺構は、56年度の概報で述べたものと同規模同形態のものである。本調査では5基発見されたがプランを確認したまでに留めた。前回の調査においても複数の重複関係にあって、いずれよりも古い時期の構築時であることが明らかにされた。（勝山館Ⅱ）今回も5基が全て重複関係にあり、1号、2号は1号掘立、3号は3号掘立、4号、5号は階段遺構と重複している。そして、やはり本遺構より古い時期の遺構が重複する例はない。ちなみに、今回の資料も含め確認された数は16基である。そこで、これらの分布状況について少しふれてみたい。

前回（55年度）は、八幡宮跡より北東へ約80m離れたこの21J・K区、さらに北東へ18、17K・L区で、本調査区と最も北東寄りの17K・L区との標高差は約8.2mもあり、距離にして約150mある。本遺構は、最大長約180mを測る舌状の台地上をほぼ縦断している調査区内に広く点在し、掘立柱建物跡が存在する地域に必ず重複して存在する。こうした分布状況の中で、住とする掘立柱建物跡と土倉と考えた場合の本遺構とのセット関係を示す配置はまずみられない。又、本遺構より出土した遺物は、鉄鍋2点（いずれも床面出土）だけで、その他の出土例はない。そしてもうひとつの特徴は、いずれも埋めもどされている。つまり、ある一時期を築いた竪穴遺構群がこの台地上で存在していた可能性が強いとすれば、本遺構を広義の意味で解釈したとしても掘立柱建物跡との共伴関係は考えられない。（藤田　登）

5．空壕A・B（第4図）

空壕Aは館神八幡宮跡の南方にあり、北西↔南東方向に70～80m走り、深さ2～3m幅6～7mの薬研堀のことをいう。尾根地を縦断しておりその比高は約12mである。

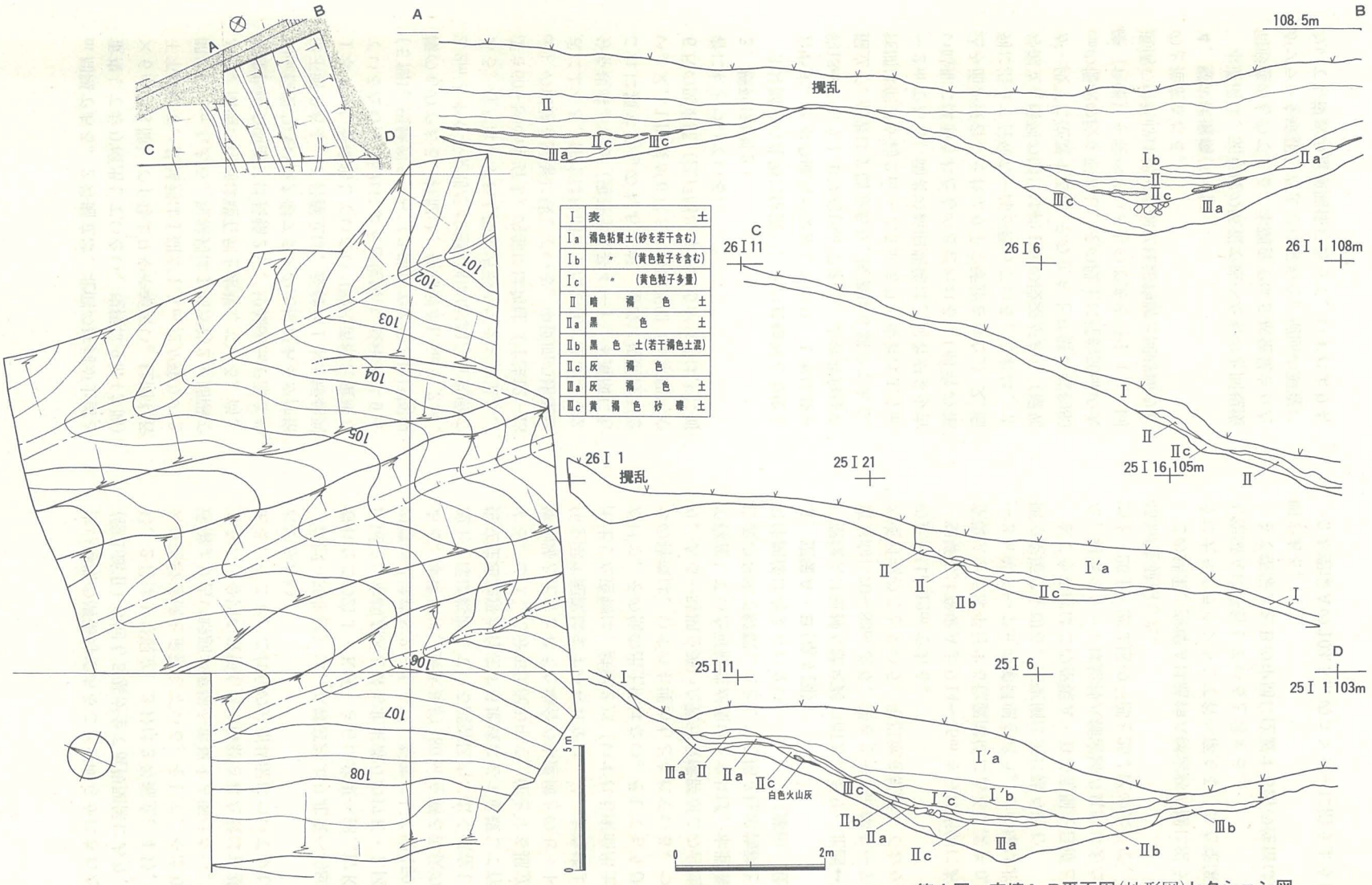
空壕Bは空壕Aより14～15mさらに南側にあり空壕Aとほぼ平行する位置関係にある。深さ0.5～3m幅5～7mの薬研堀を言う。この壕は北西側で空壕Cを切る。南東側は沢に落ち込む。

さて今年度はこの空壕A・Bの完掘を目標とした。対象グリットは館神八幡宮跡の真南にあたる25Ⅰ・26Ⅰ・26J区の一部と25J区の大半で、約450㎡を発掘した。

この結果、空壕Aは館神八幡宮跡の裾に沿うように大きくラウンドして谷へ落ちる。また空濠Bも空濠Aに平行していると言える。

さて空濠AとBの中間に位置する溝の性格は不明である。

なお空濠Aの103.5mのコンターに沿うように



第4図　空壕A・B平面図(地形図)セクション図

小路状遺構が検出された。幅40cm前後長さ８ｍほどである。空濠Ａをゆるやかに登るように施置されているようである。　　（前田正憲）

６．樋状木製品出土地区（25M、26M区）（第５図）

空壕Ａが寺の沢に接する地区において、一昨年東西へ伸びる樋状木製品が発見されたが、その用途あるいは周囲にどのような遺構があるのかを確認するため調査区を拡張した。

①　杭　　列

樋状木製品出土地点より東及び北東方向へ調査区を拡張していくと、ほぼ１ｍ毎に寺の沢川に並走するように打ちこみの丸木杭８本及び方形の板材５本が杭状に直立する形で発見された。尚この樋状木製品との関係は今までのところ不明である。来年度はさらに北東方向及び北方向へ拡張する予定であり杭列等の全貌及び樋状木製品との関係が把握できるものと思われる。

②　池

樋状木製品のやや東、空壕Ａ開口部において、東西、南北トレンチを入れたところ、深さ約120㎝程の池状遺構が確認された（SPB～B′、C～C′、D～D′、E～E′）。覆土としてはⅢＣ層（砂礫層）が主体でありⅢＣ９層まで細分される。そしてところどころに黒色砂礫層（黒色土＋砂礫、ⅢＣ４、ⅢＣ７）が入る。Ⅳ層は黒色土である。池の掘りこみ面はSPC～C′、D～D′間では樋状木製品をのせている黒色土であり、SPB～B′、E～E′間では基盤からとなっている。

③　集　　石

方形板材が４本打ちこまれている箇所において、渡島大島噴出の白色火山灰が多量に堆積しており、除去すると、石が円形に積まれている状況であった。またSPA～A′間において集石をのせる黒色土及び薄い黒褐色土を覆土とした落ちこみが観察された。この落ちこみ及び集石については今のところ性格不明である。

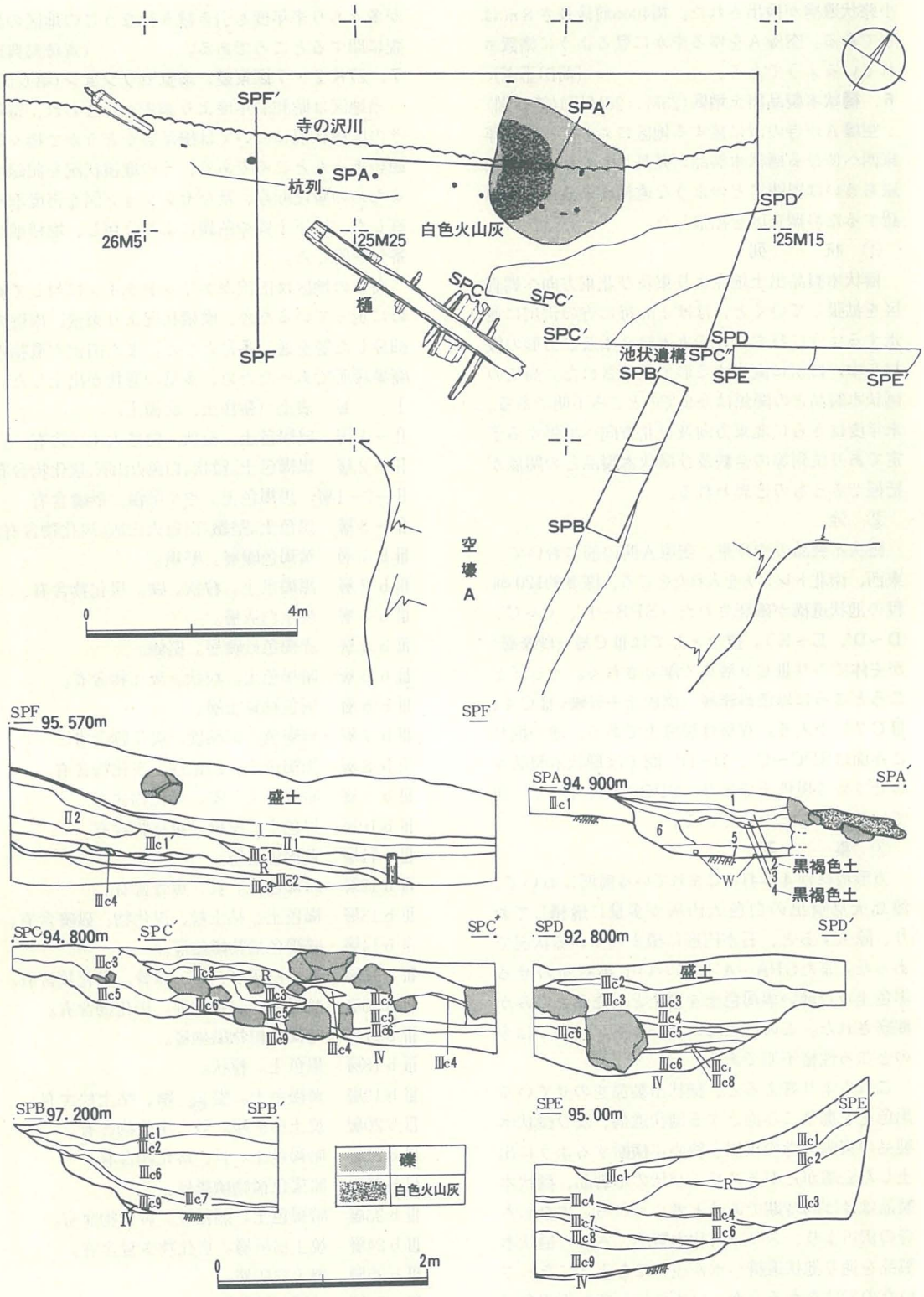
これらより考えると、樋状木製品をのせている黒色土を掘りこみ面とする池状遺構、及び樋状木製品の東側、寺の沢川を斜めに横断するように出土した先端がとがるスリッパ状の木製品、樋状木製品はほぼ同時期であると考えられる。すなわち寺の沢川より、スリッパ状木製品、さらに樋状木製品を通り池状遺構へ水が流れこむようになっていたのではなかろうか。いずれにしても不明な点が多々あり来年度も引き続き行なうこの地区の調査に期するところである。　　（斉藤邦典）

７．27Ｋ２・７区東壁、南壁セクション（第６図）

当地区は昭和55年度より調査が行なわれ、毎年その堆積状況については攪乱層かどうかで種々問題のあったところであり、その堆積状況を記録するための層位転写、及びセクション図を再度取り直した。以下土質や色調により分類し、堆積順に番号を附した。

尚この地区は旧沢がグリッドラインに対して斜めに走っているため、堆積状況より東壁、南壁の細分した層を通し番号とした。また旧沢が遺物の廃棄場所であったため、多量の遺物が出土した。

Ⅰ　　層　表土（耕作土、腐植土）
Ⅱ－１層　暗褐色土。粒状。白色火山灰含有
Ⅱ－２層　黒褐色土。粒状。白色火山灰、炭化物含有。
Ⅱ－2～1層　黒褐色土。やや堅緻。砂礫含有
Ⅱ－３層　黒色土。堅緻。白色火山灰。炭化物含有。
Ⅲｂ１層　黄褐色礫層。堅緻。
Ⅲｂ２層　黒褐色土。粒状。礫。炭化物含有
Ⅲｂ３層　焼土白灰層。
Ⅲｂ４層　赤褐色砂礫層。堅緻。
Ⅲｂ５層　暗褐色土。粒状。炭化物含有。
Ⅲｂ６層　灰色粘質土層。
Ⅲｂ７層　暗褐色。弱粘性。炭化物含有。
Ⅲｂ８層　黒褐色土。弱粘性。炭化物含有。
Ⅲｂ９層　暗褐色土。礫、炭化物含有。
Ⅲｂ10層　黒色土。堅緻。炭化物含有。
Ⅲｂ11層　黄褐色礫層。
Ⅲｂ12層　暗褐色土。貝、魚骨含有。
Ⅲｂ13層　褐色土。粘土粒、炭化物、砂礫含有。
Ⅲｂ14層　暗褐色植物繊維層。
Ⅲｂ15層　焼土白灰層、貝、魚骨、炭化物含有。
Ⅲｂ16層　暗褐色土。強粘性。炭化物含有。
Ⅲｂ17層　暗褐色植物繊維層。
Ⅲｂ18層　黒色土。粒状。
Ⅲｂ19層　黄褐色土。堅緻　礫、粘土粒含有。
Ⅲｂ20層　焼土白灰層。貝、炭化物含有。
Ⅲｂ21層　暗褐色土。貝、炭化物含有。
Ⅲｂ22層　暗褐色植物繊維層。
Ⅲｂ23層　暗褐色土。弱粘性。炭化物含有。
Ⅲｂ24層　焼上白灰層。炭化物多量含有。
Ⅲｂ25層　焼土白灰層。
Ⅲｂ26層　暗褐色植物繊維層。



第5図　樋状木製品出土地区(25M・26M区)平面図、セクション図

Ⅲｂ27層　黒色土。粒状。炭化物、焼土白灰含有。
Ⅲｂ28層　暗褐色植物繊維層。
Ⅲｂ29層　黒色上。粒状。貝、炭化物、焼上含有。
Ⅲｂ30層　黒色上。粒状。貝、炭化物微量含有。
Ⅲｂ31層　黄褐色土。弱粘性。ローム粒、炭化物焼土含有。
Ⅲｂ32層　褐色土。弱粘性。炭化物、焼土含有。
Ⅲｂ33層　黄褐色土。弱粘性。ローム粒、炭化物焼土含有。
Ⅲｂ34層　暗褐色土。堅緻。黒砂、貝含有。
Ⅲｂ35層　黄褐色砂礫層。貝、炭化物、焼土含有。
Ⅲｂ36層　暗褐色植物繊維層。
Ⅲｂ37層　褐色土。ローム粒、礫含有。
Ⅲｂ38層　暗褐色植物繊維層。
Ⅲｂ39層　焼土白灰層。
Ⅲｂ40層　暗褐色植物繊維層。
Ⅲｂ41層　焼土白灰層。
Ⅲｂ42層　黒色土。粒状。焼土粒含有。
Ⅲｂ43層　焼土白灰層。
Ⅲｂ44層　灰褐色土。粒状。貝、炭化物、焼土、ローム粒含有。
Ⅲｂ45層　暗褐色土。弱粘性。炭化物、礫含有。
Ⅲｂ46層　黒色土。粒状。炭化物含有。
Ⅲｂ47層　褐色土。粒状。ローム粒、炭化物含有
Ⅲｂ48層　灰褐色土。弱粘性。
Ⅲｂ49層　焼土白灰層。
Ⅲｂ50層　暗褐色植物繊維層。
Ⅲｂ51層　褐色土。粒状。ローム粒、炭化物含有。
Ⅲｂ52層　暗褐色土。砂粒含有。
Ⅲｂ53層　暗褐色土。砂礫含有。
Ⅲｂ54層　黒褐色土。砂粒含有。
Ⅲｂ55層　灰褐色土。弱粘性。
Ⅲｂ56層　黒褐色土。弱粘性。
Ⅲｂ57層　黒褐色土。粒状。ローム粒含有。
Ⅲｂ58層　灰褐色土。砂粒含有。
Ⅲｂ59層　褐色土。砂礫微量含有。
ⅢＣ１層　灰褐色砂礫層。ⅢＣ２層、灰褐色粘質土層。礫多量含有。ⅢＣ３層、灰褐色砂礫層。

以上のことよりこのⅢｂ層はⅡ層含有の1741年の渡島大島噴出の火山灰より下に堆積していて、館とほぼ同時期の堆積であり、また堆積状況を見ても人為的攪乱はなく、当地に徐々に堆積したものと思われる。尚、図上27Ｋ７区基盤は北壁崩壊のため実測不能であった。

層位転写について

土層断面を合成樹脂を用い、土ごと薄く剝ぎ取るものである。転写対象面は27Ｋ７区東壁面中央部、深さ４ｍ、幅１ｍ、対象面積は４㎡である。

１．準備…転写対象範囲を水糸等で区画し、その範囲内を移植ゴテ等を用いて平滑に削り出す。

２．合成樹脂選択…当地区では転写面の上半分Ⅲｂ40層より上は焼土白灰層、植物繊維層、褐色土であり、以下基盤までは壁面が沢底に近いため湧水状態であり、Ⅲb40層より上はトマックNR－51、以下基盤まではサンプレンWE を用いた。

３．作業工程について

Ⅰ．上半分Ⅲｂ39層まで

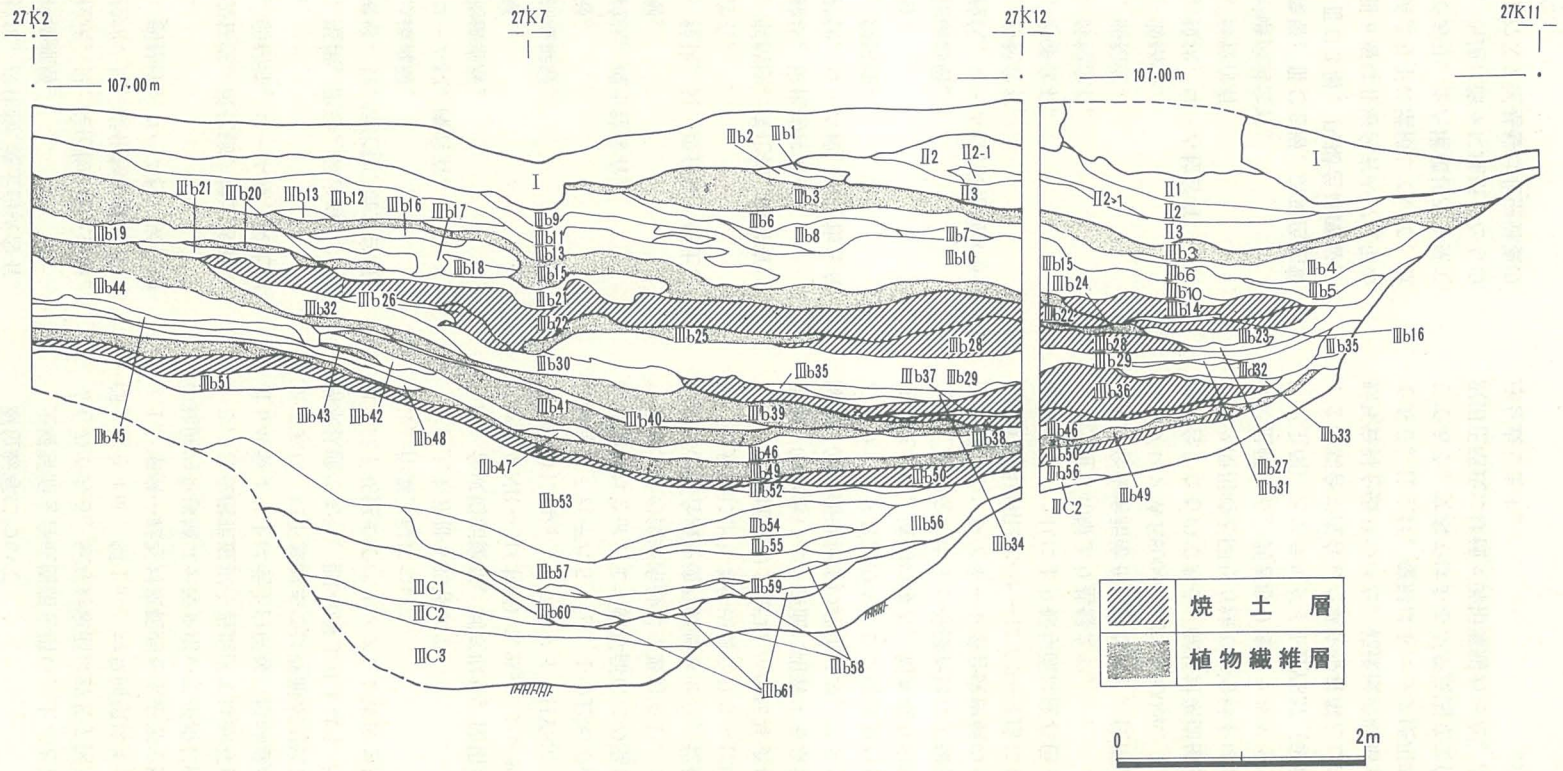
Ａ．合成樹脂塗布、剝ぎ取り。使用合成樹脂はトマックNR－51(主剤) 7.2kg、シンタロン＃370(柔軟剤)1.44kg、アラルダイトHY837（硬化剤）1.44kg、それぞれ５：１：１の比率で混合した。転写面積は２㎡。まず転写面にこの混合液をハケで塗り、その後寒冷紗にて裏打ちし、さらにもう一度この混合液を塗り乾燥させた。乾燥時間は通風、日光等により条件が異なり３～12時間である。

Ｂ．転写面より剝ぎ取った転写資料の仕上げ、整形。①放水により表面に附着する余分な土砂を除去。②脆弱遺物等の硬化処理。アクリル系樹脂のパラロイドB72のキシレン溶液をハケで塗る。③不足土壌、遺物の接着。剝ぎ取りの際欠落した土壌、遺物をエポキシ系接着材にて接着。④表面仕上げ。イソシアネート系合成樹脂のサンコールSK50を同剤用シンナーにて3～4倍に希釈して表面に塗る。これにより転写面は濡れ色を呈する。

Ⅱ．Ⅲｂ40層より基盤まで。

Ａ．合成樹脂塗布、剝ぎ取り。使用合成樹脂はサンプレン WE800cc、水12,000cc、1：15の割合で混合したものである。転写対象面積約２㎡。トマック使用時と同じ方法で寒冷紗をはさみこむように塗膜する。剝ぎ取り後アラルダイトGY1252JP（主剤）とアラルダイトHY837（硬化剤）を５：２の割合で混合した液を接着剤としてベニヤに転写資料を張りつけた。乾燥後の収縮を防ぐためである。仕上げ、整形はトマック使用時とほぼ同じである。文末ではあるが奈良国立文化財研究所、沢田正昭氏には種々御指導賜わった。深く感謝の意を表します。

（斉藤邦典）



第6図　27K2・7区東壁・7区南壁セクション図

Ⅲ 遺　物

本調査で出土した遺物は、陶磁器、鉄製品、銅製品(古銭を含む)、石製品、骨角器、木製品（漆器を含む）の他、人骨、獣骨、鳥骨、魚骨、貝殻、炭化米等、昨年と同様多量に得られた。中でも27Ｋ２・７区の採集した遺物は、人骨や獣骨、そして木製品が主で貴重な資料がさらに上積された。

１．館神八幡宮跡周辺部の出土遺物

舶載磁器（第７図～第９図）

ａ．白磁(第７図１～５)

１、２は坏である。１は菊花を呈したもので口径7.8cm、器高2.3cm高台を有す。口縁部微妙に外反する。

胎土は、灰白色で精良、釉調は乳白色である。見込みに一条の円圏を有し高台内部は施釉されていない。又、円圏部と高台内部には赤褐色の付着物がみられる。２は削り高台を有するもので、口径８cm、器高１.８cmである。口縁部はややひろがりぎみ、胎土は淡黄灰色でやや精良、細い黒色結晶を含む。釉調は灰白色で全面に施釉される。３は小皿で口径11.8cm、器高２.９cmで口縁部が端反りする。高台を有し見込み部分が多少凹む。胎土は乳灰色で精良、黒色結晶を含む。釉調は暗灰色で全面に施釉される。４、５は碗でいずれも口縁部破片のため図上復元。４は口径約12.5cmで、口縁部はほぼ直線的でややひらきぎみである。胎土は乳白色で精良、釉調は乳灰色でほとんどつやがない。５は口径約10cmで口縁部は直立する。胎土は乳灰色で精良、黒色結晶を含む。釉調は淡灰色である。

ｂ．青磁(第７図６～９)

６は盤の口縁部小破片で図上復元は不可能であった。胎土は乳灰色で精良、黒色結晶を微量含む。釉調は、淡緑色でやや厚めに施釉される。内面には劃花文を施す。７は稜花皿で口径12.1cm、器高2.9cmで口縁部は外反する。胎土は青みがかった灰色で精良だが見込みの肉厚部分の胎土は淡黄褐色を呈す。高台内部は施釉されない。口縁部内面と見込みに劃花文がみられる。８、９は碗である。８は口径12.6cm、器高５.５cmで口縁部直立する。胎土は淡黄褐色で黒色結晶を含む。やや精良、釉調はうすい青緑色で高台内部は露胎する。口縁部外面に劃花文を有す。９は口径13cm、器高７.５cmで口縁部は直立する。胎土は乳灰色で精良、黒色結晶を含む。釉調は淡青緑色で高台内部は露胎する、文様は外面一帯に蓮弁の劃文を施す。

ｃ．染付(第８図10～12、第９図13～18)

10～11は高台を有す端反りの皿で、12は碁筒底高台の皿である。10は唯一の完形品で口径12.8cm、器高２.５cmである。胎土は乳灰色で精良、釉調は青白色である。施文の青料は藍色で文様は、見込みに菊花文、外面には牡丹唐草文を施す。11は口径9.5cm、器高2.2cmである。胎土は乳白色で精良、黒色結晶を含む、釉調は青白色で青料は藍色を呈す、文様は見込に十字花文、外面は牡丹唐草文を施す。12は口径11cm、器高２.９cmである。胎土は乳灰色でやや精良、黒色結晶を含む、釉調は淡黄緑色で青料は青緑色である。文様は、見込みに寿字文、外面は文字を図案化したものを施す。13は盤である。口径は16.2cm、器高は２.７cmで、口縁部は段を有す。胎土は乳白色で細粒の黒色結晶を含む、釉調は青緑色で青料は藍色である。文様は口縁部内面は波涛文で外面は渦巻文が点列する。見込みは玉取獅子文を施す。体部は凹みを有し、連弁文を施す。14は赤絵である。推定される器形は皿で口縁部は端反り。胎土は乳白色でやや粗，釉調は淡赤灰色を呈す。文様は濃赤褐色で唐草文と思われる。15は碗である。口径は10.6cmで口縁部はほぼ直立する。胎土は乳白色で黒色の結晶を含む。釉調は内面が青白色、外面が乳白色を呈す。文様は口縁部外面に一条の界線を施すだけである。16は、口径12.8cm、器高６.２cmで口縁部が直立し見込みが凹む、胎土は乳白色で黒色結晶含む。釉調は青白色で青料は青である。文様は見込みに牡丹唐草文、胴部外面は唐草文と鳥文を施す。17、18は坏である。17は計測不能、18は口径６.４cm、器高２.９cmで口縁部がわずかに外反し、見込みが凹む、いずれも胎土は白色で精良、釉調は乳白色で青料は藍色(18はやや薄い)、文様は、外面はなく、見込みに果実文、口縁部に鋸歯状文（四方襷の変形か）を施す。

国産陶磁器(第10図～第12図)

ｄ．瀬戸，美濃，唐津，楽焼、(第10図)

20は坏、19、21～23は皿、24～26は碗（25、26

は天目である。) 20は完形品で口径5.6cm、器高1.5cmでやや肉厚、胎土は赤褐色で粗、釉調は淡黄緑色である、見込みは印花文を施す。19、22は明瞭な高台を持ち口縁部が端反のもの、21は極めて浅い高台で口縁部はほぼ直立するもの、23は高台を有すが口縁部が直立する。19は、径約8.6cm、器高2.3cmで多少厚目、胎土は淡黄褐色で粗、釉調は淡緑色で全面にかかる。見込みに印花文を施す。21は完形品で口径10.3cm、器高2.1cmでやや肉厚、胎土は淡黄褐色で粗、釉調は黄緑色で見込みは露胎している。口縁部に炭化物が付着しており灯明皿と思われる。22は口径11cm、器高2.5cmで口縁部が極端に薄い。胎土は乳灰色でやや粗、黒色結晶を若干含む。釉調は淡黄緑色である。23は口径10.6cm、器高2.4cmで胎土は乳灰色で粗、釉調は黄緑色で高台付近は露胎している。27は唐津の碗と思われる。胎土は暗灰色でやや粗、白色結晶を含む。釉調は乳黄色で胴部下半と高台内部の露胎部は自然釉がかかる。28は楽焼の碗と思われるものでわずかな破片だけである。図上復元より口径は約10cmを測る。胎土は赤褐色で粗、白色結晶を含む。釉調は茶褐色を呈す。

e. 盤、擂鉢、壺、甕(第11図)

29は盤で4分の1程度の破片なので図上復元である。口径は約33cm、器高6.5cmである。口縁部はやや内弯ぎみで上部がくの字状に反り内側が張り出す(縁を内側へ折り返している)。底部は若干あげ底だが高台はない。胎土は淡赤褐色でやや粗、灰白色の結晶を含む。釉調は暗い緑色でまだら状に内、外面に施釉されるが口縁上部(口唇)は自然釉である。やや小型のものがもう一点出土しているが計測不能であった。胎土はほぼ同じで、釉調は淡黄緑色を呈し、均一に施釉されているが29同様に口唇部は自然釉である。30は擂鉢で、口径35.3cm、器高11.5cm、約3分の1を欠損する。色調は乳黄色で外面壁は剝落がひどく内面壁も卸し目が上半部にわずかに残っている程度で浅い凹みを有すほどに摩耗している。又内面の底部付近を中心に約1mmの厚さで炭化物が付着しており鍋としての用途もかねていた様である。31は鉢で口径約18.8cm、器高5cmである。口縁部はくの字状に反る見込み部分は段を有し凹む。高台内部は丸味をもち高台周辺には幅約1cmの削りが環状に入る。胎土は橙褐色でやや粗、釉調は灰緑色で内面は全面に施釉されるが外面は胴部上半までで、下半部から高台内部は露胎する。32は壺で口径約10.5cm、最大径25.2cmを測るが器高は不明、胎土は淡灰色で小砂を含みやや粗、内面は無釉だが外面は自然釉の赤褐色が主だが部分的に極めて薄く緑色素の釉が施されている。33は比格的小型の甕である。口径22.2cm、最大幅は胴部上半で23.5cm、器高27cmを測る。胎土は淡赤褐色を呈しやや粗で小砂を含む。内面、外面共自然釉で淡灰褐色を呈す。

f. 徳利(第12図34～37)

34～36は頸部が長く体部が丸味を帯び肩が多少張るもので、37は頸部が短かくやや筒状のものである。34は、口径4.2cm、最大幅(肩部)15.8cm、器高26.9cmである。胎土は淡灰色でやや精良、黒色結晶含む。釉調は淡灰色で外面と頸部内面に施釉される。35は染付徳利である。36は、釉調が外面は緑褐色を呈し、内面が茶褐色を呈すもので体部の器厚が極めて薄い。37は鉄釉の徳利で釉調は黒褐色を呈す。

g. その他(第12図38～39)

38は千鳥香炉である。口径6.8cm、器高6.1cm高台を有すが3個の足がつく(地につかない)。胎土は乳灰色でやや粗、釉調は外面が淡緑灰色で内面が乳灰色を呈す。39は染付の水滴と思われる。7.8×7.8cmの正方形で高さ5.1(現存)、上部に注口がつくと思われる。胎土は乳白色でやや精良、黒色の結晶を有す。釉調は乳白色で底面だけ露胎する。文様は格子状のものや唐草等を施している。

鉄製品(第13図)

a. 小札(1～5)

長さ、幅等が多少異なるがいずれも穴は7個ずつ2列の14個と思われる。

b. 釘(6～13)

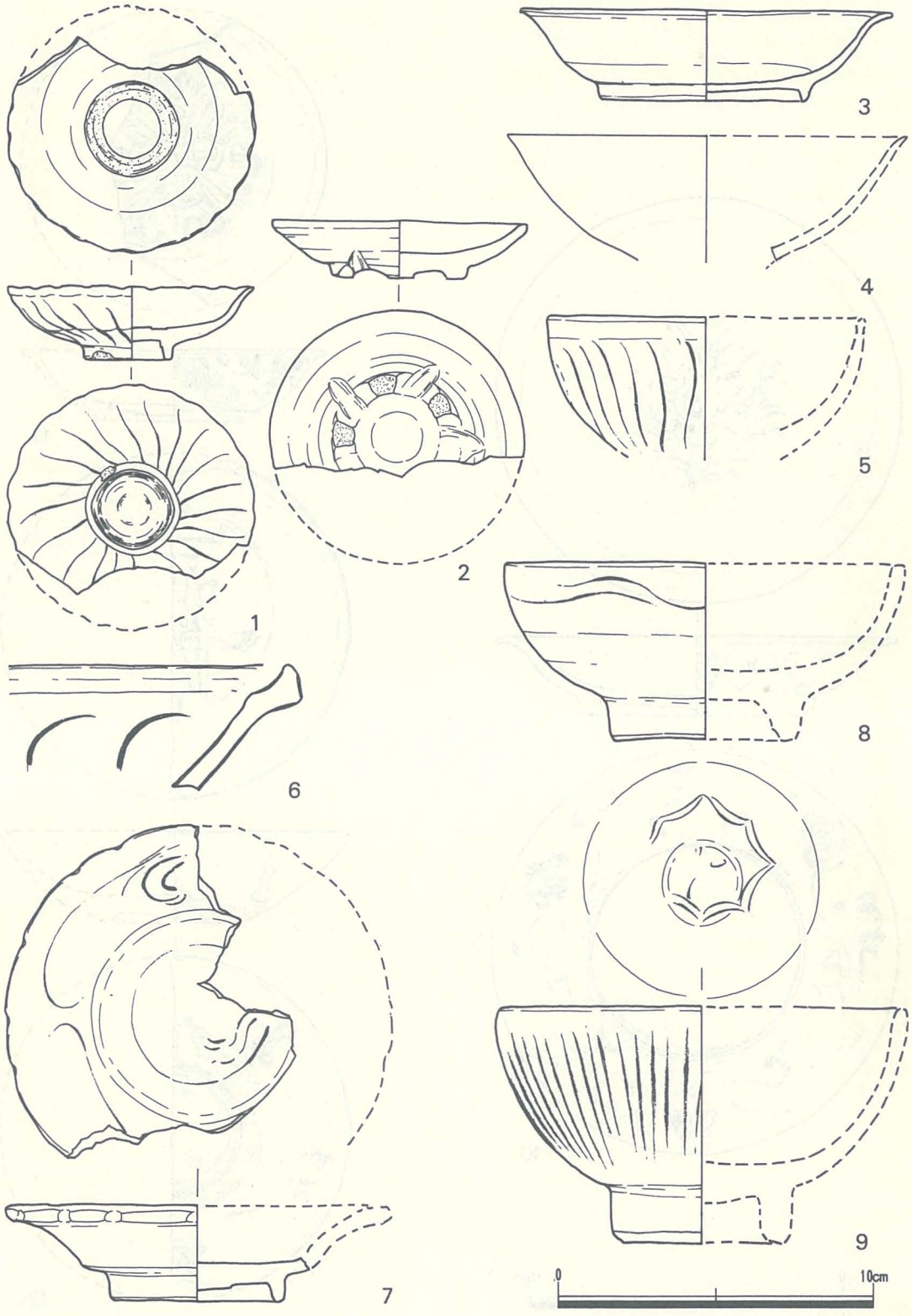
いずれも角釘で長さは5cmのものから、約11cmのものがある。完形品には全て傘が顕著にある。板材が残存するものはない。

c. 鎹(14～15、19～20)

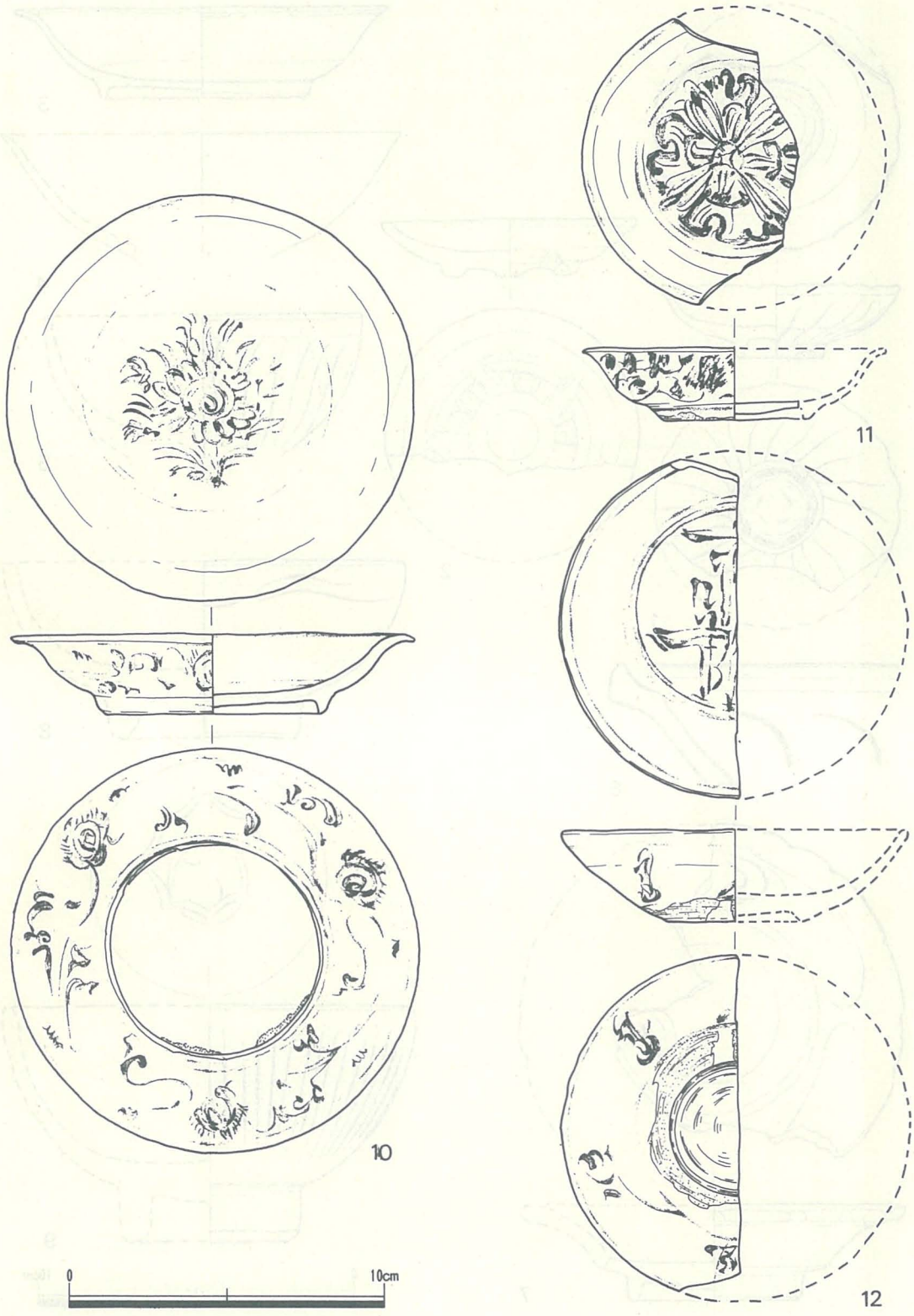
14は、長さ約11cmで尖頭部を欠く、15は長さ約7.5cmで片方の尖頭部を欠く、19、20は扁平なもので、19は長さ約5.5cm、20は長さ約7.7cm(現存)でいずれも尖頭部はほとんど欠く。

d. 環(16～18)

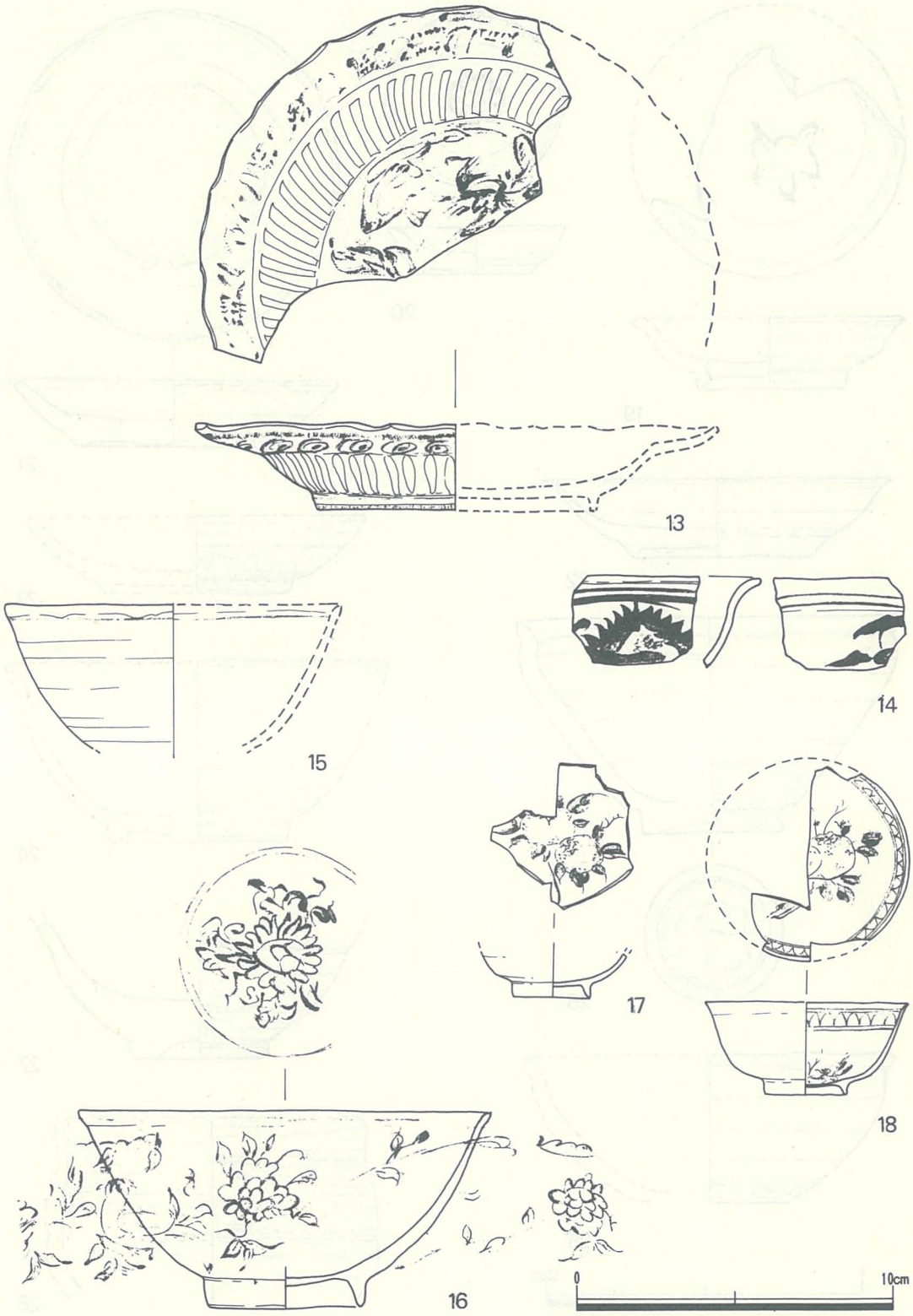
16は楕円形を呈し長軸4.2cm、17、18はほぼ円形で、17は径寸3.2cm、18は2.2cmである。16、



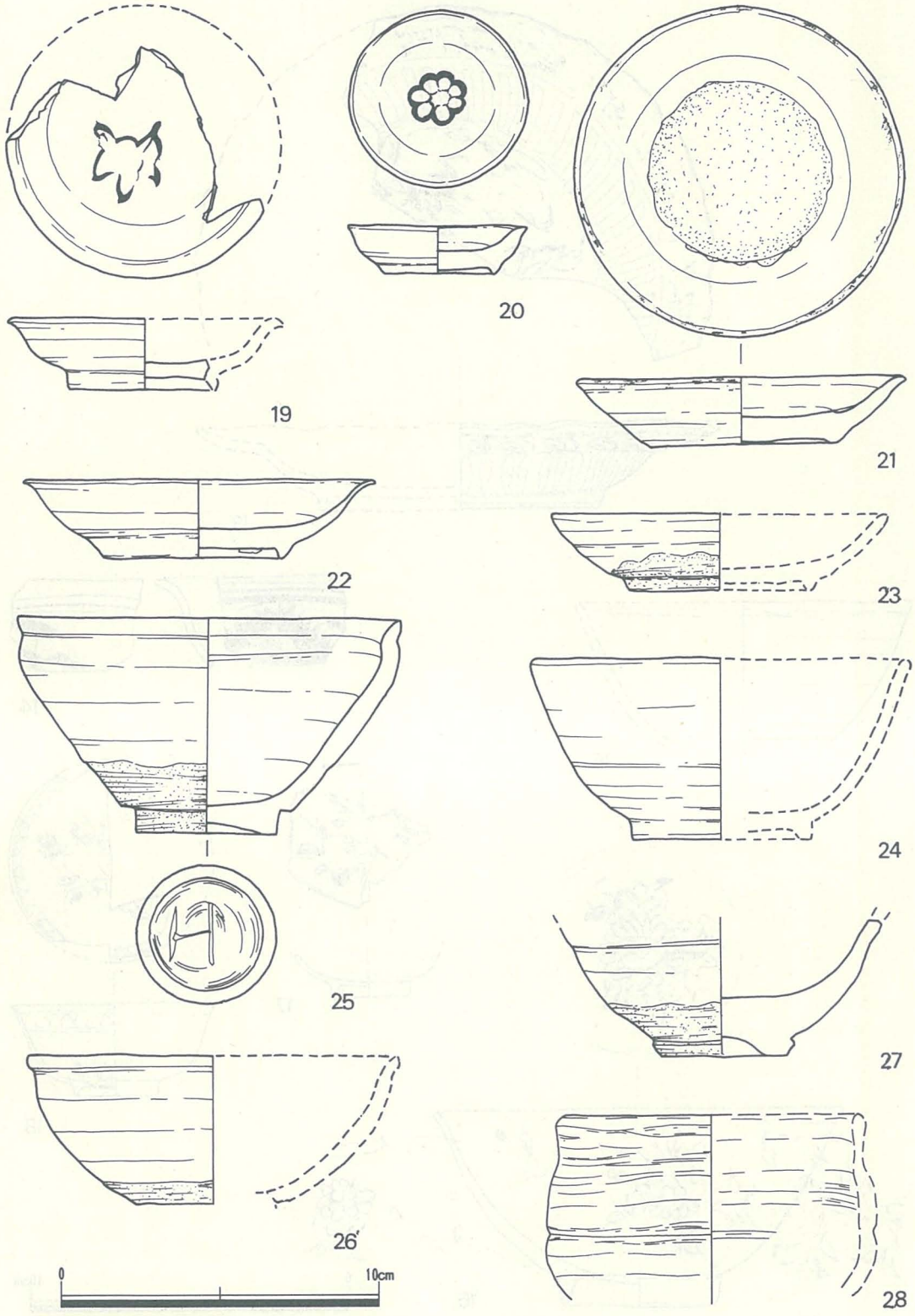
第7図　舶載磁器(白磁1～5青磁6～9)



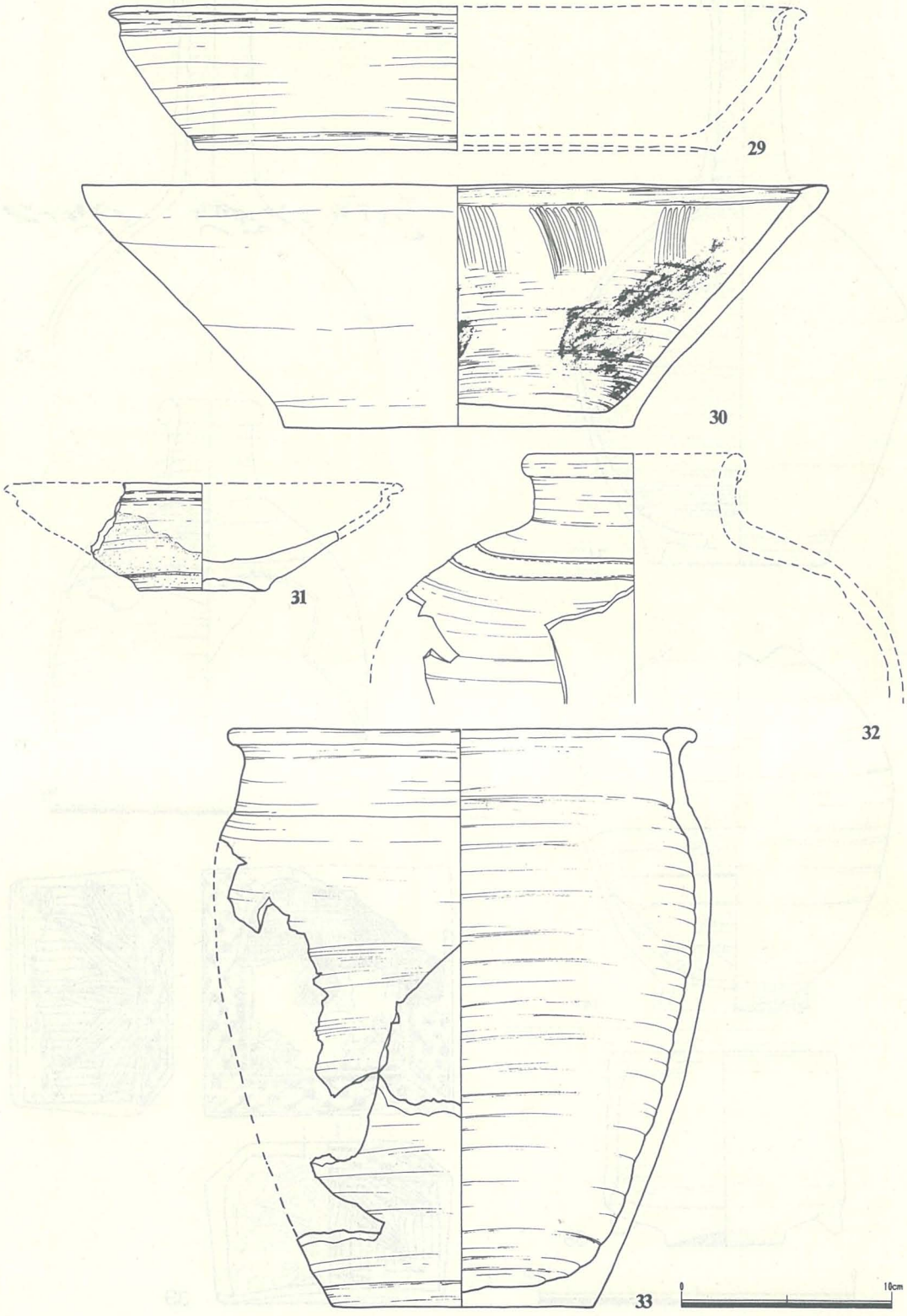
第8図　舶載磁器(染付皿)



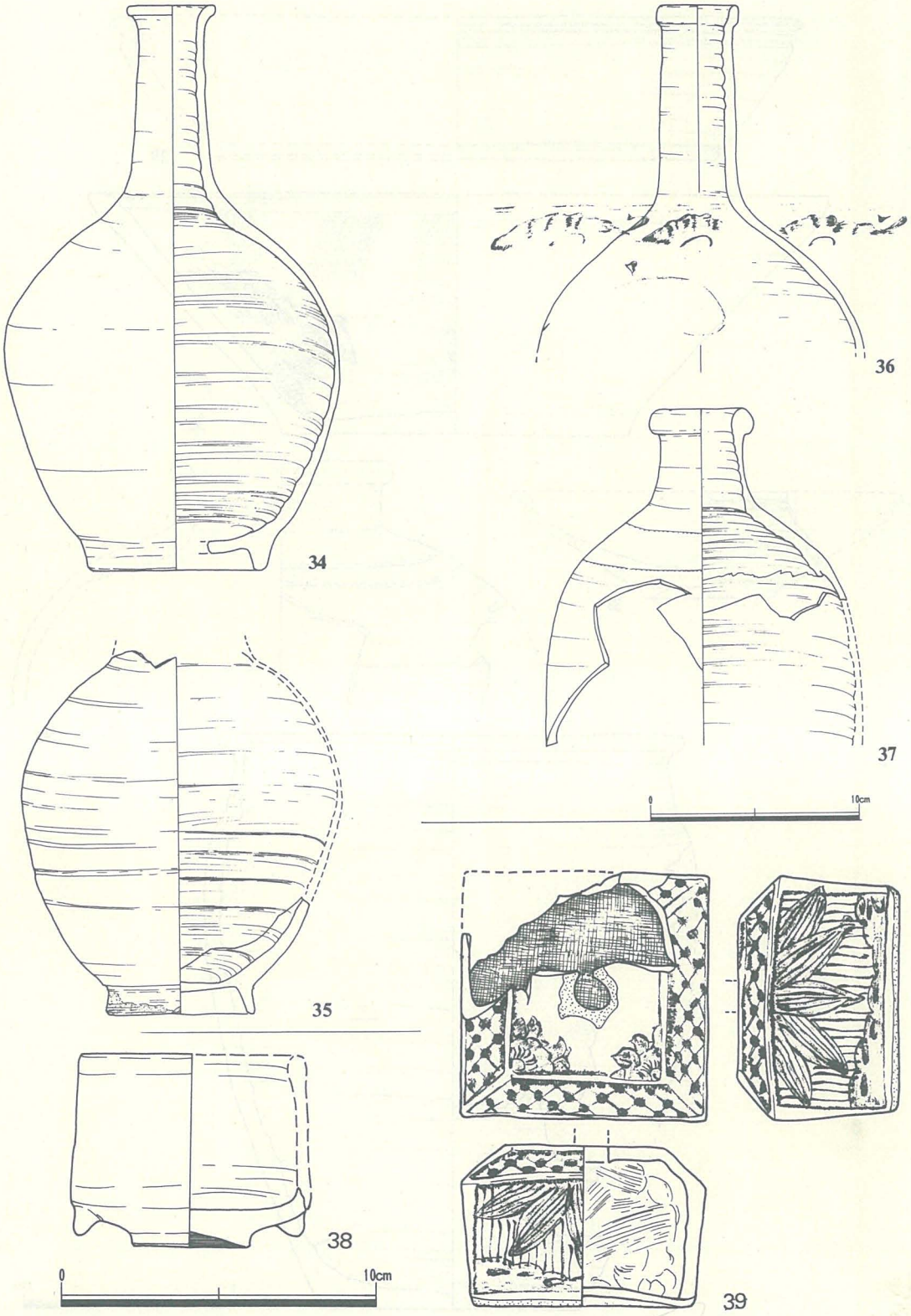
第9図　舶載磁器(染付皿13碗15・16赤絵14盃17・18)



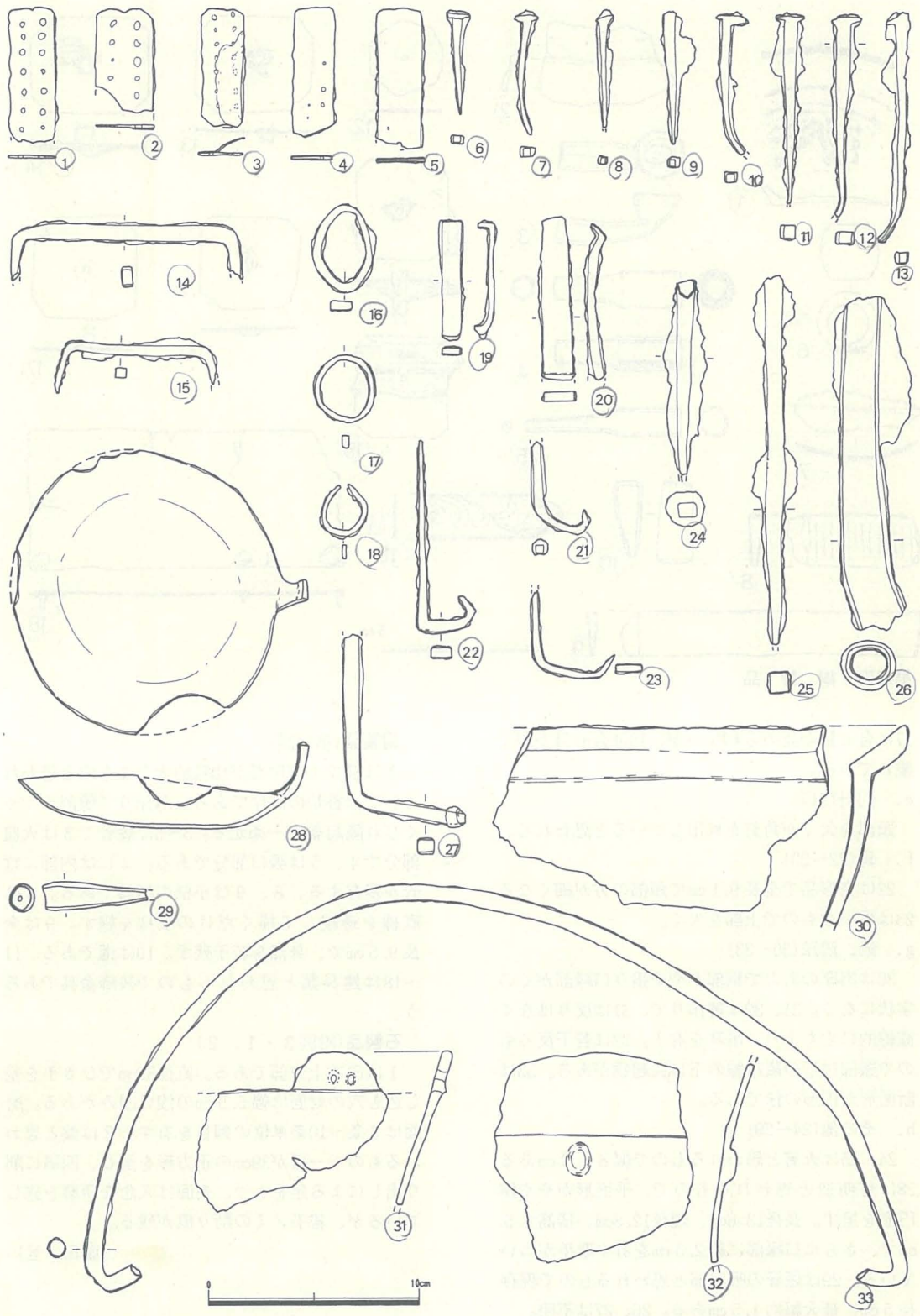
第10図　国産陶器（瀬戸・美濃19～26唐津27楽焼28）



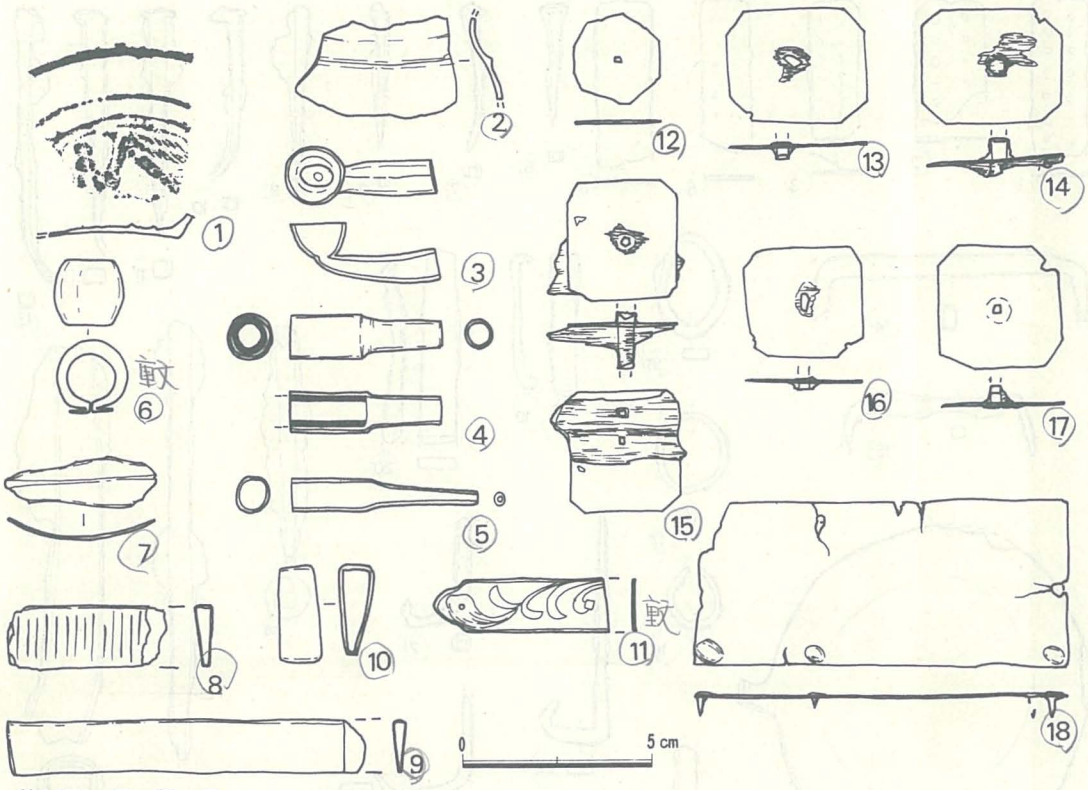
第11図　国産陶器(盤、擂鉢、壺、甕)



第12図　国産陶磁器（徳利、香炉、水入）


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
0
10cm

第13図　鉄　製　品



第14図　銅　製　品

17は合せ目が認められないが、18は合せ目が若干離れている。

e．釣針(21)

頭部を欠くが角釘を利用していると思われる。

f．鉤(22～23)

22は完形品で全長9.1㎝で頭部の方が細くなる。23は扁平なもので上部を欠く。

g．鍋、鍋鉉(30～33)

30は肉厚のもので胴部がやや張り口縁部がくの字状になる。31、32は薄作りで、31は反りはなく直線的に立ち上り、吊耳を有す。32は若干反るもので頸部付近の隆起線の下に突起物がある。33は断面形が円形の鉉である。

h．その他(24～29)

24、25は火箸と思われるもので幅8～9㎝ある。28は灯明皿と思われるもので、平面形がやや楕円形を呈す。長径13.6㎝、短径12.8㎝、器高2.5㎝で、さらに口縁部に約2.5㎝を有す取手がついている。29は煙管の吸口部と思われるもので現存長5㎝、最大幅約1.5㎝ある。26、27は不明。

銅製品(第14図)

1は鏡の小破片だが比較的大きなものと思われる。2は香炉の破片である。薄作りで頸部がややくびれ隆起線が一条走る。3～5は煙管で3は火皿部分で4、5は吸口部分である。4には内部に竹管が残存する。8、9は小柄の柄部である。8は直線を連続して描くだけの文様を施す。9は全長9.5㎝で、身部を若干残す。10は鉗である。11～18は建具類と思われるもので装飾金具であろう。

石製品(附図3・1、2)

1は臼で上臼部である。直径32㎝でひき手を差し込む穴の対面は幅5.5㎝の浅い凹みがある。磨面は6条～10条単位の卸目を有す。2は盤と思われるもので一辺が39㎝の正方形を呈し、四隅に削り出しによる足をもつ。表面は入念な研磨を施しているが、若干ノミの削り痕が残る。

(藤田　登)

2．勝山館跡における出土遺物の小括

勝山館跡出土の遺物については各年度の事業概報その他で一部紹介している[1]。ここでは館神八幡宮跡南方の旧沢地内で検出された膨大な遺物廃棄層の中心と目される27Ｋ２・７区を本年度基底部迄完掘したのを機に同区及び周辺出土品を概括した。本遺跡における出土傾向と分類の大要を示すことにより、遺跡内各地区の特徴把握の目安とし他方各地類似遺跡との比較資料としてこれを呈示し、諸先学のご教示を頂戴して本遺跡の一層の分析を図りたく願うものである。

a．陶　磁　器

第21折込図第１表はここで扱った陶磁器の一覧である[2]。舶載品より国産品の方が多い[3]。舶載品は白磁、染付、青磁、赤絵の順に多く、国産品は大半が美濃の灰釉といわれるものである。全製品を通じても美濃灰釉製品が最も多い。器種別では全体に皿が圧倒的であるが、国産品に比し舶載品中の碗の率が高い。これは青磁及び染付の碗の量によるものであるが、特に青磁碗の比率が高い。

21図表、２は出土した陶磁器のうち表１下段の5,035点を分布図に示したものである。大半が空壕Ｃ外側の旧沢地内に集中している。空壕Ａの覆土からは殆んど出土していない。旧地形を破線で示している部位は未発掘区である。

１．分　　類[4]

(1)　**青磁**：碗、皿、小坏その他が出土している。(第15図、PL14)

碗　端反りするⅠ群と直口するⅡ群があり後者には無文のＡと蓮弁文を有するＢがある。

第Ⅰ群　端反り口縁碗（ＰＬ14―１～５）口径14cm（１～３）、12～13cm（４、５）がある。１は内面体部に印花文がある。５は浅く器高4.5cm余と推定され、腰折皿とすべきかも知れない。高台裏の釉を拭っている。

第Ⅱ群Ａ　直口縁無文の碗（PL14－６～10）口径14×底径５cm程の深めの碗である。高台は各種が見られる。８は畳付，高台裏が露胎、９は高台裏の釉を拭う例、10は高台内側迄施釉され高台裏が露胎の例である。いずれも見込みに印花文がある。本遺跡概報（以下概報と記す）Ⅱ９図29、30も同類である。

第Ⅱ群Ｂ　直口縁蓮弁文碗（第15図１、ＰＬ14―11～21）３類に分かれる。ⅡＢ１としたものは篦描きの蓮弁を有するものである(11～13)。14は巾広く篦彫りを施すもので本類に含まれるかと推する。ⅡＢ２は簡略化した剣先蓮弁を有する全面施釉の碗で高台裏の釉は拭われる（15図１、ＰＬ14―15～17、21、概報Ⅱ９図27)。口径14cm程で丈高の大形のもの（ＰＬ―17）と口径12×底径５×器高67cm程のもの（図―１）がある。蓮弁や剣先の形状に各種があり16のように広い間隔で沈線を施す例もあるが一括した。ⅡＢ３は、口縁下に雷文の省略形と思われる横線が描かれる碗である(PL―18～20、概報Ⅱ９図28、Ⅲ12図14、15)。口径12×底径５～６×高５cm程の低平で口縁内抱え気味の器形である。ＰＬ―20は櫛状具による４条の波状沈線が描かれる例で白磁にも類例がある。Ⅲ―14、15の例は高台が外に開き畳付き、高台内が露胎で削り痕を残したままとなっている。

皿　稜花皿と丸皿があり95％が稜花皿である。いずれも大小の別がある。

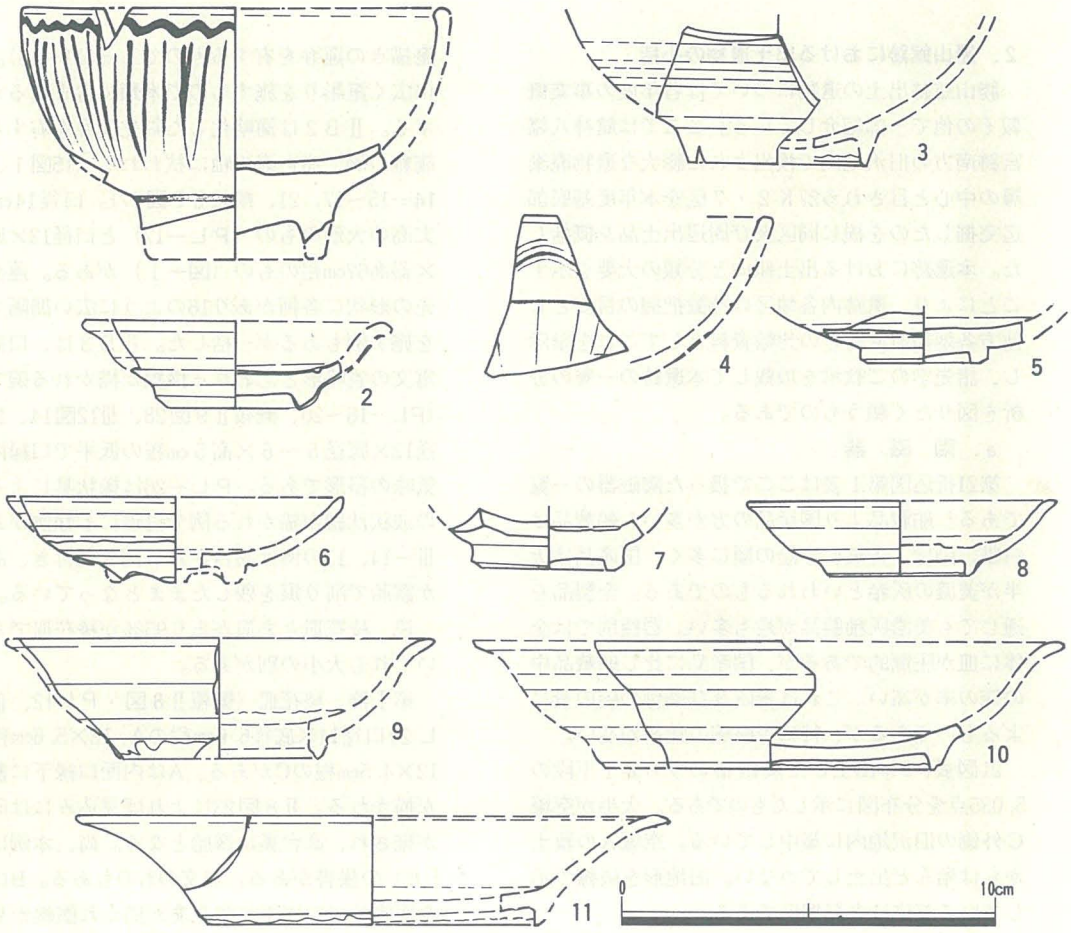
第Ⅰ群　稜花皿（概報Ⅱ８図・ＰＬ12、Ⅲ―ＰＬ２)口径14×底径6.6cm程のＡ、12×5.6cm程のＢ、12×4.5cm程のＣがある。Ａは内面口縁下に劃花文が描かれる。Ⅱ８図23によれば見込みには印花文が施され、高台裏は露胎となる。尚、本例は裏に「大」の墨書がある。無文のものもある。Ｂは内面全面施釉で口縁下に劃花文が描かれ圏線が見込みに１条繞る。一部高台迄釉がかかり、高台内が露胎のもの、見込みに圏線１条が繞りその中央と高台畳付以下露胎のものがある。Ｃは内面口縁下に複数１単位の劃線を施し見込み中央、高台畳付以下露胎である。見込みに圏線が繞るが釉がそこ迄いたっていないものもある。Ｂ・Ｃのいずれに属するかは不明であるが、無文のものもある。

第Ⅱ群　丸皿（概報Ⅱ９図）口径14×底径6.0～6.6cm程のＡと12×5.6cm程のＢがある。Ⅱ９図25は全面施釉で高台裏を拭うものである。口縁下内外面に劃花文を描く。見込みに圏線が１条繞る。同26は見込みの釉を拭うものである。

盤その他　（第15図２、PL14―22～30）その他のものとしては、盤（ＰＬ―22、23、28)小坏(図―２、ＰＬ―27）香炉（ＰＬ―24～26）袋物（同29）獅子？（水注等の一部か―同30）等がある。

(2)　**白磁**：碗、皿、小坏、偏壺等が出土している。(第15図、PL15)

碗　深目のⅠ群と器体内抱え気味に立ち上がる



第15図　舶載磁器（青磁、白磁）

低平なⅡ群がある。

第Ⅰ群　見込み中央が高台際の位置よりも下る蓮子碗に近い器形と推定される深目の碗である（図－3、PL－1～3）。1、2は口縁部破片で口唇の厚さが1.5mmと下端の厚さの½以下に減じられ、角ばった形状を呈す。3は胴下部の破片で、見込みから緩やかに立ち上るようである。高台畳付、内が露胎となる。畳付は面取りがなされる。

第Ⅱ群　器体が内抱え気味に立ち上がり外面に蓮弁や雷文の省略形を沈線で施す低平な碗で口唇が厚い（図－4、PL－4～6）。PL－4は口縁下2cmの巾を横線で劃して文様帯とし、入組文風の崩れた雷文が繞る。図－4、PL－5、6は同様に1又は2条の横線で文様帯を劃し、上半には櫛状具による3～4条1単位の波状文を施し横線下は縦に1cm程の巾で沈線を垂下する。5は更に下位にも横線を繞らし格子状を呈する。7は横線が器体全面を繞るらしい。

皿　V群に分類した。

第Ⅰ群　高径8.5×底径4cm程で削り出し高台の皿で高台が露胎の1（図－5、6、PL－9）と全面施釉の2（図－8、PL－10、概報Ⅲ11図4）がある。図6は抉りのある切り高台のもの5は輪高台のものである。6には重ね焼の痕が見込みと畳付きにある。概報Ⅲ11図4は切り高台、図－8は糸底[5]見込み蛇の目である。

第Ⅱ群　端反り口縁糸底で高台、見込みが露胎のもの（図－9、PL－11）。

第Ⅲ群　端反り口縁糸底全面施釉の皿、口径16×底径9cmの大形のもの（図－10、PL－12）、同13×7、12×6、11×6、8.5×5.6等があるが、12×6cmのものが99%を占める。高台裏に銘文を有するものも本群に含めた。

第Ⅳ群　底部から一気に外反する揚底状の皿、

口径16×底径9㎝の大形と(図－11、PL－13)、12×6.5㎝の二者があり後者が97%を占める。

第Ⅴ群　輪花皿である。(概報Ⅲ11図5)

第Ⅵ群　面取りの畳付をもつ厚手底部破片（PL－14～16)。高台の高い例があり盤かと推される。

小坏　3群に分類した。

第Ⅰ群　削り出し、露胎の高台で抉りのある切り高台八角坏(概報Ⅲ11図9)、輪高台見込み蛇の目のもの（図－7、PL－8）がある。

第Ⅱ群　全面施釉糸底の高台で張り出した腰部から立ち上がる。見込み蛇の目（概報Ⅱ5図10)。

第Ⅲ群　一気に外反する揚底全面施釉の坏。畳付露胎。概報Ⅲ11図1は見込み蛇の目で高台内・裏に放射状の削り痕がある。

その他、偏壺が出土している（概報Ⅱ5図11)。

(3)　**染付：**碗、皿、小坏が出土している。

碗　6群に分類した（第16図、PL2、16～18)。

第Ⅰ群　削り出し肉厚で外開き気味の高台の低平な碗（17図1、PL2、概報Ⅱ7図16)。畳付きを平らにし、高台内、裏に削り痕を残す。外面口縁下に圏線が1条繞り、折枝文風の文様帯が上半に横環する。内面口縁、見込みに圏線を1条繞らし中央に福字を行書体で配している。

第Ⅱ群　端反り口縁、畳付き面取り、露胎のもの（図－2、PL16)。内外口縁に圏線を有し外面体部文様帯、腰部文様帯を有する1（PL－1～16）と口縁に波濤文帯を有する2（PL－17）がある。Ⅱ－1体部文様帯には唐草文・丸文等の連続文様が囲繞するものと、折枝、蝶、梵字？、人馬、飛雲等の意匠文を配するものがある。腰部文様帯には如意頭状の渦文、変形した喇嘛式蓮弁、圏線等がある。

図－2、PL－10は概報Ⅱ8図21である。

第Ⅲ群　所謂蓮子碗のもの（図－3～6、PL17－1～18)。本群は口径15.5×底径6.0×器高5㎝程の低平で高台畳付きが角に面取りされ露胎のA、15.5×5.2×6.5㎝程の高台が小さく丈高で畳付きが三角形のB、12×4×5.5㎝程の小形のC(図－6)に分けられる。いずれも口端は角張る例が多い。

第Ⅲ群A　(16図3、4、PL－1～9）口縁内外に圏線を繞らし体部、腰部文様を施す。体部文様は唐草文、追羽根状に丸を重ねたもの、梅月文、アラベスク文？等がある。唐草文の腰部には喇嘛式蓮弁の略形、渦文状のものが、アラベスク文の口縁には波濤文が施される。

第Ⅲ群B　(図－5、PL－10～13）文様構成はⅢAと共通するものが多いが、本遺跡では、口縁に波濤文帯を有し体部に芭蕉葉文を施す例が大多数を占める（概報Ⅱ7図19、Ⅲ12図12)。PL17－13はこの変形と思われる。PL－15～18はA、Bの識別ができないものである。概報Ⅱ7図18は55年度建物跡から出土した本群に含まれるもので梵字が外面・見込みに配される。

第Ⅳ群　腰の張る角ばった薄手の碗（図－7、PL21～27)。口縁に波濤文帯を配し体部にアラベスク文を描く。22は腰部に如意頭を細く線描きする。23～27は器厚、口縁形態から本群としたが他に例を知らずむしろⅤ群に属するのかもしれない。

第Ⅴ群　所謂饅頭心のものである（PL－19、20、28～31、40)。見込みに人物、唐草？文等を描く。体部は内外に圏線の繞るもの、内面のみのもの等がある。19、20、40も本群と思われる。

第Ⅵ群　端反り口縁薄手硬質感のもの(34～39)。圏線を有するものと外面に草花文等を描き内面口縁に四方襷文を施すものがある。圏線の数等は数種ある。34～36は第Ⅱ群に比し小形丈高のものであり本群に含めた。

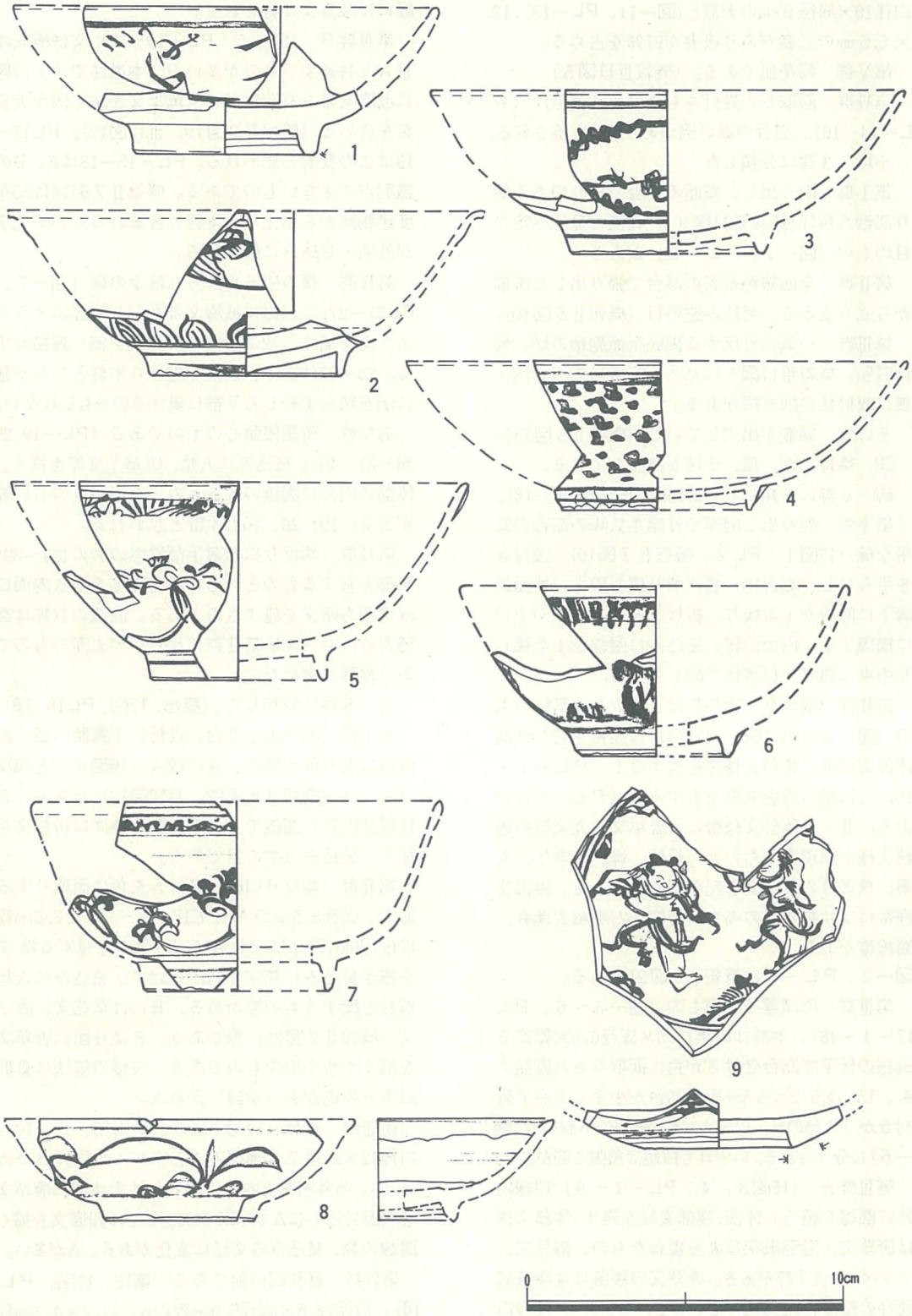
皿　8群に分類した（第16、17図、PL18、19)。

第Ⅰ群　削り出し高台、畳付以下露胎の皿。高台内に削り痕が残る。直口縁A（16図8）と端反りするB（概報Ⅱ8図22、Ⅲ12図13）がある。8は器体内外に圏線で文様帯を劃し外面に折枝文を描く。見込みは蛇の目である。

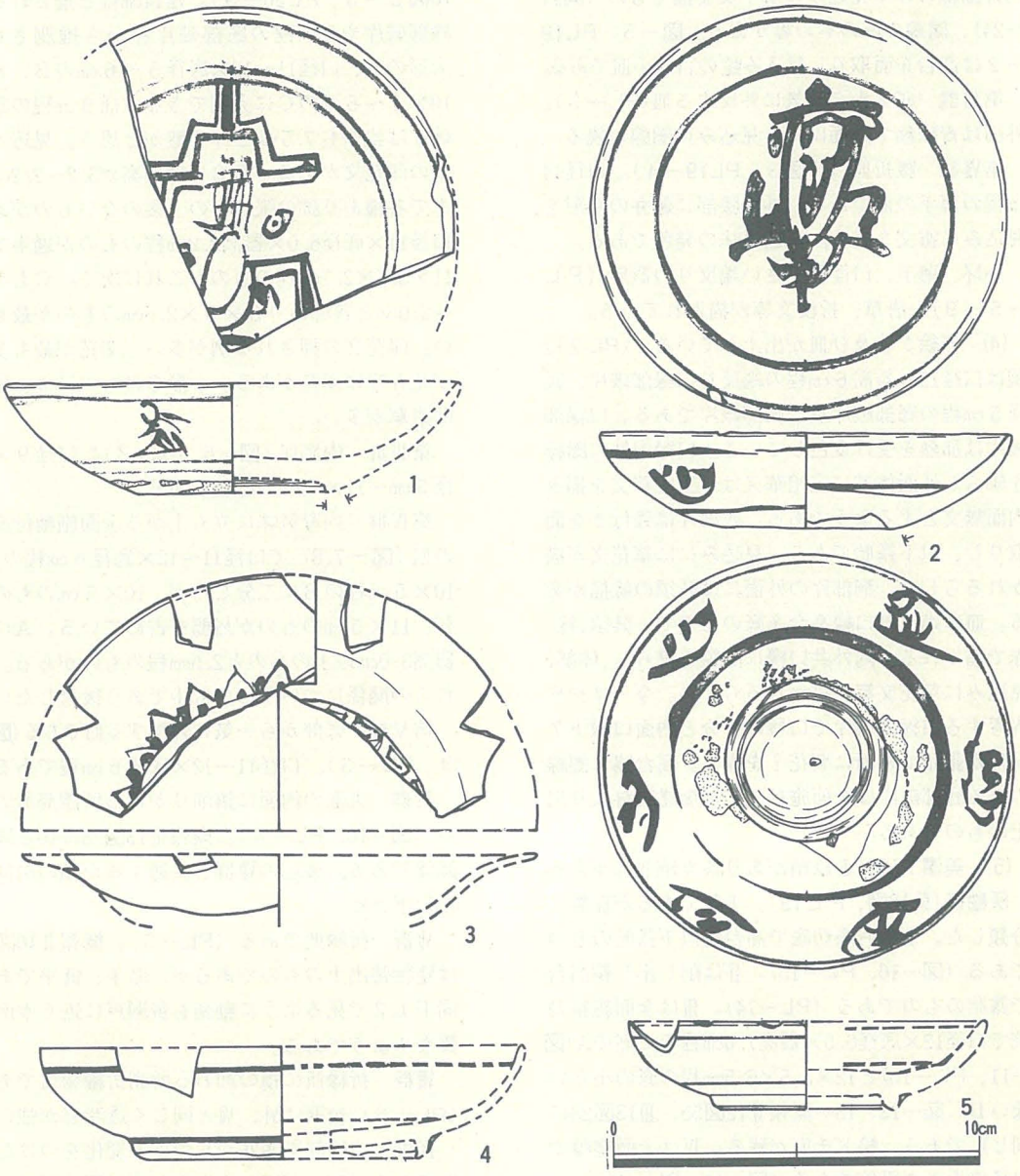
第Ⅱ群　端反り口縁、畳付きを角に面取りする皿で、底径8.5㎝のA（PL18－1～5）と6.5㎝程のB（同6、7）がある。Aには外面に連続する渦文を描き見込みに梵字？を配するもの、見込みに人馬、草花を配するもの等がある。Bには草花文、唐子文（概報Ⅱ7図20）等がある。8は外面に唐草文を描くやや小形のものである。文様の描法にⅢ群以下と差違があり本群に含めた。

第Ⅲ群　端反り口縁糸底の皿(PL18－9、10)。口径12×底径7.0㎝程のAと9×4㎝程のBがある。A、B共圏線を内外に繞らし外面体部に唐草文を内面見込みにAでは獅子文をBでは羯磨文を描く。圏線の数、見込みの文様に変化がある。Aが多い。

第Ⅳ群　碁筒底の皿である（第16、17図、PL18)。口径12.6×底径5.0㎝程のA、11.2×4.2㎝程



第16図　舶載磁器(染付碗皿)



第17図　舶載磁器(染付皿)

のB、9×4cmのCがある。Aの見込みには吉祥文、人物、花鳥が描かれる（16図9、18図1、PL—11、12)。Bには吉祥文、魚文、花鳥、捻花、梵字文、圏線のみ等がある（17図2、概報Ⅱ6図、Ⅲ11図)。各々圏線、施釉部位等に変化がある。吉祥文が最も多い。Cは見込みに十字花文の描かれる輪花の小皿である。高台脇以下露胎を示す（概報Ⅲ11図)。

第Ⅴ群　口径13cm程の端反りする皿（PL—13～15)。外面に圏線と唐草文を描き内面口縁部に四方襷文を配す。15は外面圏線のみのものである。

第Ⅵ群　内弯気味の丸皿（図—4、5、PL18—16～24、19—1、2)。外面に折枝文・瑞花等を描き内面口縁に四方襷文を描く（PL—17～19)。

内外圏線のみで見込みに獅子文を描くもの（同21～24)、圏線のみのもの等がある。図－５、PL19－２は高台を面取りし見込み蛇の目の小皿である。

第Ⅶ群　底部から一気に外反する皿(PL－３)。外面は青磁釉で内面口縁と見込みに圏線が繞る。

第Ⅷ群　腰折皿（17図３、PL19－４)。口径14cm程の薄手の皿である。外面腰部に蓮弁の略形を、見込みに雷文を描く。緑色気味の発色である。

小坏、薄手、口径の小さい端反りの器形（ＰＬ－５～９)。唐草、折枝文等が描かれている。

(4)　**赤絵**：碗及び皿が出土している。(PL２)。碗は口径12cm器高６cm程の端反り口縁部破片、底径５cm程の底部破片及び胴部破片である。口縁部破片は加熱を受け変色している。口縁内外に圏線を繞らし外面体部に宝相華又は八宝唐草文を描き内面無文とするようである。底部片は畳付きを面取りし、以下露胎である。見込みには草花文が描かれるらしい。胴部片の外面には呉須の線描がある。皿は端反り口縁高台糸底のもので、呉須、緑、赤で描かれる。内外共口縁に圏線を繞らし、体部、見込みに草花文等が描かれるらしい。今一はやや内弯する口縁部破片で口唇の半分と内面口縁下７mm程が露胎で外面に菊花？を描く。高台脇に圏線の繞る底部破片は全面施釉で55年度建物跡より出土のものである。

(5)　**美濃**：灰釉と鉄釉があり各々碗皿等がある。

灰釉碗(第18図、ＰＬ19)。少数であるがⅣ群に分類した。Ⅰは右糸切底で高台脇以下露胎のものである（図－16、PL－15)。Ⅱは削し出し輪高台で露胎のものである（PL－14)。Ⅲは全面施釉の碗で口径12×底径6.5×器高7.0cm程の丈高のＡ(図－11、PL－10)と12×5.5×6.5cm程の底の小さい低いＢ（図－12、13－概報Ⅱ12図55、Ⅲ13図23に同じ）である。輪ドチ痕が残る。Ⅳは全面施釉で口径の大きな平碗である（図－14、PL－11)。

灰釉皿　９群に分類した（第18図、PL19、20)

第Ⅰ群　削り出し、露胎の高台のもの。底径９cm程で高台見込み共露胎のⅠ－1(PL19－13)、同8cm程で高台脇以下露胎のⅠ－2(PL19－12)、口径11.6×底径６×高5.5cm程の腰折皿とされるⅠ－３（ＰＬ20－１)、右糸切底のⅠ－４（図－15,PL20－８)である。12、13は底径が大きく皿というよりは盤かと思う。

第Ⅱ群　端反り口縁付高台全面施釉のもの（第18図２～５、PL20－９)。径14cm程と推される口縁部破片や９cm程の底部破片等から推測される大形のＡ、口径11～12×底径５～６cmのＢ、８～10×４～５cmのＣに大別できる。径９cm程の底部破片は器厚も7.5mmと厚く盤かと思う。見込みに菊の印花文がある。ＢＣには器高が3.2～2.2cm程まで各種あり腰の張るものと腰のないものがある。口径11×底径6.0×器高2.2cm程のものが過半で、11×3.5×2.7cm程のものがこれに次ぐ。Ｃも2.7～2.0cmと各種あり８×５×2.5cmのものが最も多い。印花文の押される例が多い。菊花が最も多いが花弁等に変花がある。小形Ｃのものには、橘や酢漿草が多い。

第Ⅲ群　内剝皿（図－6、PL－２)[6]。口径９×底径５cm～11×７cmの各種がある。

第Ⅳ群　内弯気味に立ち上がる全面施釉付高台の皿（図－7、8）で口径11～12×底径６cm程のＡ、10×５cm程のＢに二分したが、10×５cmのものが⅔、11×５cmのものが⅓弱を占めている。Ａには器高3.0cm以上のものと2.5cm程のものがある。これらの関係については分析中であり後考したい。

第Ⅴ群　底部から一気に外反する皿である(図－９、PL－３)。口径11～12×底径６cm程である。

Ⅵ群　丸皿の内面に鎬削りが繞る所謂菊皿である（図－10、PL－４)。概報Ⅲ13図28は10と同一個体である。後述のⅧ群と共通するが鎬の巾は５mm以下と細い。

Ⅶ群　折縁皿である（PL－５)。概報Ⅱ10図29は建物跡出土のものであるが、厚手、低平であり同ＰＬ２で見るように釉調も黄瀬戸に近く本例と異なるようである。

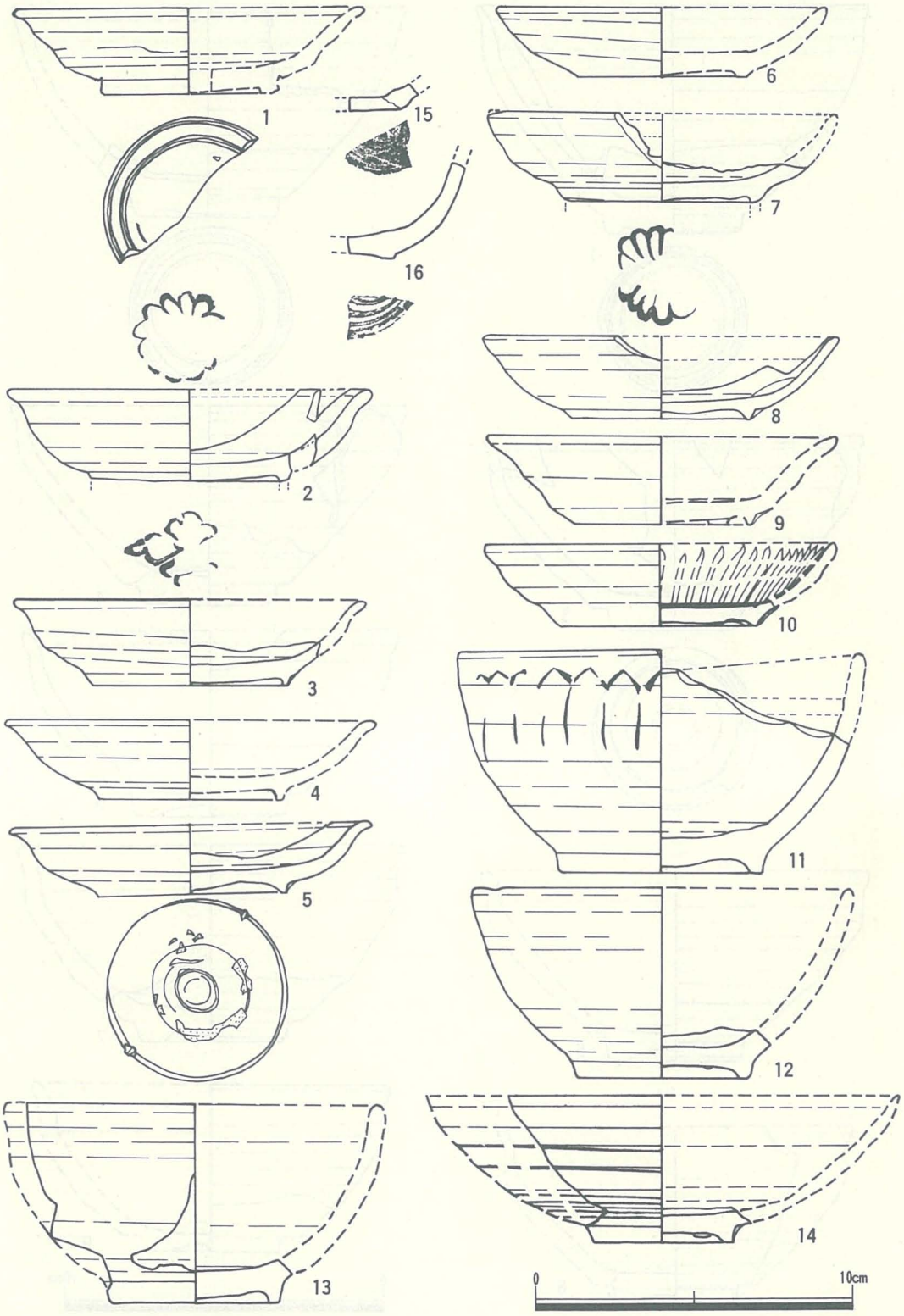
Ⅷ群　折縁皿に鎬の加わる所謂折縁菊皿である。(PL－６）釉調はⅥ、Ⅶと同じく透明感が強い。

Ⅸ群　口縁部を内外からつまみ変化をつけた襞皿である（PL－７)。小片のため詳細は不明。

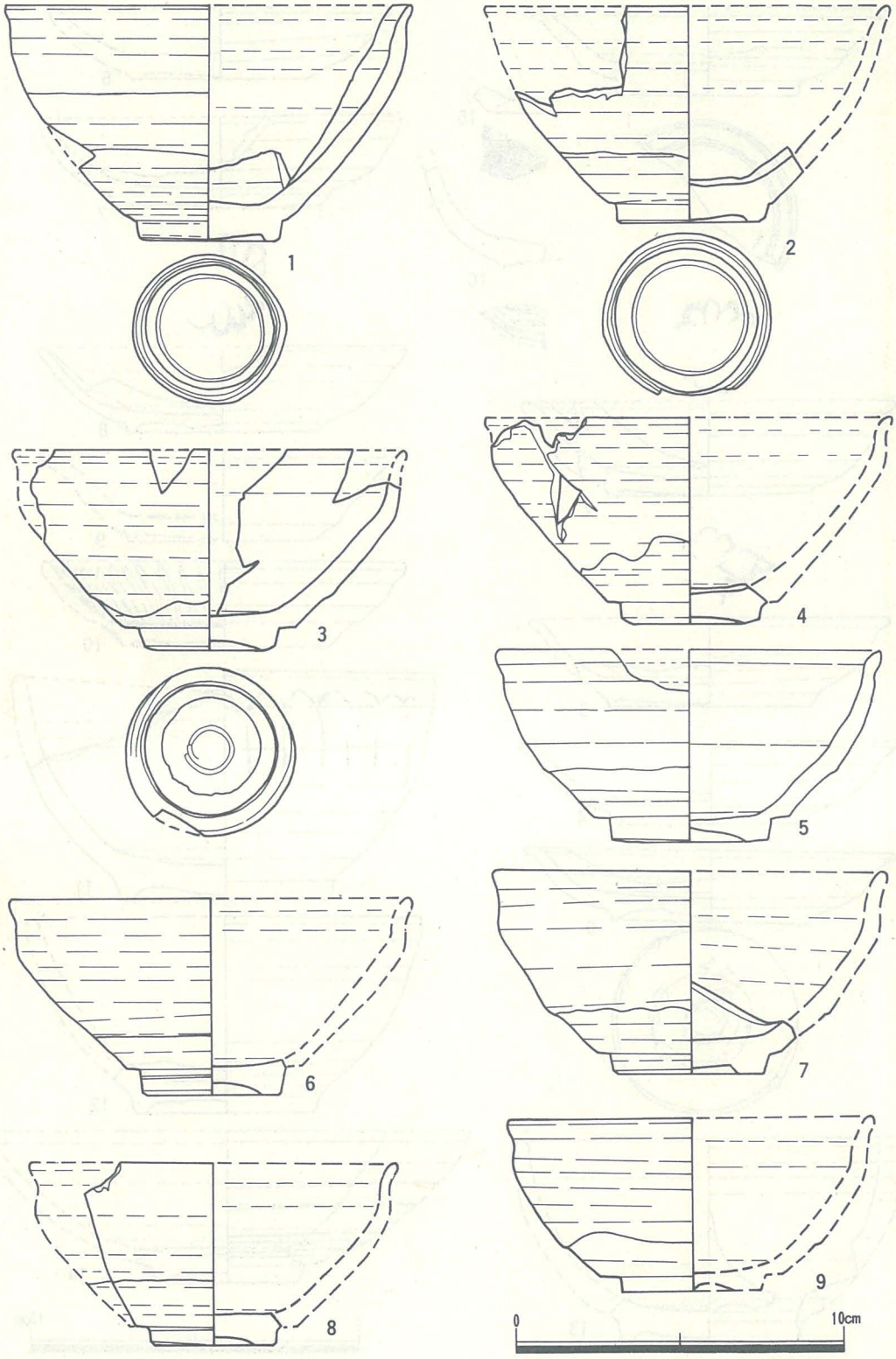
その他　小坏があり印花のあるものもある（概報Ⅲ)。建物跡では香炉が出土している。又畳付きがすり減り、形状を止めないものや焼成後に畳付きに複数の刻みを入れるものがある。両者が同一個体にみられるものもある（PL－９、10)。

鉄釉碗　天目茶碗といわれるものである（第19図)。高台、口縁部の形状の違い等により３群５類に分類した[7]。

第Ⅰ群　削り出し輪高台で高台脇の削り巾が狭



第18図　国産陶器(美濃碗、皿)



第19図　国産陶器(天目碗)

く、口唇は薄く作り出され、括れが殆んどなく直線的で口端が明瞭なものである（図－１、２－概報Ⅲ13図22は１と同一）[8]。

第Ⅱ群　内反り高台で頚部が括れ露胎部に鬼板が塗られる。口唇が薄く、括れの強いＡ（図－３、４）と口唇が厚く括れが小さく直立に近いＢに二分した。Ａの釉調は黒味が強く、鬼板は紫味のものが多い。Ｂの釉調は茶色味が増す（５、６）。

第Ⅲ群Ａ　口縁ほぼ直立の輪高台の碗（７）。

第Ⅲ群Ｂ　口縁の括れが弱く器高の低い碗である（８、９）。

鉄釉皿　高台の形状、施釉法により３群に分類した（第20図、PL20）。

第Ⅰ群　削り出し輪高台腰折皿（図－２、３、PL－14）。内面全面外面体部上半に施釉される。釉調は黒褐色と茶褐色があり前者が多い。見込みに重ね焼きの痕が残る。稜皿とされるものである[5]。

第Ⅱ群　口縁直口の丸皿。内外口縁付近のみ施釉し内外面と以下に鬼板を塗る糸底状の１（図－１、PL－11）、揚底状に高台を削り出し畳付き以下露胎の２、高台裏露胎の３がある。２、３の釉調は茶褐色である（図－６、PL－16）。

第Ⅲ群　口縁端反りの皿。高台畳付き以下露胎の１（図－５、PL－12）、全面施釉の２（図－７、８、PL－15）がある。

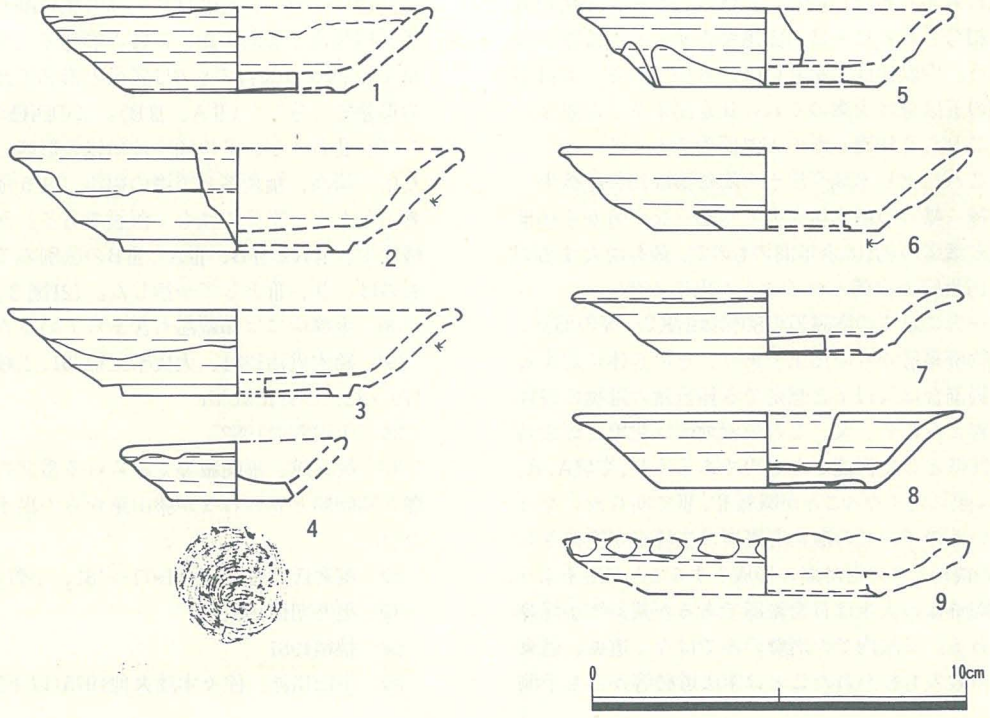
第Ⅳ群　鬚皿（図－９、ＰＬ－17）全面施釉である。

その他　（第20図、PL20、21）右糸切底の小坏（図－４、PL－13）香炉（PL21－１）仏花瓶類の口縁部破片及び体部破片（PL－２、７－２は脚としては広がりが小さいかと考える。）口のすぼまる小壺（３）、鶴首の徳利の口縁（５）同じく袋物の胴部片（６）、小さな口の着く小壺（８－茶入又は水滴か）、竹節を型どった水滴様のもの（９）がある。４は内外口縁部のみ施釉の碗形のものである。又10は55年度建物跡より出土の大海である。

２．小　　括

小稿で扱った陶磁器の概要を述べ併せて勝山館の形成について若干記すものである。

青磁碗Ⅰは沖縄勝連城、尻八館、浪岡城に類例がありⅡＡは、更に新巻本村にも見られる[9]。ⅡＢ１は洲崎館等[14]にある。ⅡＢ２は尻八館、新巻本村、根来寺等にある[10,11]。ⅡＢ3は白磁碗Ⅱも含め朝倉館[12]、浪岡城等1570年代落城の遺跡には見られないようである。青磁皿Ⅰは熊本県城南町出土例から15世紀迄遡る事が明らかである[13]。白磁皿Ⅰ１は、勝連



第20図　国産陶器（鉄釉皿）

城、尻八館、洲崎館等にある。[14] 皿Ⅳは、朝倉館、葛西城にあり、葛西城では染付碗Ⅳに伴うらしい。[15] 染付碗Ⅰは、他の資料と高台の作り器形等に差異があり区分した。パレスボール[16]の器形に近い。Ⅱ群に近い類は新巻本村から青磁碗ⅡＢ２、染付皿Ⅲ、美濃灰釉皿Ⅰ３等と一括出土している。Ⅳは葛西城で出土している。碗Ⅴは浪岡城、根来寺等にあり染付皿Ⅵの獅子皿が伴うようである。染付皿Ⅰは高台の類似から碗Ⅰに比定した。ⅠＡは浅い碗とすべきかも知れない。皿ⅡＡはⅢと伴う大形品の可能性もあるが、高台も異っており、碗Ⅱに近いものと考えている。概報Ⅱ７図20の高台裏には二重圏線内に明瞭な文字で「大明宣徳（半欠）年造」銘があり追銘とも出来るが宣徳期の銘と同様の書き方であり飛雲の特徴も類似する。[14] 皿Ⅲ、Ⅳは浪岡城、大瀬川館にあり、大瀬川では魚文が多いらしく勝山館と異る。[17] 皿Ⅴは根来寺にある。Ⅵは上述の他に千歳市末広遺跡にありⅤの獅子皿、美濃灰釉皿Ⅱの中の腰がない類、Ⅶと思われるものが伴っている。[18] 美濃の製品は大窯期のものでありこれが16世紀を遡らないことは定説とされている。[5,19] これにより新巻本村は16世紀初頭に位置しよう。[20] 皿Ⅳ～Ⅸは根城Ｓ115、116土拡中から、志濃、唐津製品とともに一括出土している。[21] 堀越城にもある。[22] 尚、皿Ⅱ、Ⅳ群は器形等に変化があり細分されることは末広遺跡の例からも首肯されよう。内剝皿は大窯Ⅱ以降のものである。天目茶碗の五区分は大窯のそれに比定出来るかと思う。

これらを整理したのが21図表である。[23]

これにより本地区出土の陶磁器は15世紀後半、館神八幡宮の創立年を大きく遡らない頃から16世紀末葉迄の約100余年間のもので、最も増大するのは16世紀の中葉とすることが出来る。[24]

一方これらの陶磁器の80％は27K2･7等の旧沢、遺物廃棄層からの出土であり、その全体に対する完掘割合は¼以下と想定でき相当量の遺物の残存が考えられる。又、この旧沢地形は空壕Ｃ形成時の外壁として機能したものであろうし、空壕A、B、Cは順に古くなることが概報Ⅱ、Ⅲで明らかになっているので、この遺物廃棄層は空壕Ｃが廃絶されAの機能していた時期の形成とすることが出来よう。

陶磁器の大半は日常雑器であるが茶器[25]小坏等もある。又館内での消費のみではなく道央、道東への般入も行われたことは末広遺跡等からも予測されるところである。[26] 文献の蒐集、渉猟も不充分であり、ご叱正をお願いしたい。　（松崎水穂）

《註》

(1)　史跡上之国勝山館跡Ⅰ～Ⅲ、上ノ国町教育委員会、1980～82、拙稿「史跡上ノ国勝山館出土陶磁器」第２回道南東北々部陶磁研究会発表要旨、'81、同、「北海道上之国勝山館跡の調査」日本考古学年報34、'83

(2)　この表には、今回触れ得なかった本地区出土の国産陶器（志濃、唐津、越前系甕・擂鉢、美濃系擂鉢、かわらけ等）及び朝鮮系のもの約360点、57年度館神八幡宮跡出土中近世陶磁器、1,246点、55年度建物跡出土の1,569点、計3,175点余は含まれていない。又破片であっても同一個体と判断したものは１点として数えた。

(3)　鉄釉の天目については舶載品を抽出出来ず美濃に一括した。他日を期したい。

(4)　分類については三上次男博士、佐々木達夫助教授から昭55、56年にご指導を頂戴した。57年には染付について小野正敏氏、美濃について井上喜久男氏からご教示を得た。感謝申し上げたい。

(5)　小林行雄、図解考古学辞典、1959

(6)　楢崎彰一、美濃の古陶他

(7)　分類は次のように試みた、①輪高台と内反り高台に二分し、前者は更に高台脇の削り巾、底径、口径及び器高の比、口唇の形態で二分した（Ⅰ、ⅢA）。内反り高台のものは底径と器高の比、口頸の形態で二分した（ⅡA、ⅢB）。この四種に外れるものをⅡＢとし、その順序は口縁の形態、脇の削り巾、器高、釉調等と美濃の編年（註５他）を参考としたが、充分ではなく仮説である。又口縁部破片で、ⅡＡとⅡＢ、ⅢＡとⅢＢの区別のできないものは、Ⅱ、Ⅲとして一括した。(21図３)。

(8)　本群中には舶載品も含まれているかと思う。

(9)　鈴木重治1981、大橋康二他'81、工藤清泰他、'79～82、小野正敏'81

(10)　上田秀夫1982

(11)　尻八館、浪岡城等でみられる雷文の碗も本群と同時期と思われるが勝山館からの出土はまだない。

(12)　朝倉氏調査研究所1971～'81、小野正敏'82

(13)　亀井明徳1981

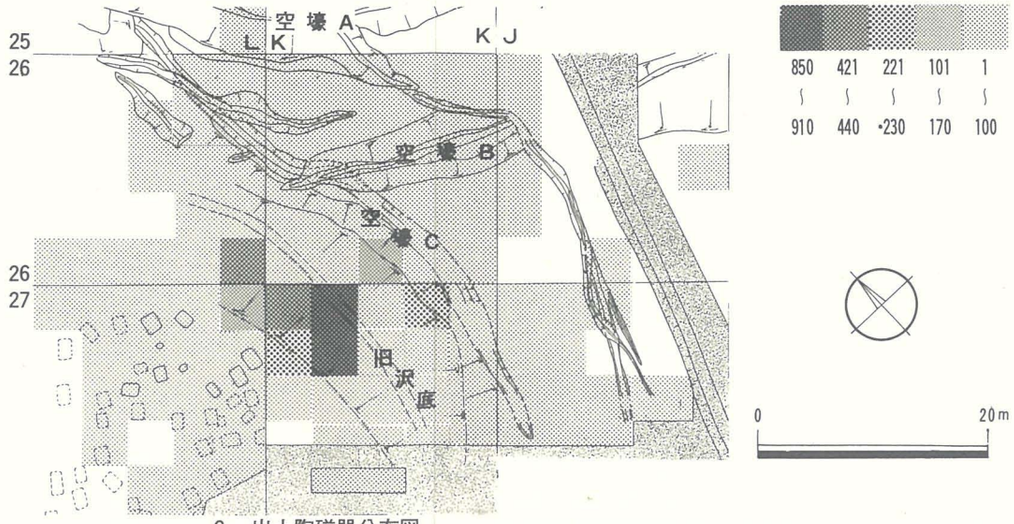
(14)　拙稿1981

(15)　宇田川洋、佐々木達夫他1975（以下72頁へ）

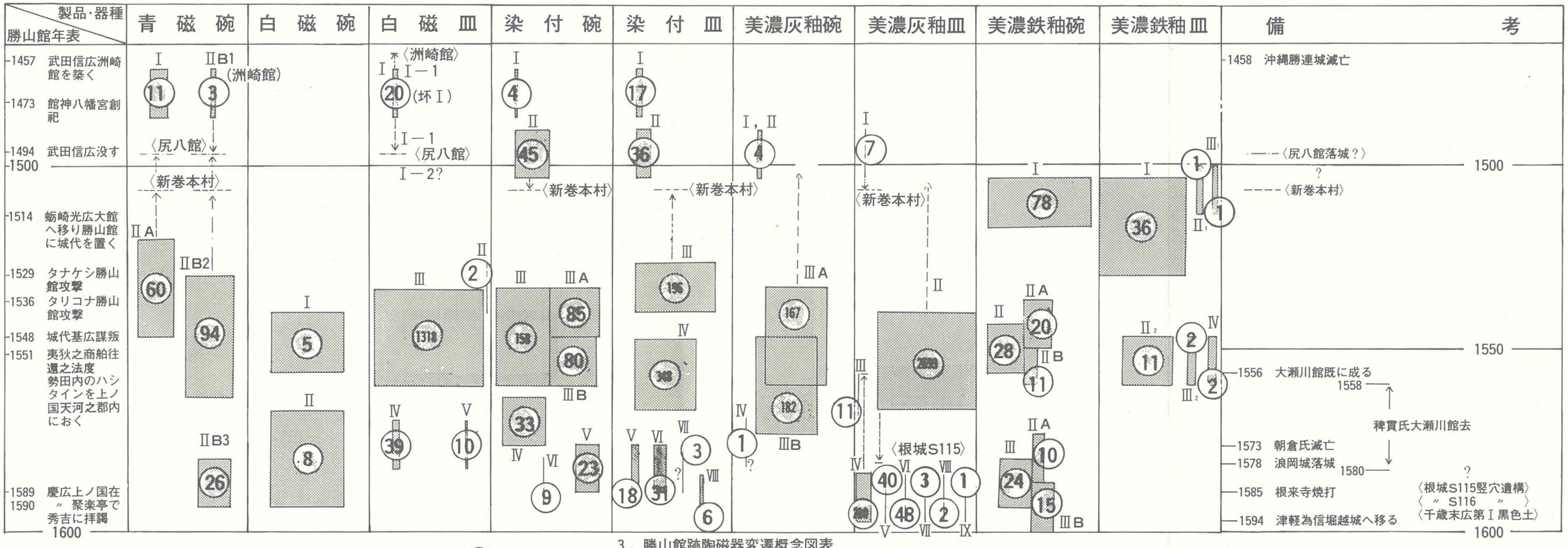
製品 / 器種	舶載 青磁 A	舶載 青磁 B	舶載 白磁 A	舶載 白磁 B	舶載 染付 A	舶載 染付 B	舶載 赤絵 A	舶載 赤絵 B	舶載 小計 A	舶載 小計 B	国産 美濃灰釉 A	国産 美濃灰釉 B	国産 美濃鉄釉 A	国産 美濃鉄釉 B	国産 小計 A	国産 小計 B	合計 A	合計 B
碗	194		34		550		3		781		354		254		608		1389	
		60		13		429		3		505		354		186		540		1045
皿	167		1473		964		2		2606		3011		53		3064		5670	
		87		1473		655		2		2217		1309		53		1362		3579
小坏	2		21		10				33		9		1		10		43	
		2		21		10				33		9		1		10		43
その他	8		1						9				12	12	12		21	
		8		1						9						12		21
計	371		1529		1524		5		3429		3374		320		3694		7123	
		157		1508		1094		5		2764		1672		252		1924		4688
C	256		943		1041				2440		2558		237		2795		5035	

1．出土陶磁器集計表

A：全破片数
B：方(法)量計測の対象とした点数
C：分布図作成に用いた点数



2．出土陶磁器分布図



3．勝山館跡陶磁器変遷概念図表

5％：各製品・器種内に占める比率　(100) 内訳点数

第21図　陶磁器分布図、変遷概念図表

b．金属製品（第22～25図）

（銅製品）（古銭を除く）

これまでに出土した銅製品の総点数は約100点で総重量は約1,300gである。銅製品の多くは刀や鎧などの武具の一部（旧沢地出土が多い）か建具の一部（館神八幡宮跡出土が多い）である。今回始めて密教法具の一部（25図8）が発見された。順に新発見の銅製品を述べる。

1．幅20mm長さ（現存長）83mmで直径28mmの管状を呈する。表面が毛彫りされる。下段に一条の沈線をめぐらし界とする。文様は波文を主体とし2種の花弁を交互に配す。槍柄の止具であろう。

2．扇形を呈するごく薄い銅板に人面をレリーフする。おかめの面をモチーフとしている。飾り金具の一種であろうか。

3．小柄。外面全面に渡銀されるが、部分的に剝落し緑青を発する。中に小刀が半ほどまで残りその錆によって棟方が小口から割れる。大きさは86×16×4mmで重さは22g である。

6．部分的に鍍金のあとが残る。留金である。大きさは30×10×3mmで重さは3.5g である。

8．密教法具の一つで、金剛杵あるいは金剛鈴の中間部である。杷に球状の突起（目）を有し、四方に配す。蓮弁は6枚である。鍍金は認められない。大きさは46×17mmで重さは42g である。

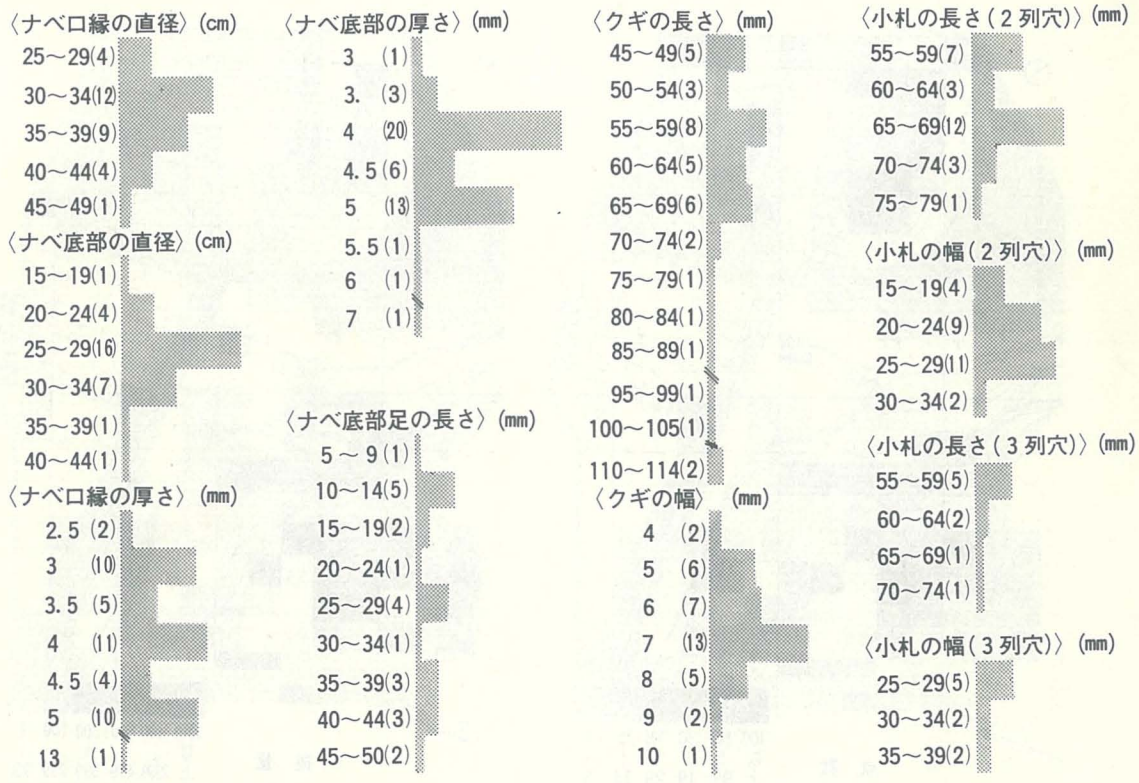
9．甲冑金物の一種であり、止め金具であろう。重さは8g である。

10．刀の柄頭か鞘尻に付く金物であろう。図上復元での大きさは45×40×10mmで中は空洞。重さは17.5g である。

13．銅の溶解物である。全面に緑青を発す。大きさは60×40×139mmで、重さは74g である。

（鉄製品）

これまでに出土した鉄製品の総点数は約2,200点で総重量は約50kgに達する。出土した鉄製品のうち品名のわかるもので多いのは鍋（食）、釘（建）、小札（武）である。それぞれの点数と重量は、重量分布図に記してある。これらの分布は総じて旧沢地に集中する、旧沢地と館神八幡宮周辺との分布のバランスは釘では館神八幡宮が、小札・鍋で



第22図　鉄製品計測グラフ

は旧沢地の方が多く分布する。

11. 先端部一側縁にかえりを有し、先端は尖鋭である。基部近くでややくびれる。端部は欠損する。断面はややつぶれた方形を呈する。三本ヤスの外側の一本であろうか。大きさは85×4×3mmで、重さは3.7g である。

12. 極めて細い。両端部を欠損する。やや弾力性がある。針であろう。断面は円形に近いが隅丸方形とも言える。

14. 甲冑の小具足の一つで、籠手の一部であろう。断面がやや弧状を呈する鉄の板札を径が5mmの鉄の鎖でつなぎ合わせたものである。

15. 三側縁が直線的な口縁を持ち、小皿様を呈する。口縁の一部が欠損する。錆が全面に進んでおり、形態をよくつかめない。大きさは70×19mmで、重さは42g である。

16. U字形を呈し、先端部は欠損する。和鋏であろう。上側面から見ると刃が交叉している。またU字形の柄を押すと弾力性がある。

17. 短冊形を呈し、先端部はやや鈍い角度で尖がる。頭の縁は打撃のために捲れる。小形の鑽(タガネ) であろう。断面は長方形。大きさは62×10×8mmで、重さは17g である。

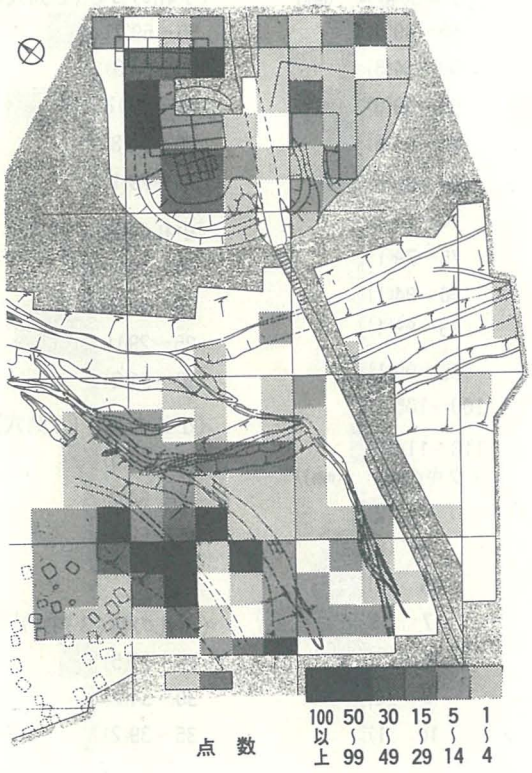
18. 鋸である。現存長は215mmで幅は最大28mmと24mmで厚さは2～2.5mmである。歯道は内弯し背は外弯している。鋸歯のアセリは認められるがナゲシは不明である。歯は二等辺三角形のようで2cmで5枚の割合で目立をする。

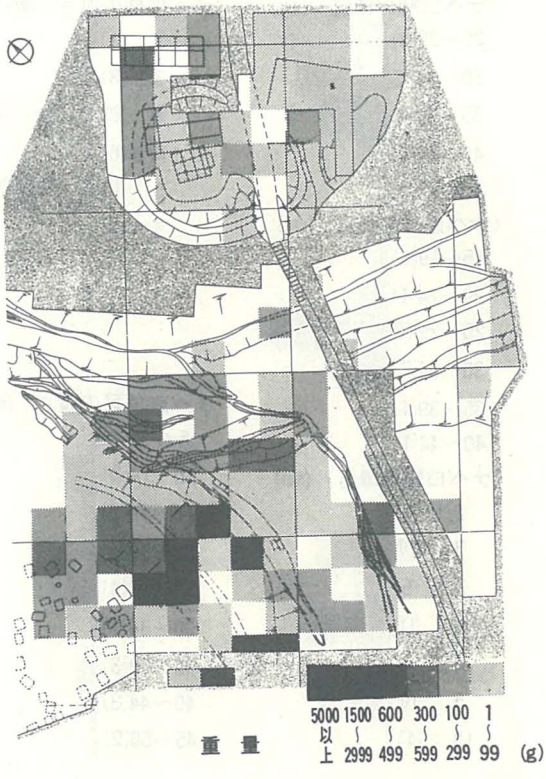
19. 口径約120mm胴部径200mmの茶釜である。今回は図示していないが、これに見合う蓋も検出されている。

(鉛・ガラス製品)

4・5はともに鉛玉である。4は表面に白粉(鉛サビ) 付着。ややいびつな球形。大きさは12.4×11mmで重さは8.7g である。5は表面が部分的に青灰色 (鉛色) で、全体は淡い茶色である。器面の一部に圧痕有り。大きさは12.5×11.8mmで、重さは6.7g である。

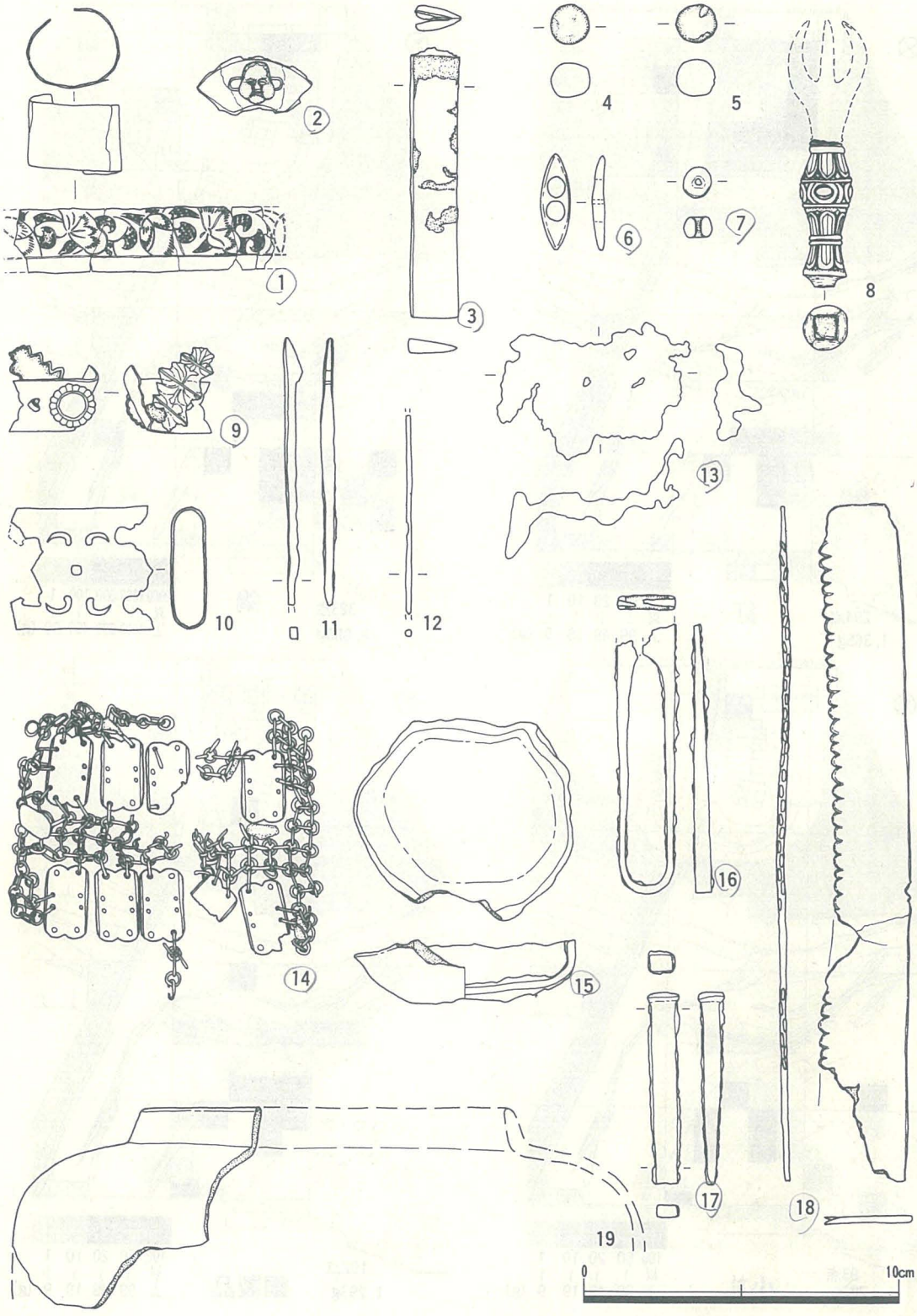
7. 中央に一穴を穿つガラス玉。コバルト色で比較的光沢を持つ。いわゆるアイヌ玉とよく以て





第23図　鉄製品点数および重量分布図

第24図　釘、鍋、小札、銅製品重量分布図



第25図　鉄、銅製品実測図

いる。大きさは9.5㎝×7㎜で重さは、0.8g である。　（前田正憲）

c．鉄滓（第26、27図）

現在までに出土した鉄滓の総点数は約600点で総重量は約33kg に達する。これらの鉄滓の多くは旧沢地を中心とし検出されている。旧沢地周辺は鉄滓の散布地であり、石製羽口の検出地でもある[1]。鉄滓の分布状態は旧沢地内西側に多く分布するようである[2]。

当遺跡出土の鉄滓は99％以上が椀形鍛冶滓である[3]。なお炉内滓が1点あった。鉄滓全点の最大長を計測した結果およそ3段階のまとまりが見られた。それは40㎜・60㎜・90㎜をそれぞれ中心とするものである。しかし、50㎜以下の鉄滓は大半が破片である。したがって60㎜・90㎜を中心とする2段階が主であると言える。

以下に代表的な鉄滓を述べる[4]（1－3）

1．いびつな球状を呈する炉内滓である。破面は無く、部分的に小豆大のコブ状の突起がみられる。表皮は強く酸化（鉄サビ色）する。表面に大きなヒビが走る。ヒビの内部は黒鉄色で部分的に赤褐色を呈す。強く磁着する。大きさは46×34㎜で重さは97g ある。

2．三側面に破面を有する椀形鍛冶滓である。上面は大きな気孔と木炭痕を有する。下面はやや凹凸がある。表皮は酸化（鉄サビ色）し、裏面は赤褐色を呈する。破面は青黒色で多孔質、全面に弱い磁着がある。大きさは90×80×32㎜で、重さは125g である。

3．長円形の平面を持つ椀形鍛冶滓である。上面は中央がやや窪むがほぼ平坦で、裏面は中央がやや滴下する。表皮は酸化（鉄サビ色）を呈するが上面は部分的に、下面はほぼ全面にやや暗い赤褐色を呈する。一側縁と底面の一部に破面を有す。破面は青黒色を呈する。全面に磁着がある。大きさは58×47×20㎜で、重さは59g である。

相関表内の番号は図示した鉄滓の番号を示す。1は比重が高く2は比重が低いと言える。

鉄滓まとめ

これまでの調査では製鉄址関係の遺構は確認されていない。しかし大形の石製羽口[5]の検出あるいは多量の焼土の廃棄などから、かなり大規模な操業を容易に想像出来る。今後の調査課題はこれら遺構の検出であろう。出土した鉄滓はほとんどが椀形鍛冶滓[6]である。その具体的な操業段階・技術・規模の解明は粒状滓、鍛造剥片などの検出と、化学分析による冶金学的データを得なければならない。　（前田正憲）

《註》

(1) 分布状態が極端に異なるのは、旧沢地トレンチ掘りによる部分的な発掘のためである。

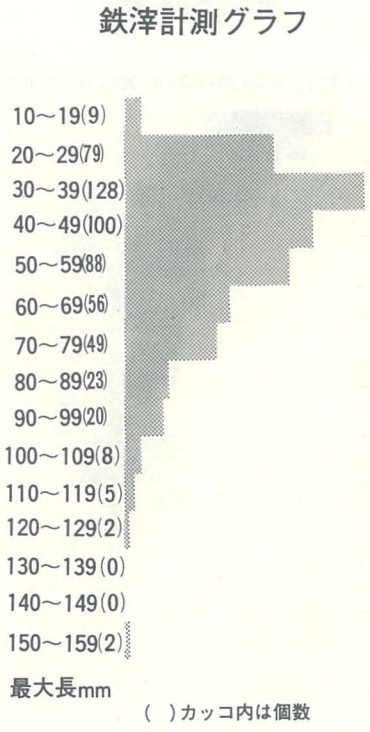
(2) 旧沢地トレンチ掘りの結果多量の鉄滓、石製羽口、多量の焼土が廃棄されていることが確認された。つまり旧沢地からそう遠くない距離に鍛冶址などの製鉄関係の遺構が存在する可能性が高いことを示唆している。

(3) 鉄滓に関する肉眼鑑定は産業史研究所穴沢義功氏にお願いした。また多くのご教示を受けた。記して感謝の意を表する次第である。

(4) 穴沢氏には、この3種の鉄滓をそれぞれ1）炉内滓、2）精錬鍛冶椀形滓、3）鍛錬鍛冶椀形滓の可能性の高いものとして選んでいただいた。

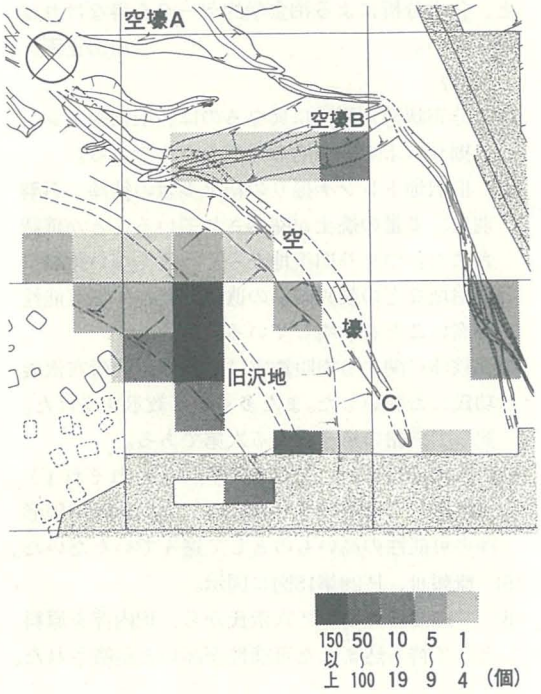
(5) 概報Ⅲ、P29第15図に図示。

(6) このことについて穴沢氏から、炉内滓を原料として持ち込まれた可能性が高いと示唆された。

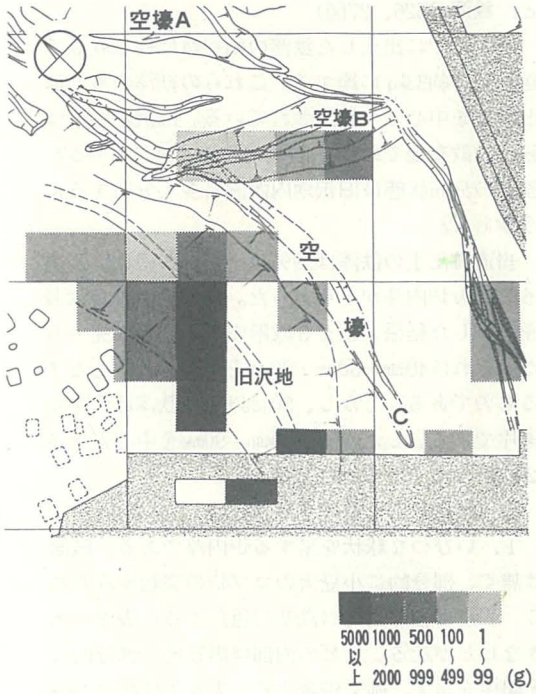


第26図　鉄滓計測グラフ

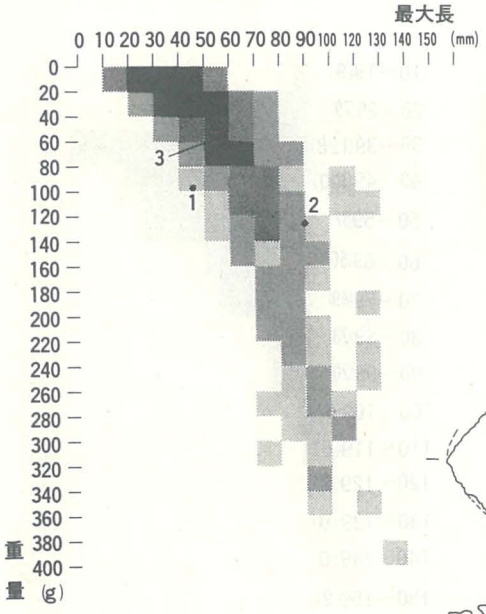
数量分布図

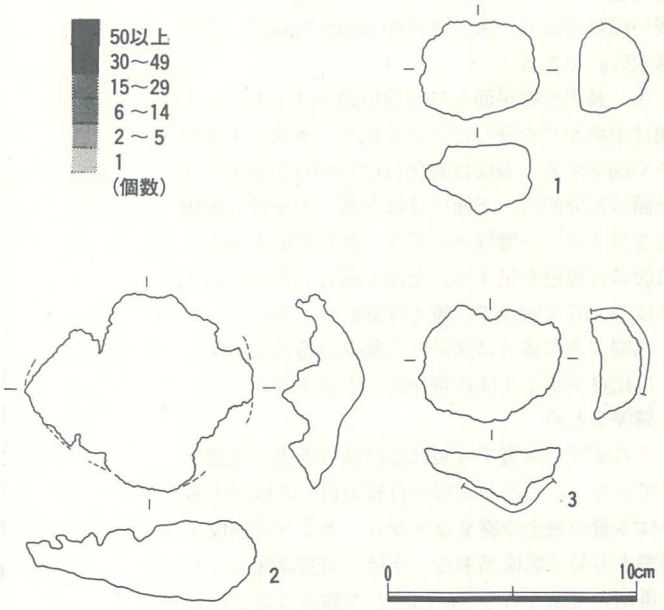


重量分布図



鉄滓相関表





第27図　鉄滓分布図、相関表・実測図

d．骨角器(第28～31図)

今年度までに出土した骨角器は318点にのぼる。主な出土地区は27K２・27K４・27K７区である。骨角器の種類は、中柄・骨鏃（ヤス）が主である。しかし中柄に装着される可能性のある刺突具は回転式銛頭が１点出土しているだけである。次に代表的な器種を順に述べる。

(中柄)(１～６・８～15)

総点数220点で全骨角器の⅔以上にあたる。中柄に使用される材質は、陸獣骨（シカ含む）と海獣骨（クジラ含む）とがあり、約２：３の割合で海獣骨（クジラ含む）が多い。

本来中柄は単体で使用されるのではなく、先端部に鏃あるいは銛頭のような刺突具を装着させて柄に固定し使用するものである。したがって中柄を形態分類する場合先端部の形状によって分類するのが適当であろうと思うし、この違いによって装着される刺突具も異なると考える。

本遺跡の場合、その断面形で大きく２種類に分類することが可能である。それはA、半円形を呈するものと、B、円形を呈するものである。

A．半円形を呈するもの。(１～６)これらは比較的大形のものが多く、一側縁を平担に削りその結果断面形状が半円形もしくはかまぼこ形となるのが特色である。図示したもののほぼ同じ部位の断面形を計測したところ一定の規格性のあることがわかった。つまり幅が４～５㎜厚さが３㎜前後なのである。これら（１～６）はほぼ同じような雌形を有する刺突具が装着されると考えられ又、その先端部の幅と厚さから、さらに種類の細分される可能性もある。

なお、基部に関してはえぐりのあるもの(3･4)とゆるやかにテーパーしてえぐりの無いもの（1･２・５・６）とがある。

B．円形のもの。(８～15) これらは比較的小形のものが多く、先端がみな鈍円となるのが特色である。その主なものを述べると、先端部断面形が円形(8･9･14･15)と長円形(10～13)のものとがありさらに円形のうち14・15のように先端部をテーパーの度合が大きくなるように加工されているものがある。これら３種はそれぞれの雄形に見合う雌形を有する刺突具が装着されると考える。なお、７の回転式銛頭は８・９のような雄形を有する中柄に装着される可能性が高い。

骨鏃・ヤス(16～20・22～25)

総点数25点である。しかしさらに分析を進めれば点数の増える可能性もある。材質は陸獣骨製(シカ含む）が多い。鳥骨製が１点ある。

16～20・22は中柄の可能性も考えられるが、先端部の形状があまりにも細く華奢である。むしろ尖鋭に作出されるところから骨鏃あるいはヤスとして考えたい。22は中間部基部の断面形が長円形である。23～25は骨鏃と考えられる。23は逆鈎を有する。24は鏃身部断面が半円形で25は鏃身部に一条の稜を有し両側縁が鋭利である。骨鏃は図示した３種（23～25）が代表的で点数も多い。

ただし、図示していないが鏃身部に２段に逆鈎を有するものや、四半截した鳥骨を鏃として利用するものもあり、バラエティーに富む。

骨針(21・26)

総点数３点である。このうち２点を図示する。21鳥骨製。四半截した鳥骨の端部を尖鋭にし２穴を穿つ。一端は欠損する。26陸獣骨製で、重さは7.4gである。両端を尖鋭にし一穴を穿つ。

骨製柄(27)

小刀類骨柄である。鹿角製で端部に一穴を穿つ。盲穴で目釘穴はない。

未詳品(28)

銛先の形態を持つ。鹿角製で、海綿質の部分を抉って茎溝を作る。両側縁に抉りを有し、基部近くに突起を有す。一側面に刻線文様を付す。使用された痕跡はない。またこの骨角器の反り方も不自然で柄に装着した場合先端は柄の中心線上から大きく外れてしまう。銛としての機能は無く、アクセサリーか針入れの可能性が高い。

未製品(29～35)

31・34はクジラ骨で他は鹿角である。29～31は小板状の素材である。29の上端の加工痕はこの小片を剝ぎ取る以前の加工痕で、おそらく鹿角を切断する際の加工痕であろう。30の上端の加工痕は剝ぎ取った後に逆Ｖ字形に加工したものである両側面の加工痕も同様に剝ぎ取った後の加工である。29は一応素材として扱ったが剝片の可能性もある。29・30の鹿角からの剝ぎ取り方向は下方より上方へ向かう。32は外面を整形された鹿角である。33・35は切断された鹿角であり、34は切断されたクジラ骨である。なお石器による擦截技法痕は認められず、すべて小刀かノミ状の工具による。

松前城資料館収蔵資料(36～42)[1]

これらは松前城資料館収蔵資料で、実測する機会[2]を得たのでここに紹介したい。これらは考古学的資料ではなく、アイヌの民族資料である。[3],[4]

36　竹鏃である。根曲り竹を使用。外観は、両側縁がややふくらみ基部両側縁を抉入する。この部位を糸で縛る。[5] 基部は逆鈎状となる。抉入部より上方の両側縁は極めて尖鋭である。裏面中央はやや窪み、[6] 基部に逆台形の断面形を呈する茎溝を有す。重さは1g である。

37～42　中柄である。37は木製（針葉樹）38～41は陸獣骨製で42は鹿角製と思われる。先端部の形状はすべて一側縁を平担に削ることによって、その断面形が半円形もしくは台形となる。先端部の断面形は、先端から約5㎜の部位を計測した。その結果、幅が4～5㎜で厚さが2～3㎜の範囲であった。これらの中柄は、すべて36の竹鏃を装着出来る。つまり中柄先端部（断面形が台形状）が雄形となり竹鏃基部（断面形が逆台形状）の雌形にしっかりと固定されるのである。なお必ずしも中柄先端部が鏃の茎溝の奥まで装着されるわけではないようである。

基部の計測部位は実際にその位置まで矢柄に装着されていた部位でもある。一般に矢柄の内径によってその位置も異なるようである。矢柄の内径は8㎜前後のものを使用するようである。

竹鏃・中柄・矢柄を結合させた重心位置は、中柄と矢柄の装着位置より若干中柄側に寄るようである。[7]　木製中柄については次項で述べている。

骨角器まとめ

中柄に関しては、AタイプとBタイプの2種に分類した。Aタイプではさらに細分される可能性のあることを示唆し、Bタイプでは3種を掲げた。また松前の資料はAタイプの中柄に酷以している。図示したような竹鏃がAタイプの中柄に装着されていた可能性は十分に考えられる。したがって、Aタイプは竹あるいは骨鏃のような刺突具の装着されるものとし、Bタイプは回転式銛頭あるいは銛頭のような刺突具の装着されるものとして考えることも可能であろう。しかし、これら刺突具の出土を見なければ確証のあることとは言えない。これまでの調査では図示した7の回転式銛頭が唯一の刺突具でそれがBタイプの1グループに装着される可能性があるとわかっただけなのである。

しかしながら、松前の資料がAタイプに対する重要な裏付けとなるであろうし、Bタイプの1グループに回転式銛頭が装着される可能性のあるのもBタイプ全体に対する重要な裏付けとなるであろう。よって、Aタイプには骨または竹の鏃のような刺突具が装着され、Bタイプには回転式銛頭あるいは銛頭のような刺突具が装着される可能性が高いと言えよう。そしてそれぞれ、Aタイプは近世アイヌにその関係が見出せ、Bタイプはオホーツク・擦文文化にその手がかりがあるようである。

骨鏃・ヤスに関しては、ヤスの可能性の高いグループがある。骨鏃の可能性の高いものは、図示した3種が代表的なもので、点数も多い。ただし骨鏃は鏃身部の形が様々で種類が多い。さらに詳細な分析が必要であろう。

勝山館は15世紀後半から16世紀にかけての山城である。つまり時代的には近世アイヌと、オホーツク・擦文文化の中間に位置するものであり、狩猟・漁猟具の変遷を考えるうえで大変興味深い位置にあると言えよう。　（前田正憲）

《註》

(1)　当資料は明治の始め旧藩医村岡格が遊楽部(ユウラップ)コタン(現八雲町)の長イカシパ（弁開凧次郎)より贈られた同家の使用品の一部である。

(2)　松前町学芸員久保泰氏のご厚意により快よく実測する機会を与えていただいた。感謝の意を表する次第である。

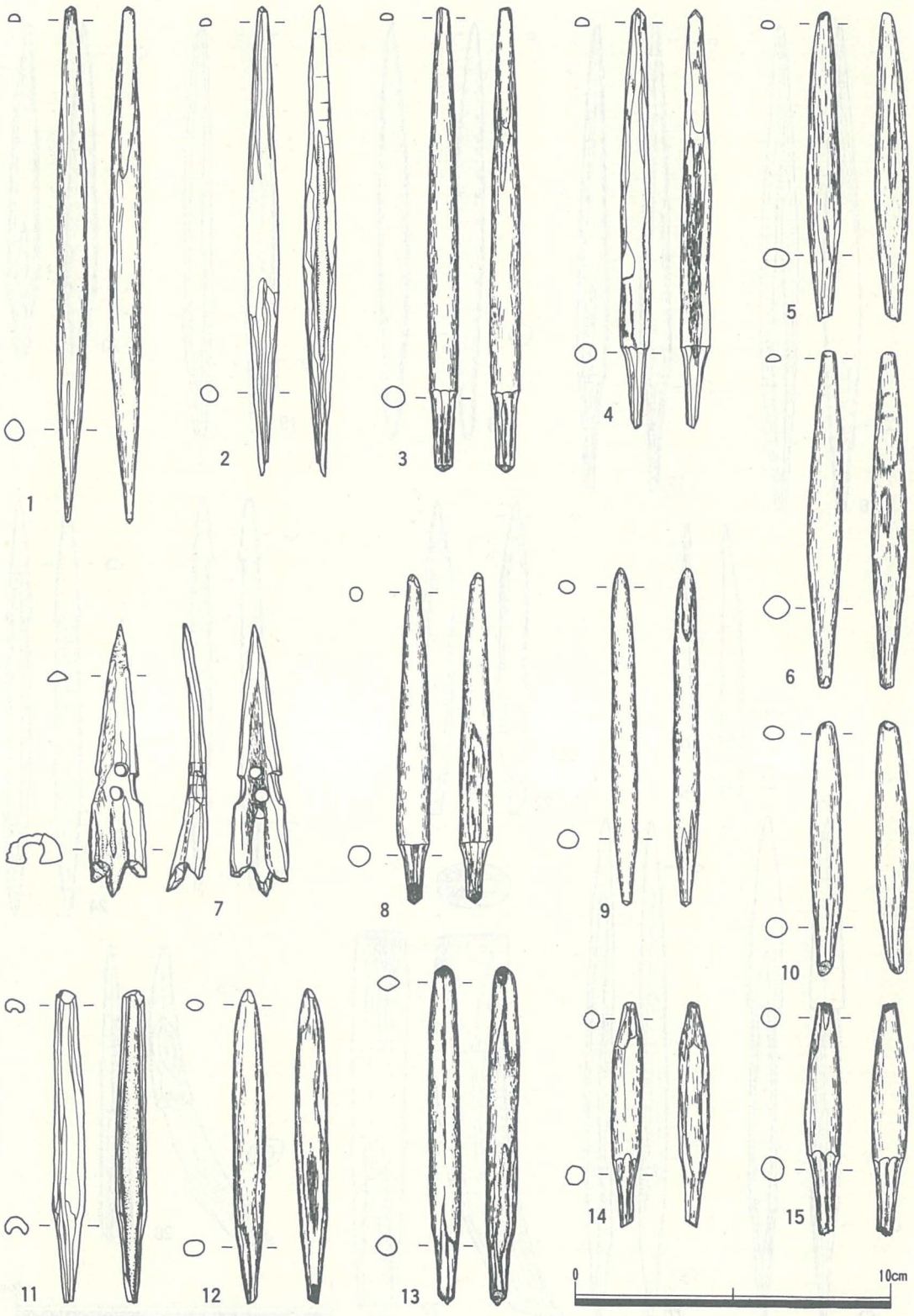
(3)　したがってアイヌ語による名称表現が成されなければならないがここでは触れない。

(4)　調査担当者松崎の勧めがあり骨角器担当の前田が収集し、掲載したものである。

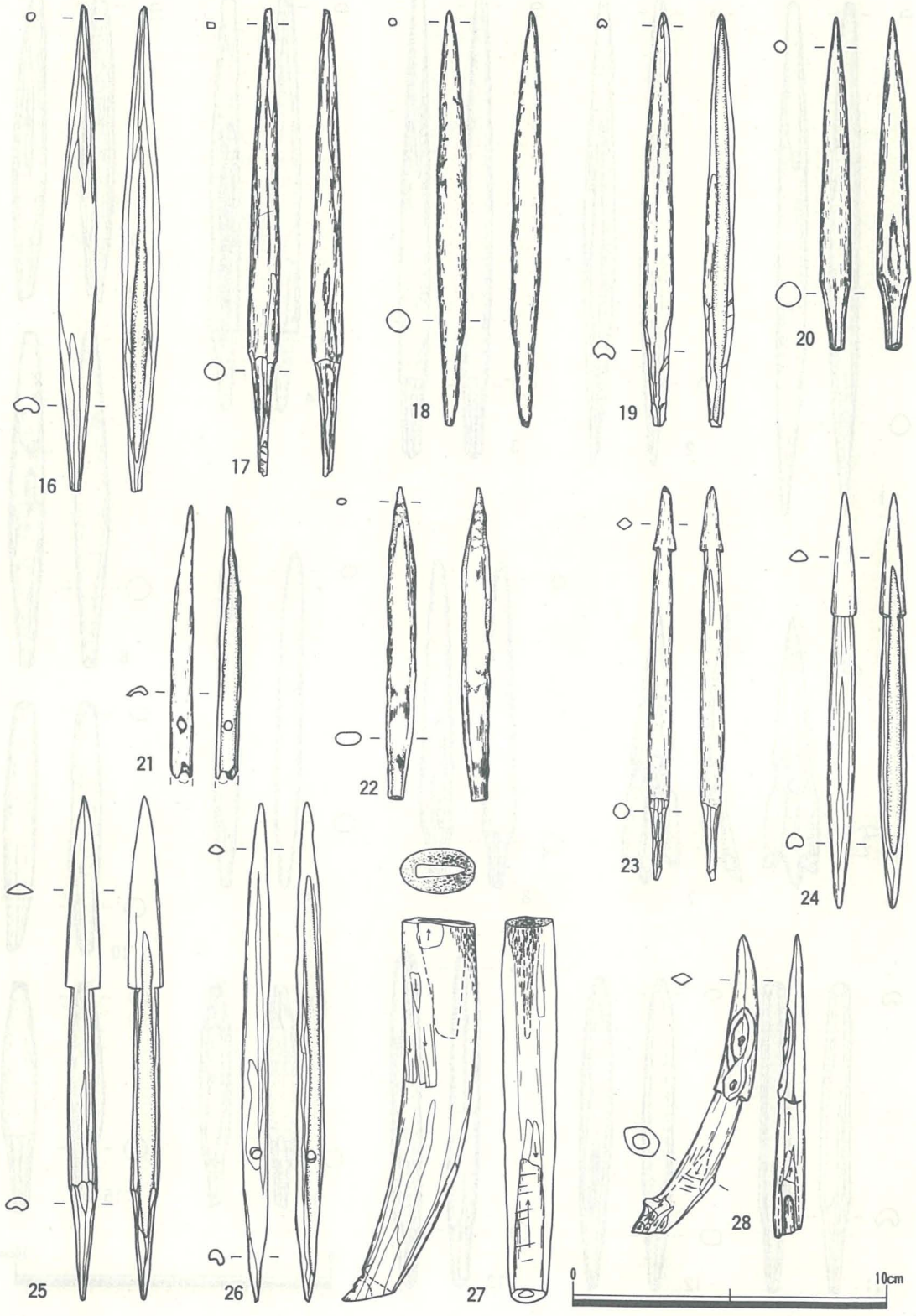
(5)　萱野(1978)によると「スンチという鹿の筋を細く裂いて作った糸をぐるぐる巻いてとめる。」とある。

(6)　萱野（1978）によると「矢尻の中央にルムチップといって毒を塗りこむために、小指のはらが埋まるくらいの窪みをつけます。」とある。

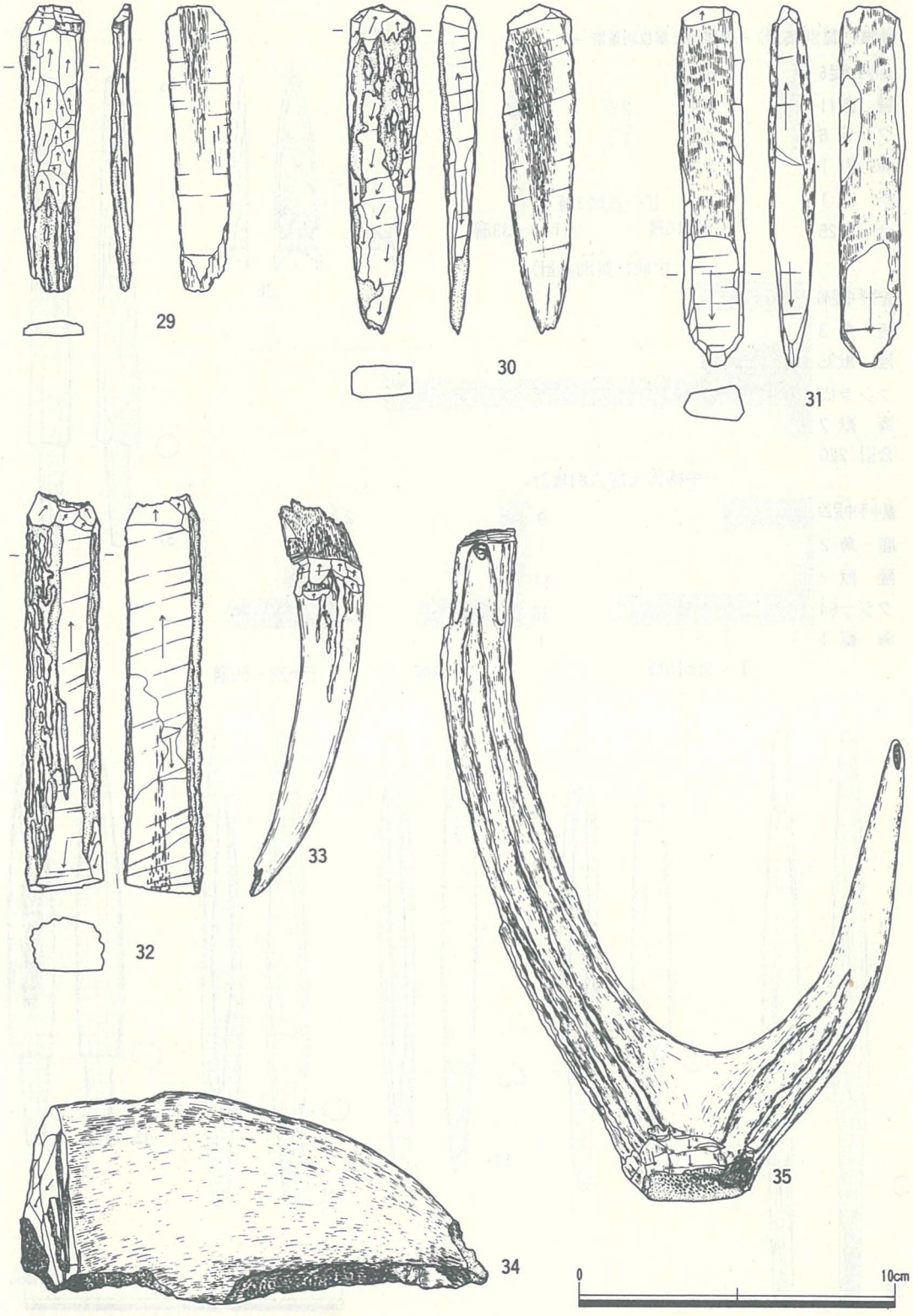
(7)　当資料は中柄が矢柄に装着された状能で薄板に糸で3カ所をしばって固定されていた。そのうちの一本を慎重に取り出すことに成功した。重心を測定することの出来たのは41の中柄の装着されていたものである。この中柄の重量は16.5g である。



第28図　骨角器、1



第29図　骨角器、2



第30図　骨角器、3

〈骨鏃材質別集計〉―骨鏃出土層位別集計―

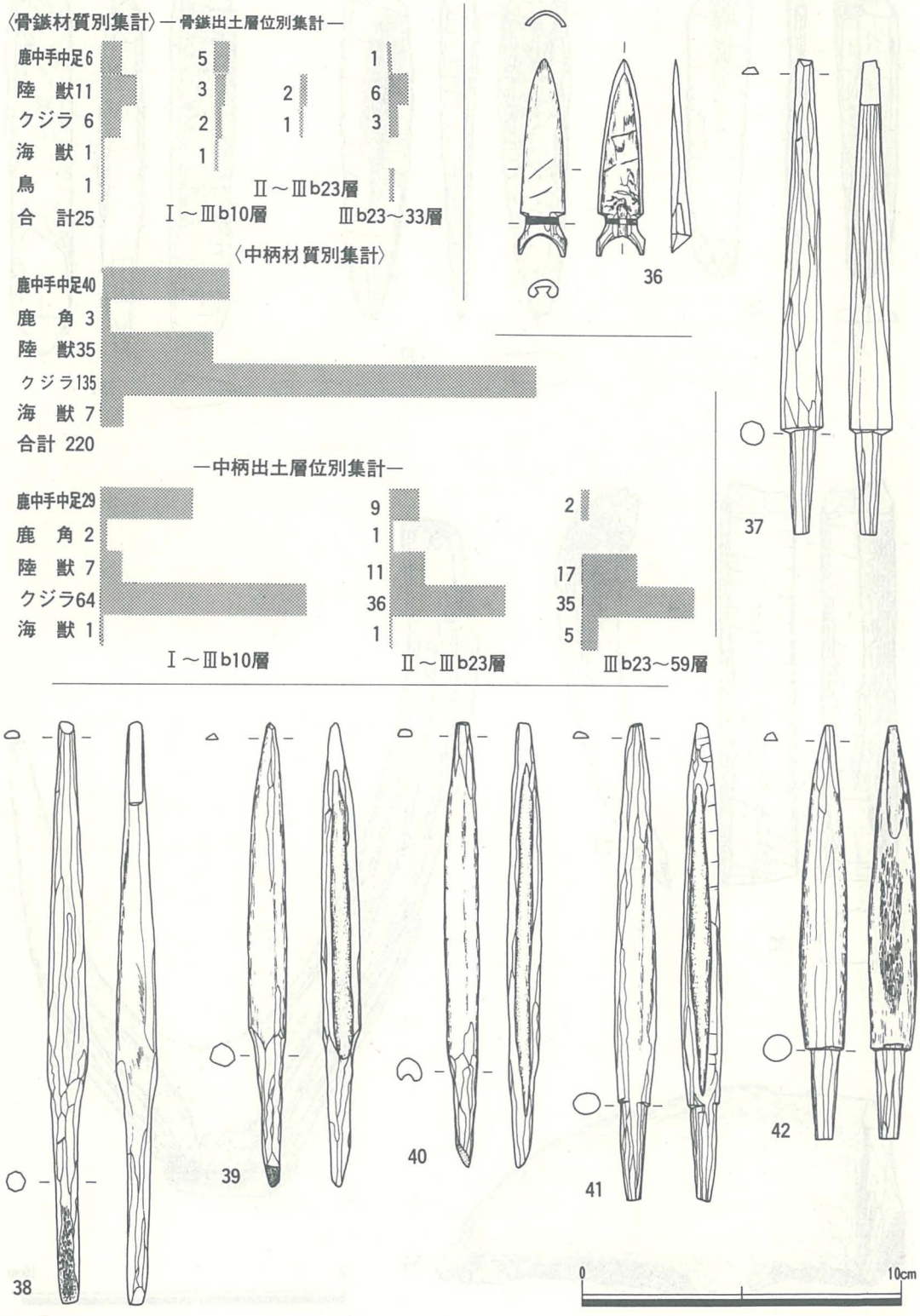
	Ⅰ～Ⅲb10層	Ⅱ～Ⅲb23層	Ⅲb23～33層
鹿中手中足	6	5	1
陸　獣	11	3	6
クジラ	6	2	3
海　獣	1	1	
鳥	1		
合　計	25		

〈中柄材質別集計〉

鹿中手中足	40
鹿　角	3
陸　獣	35
クジラ	135
海　獣	7
合計	220

―中柄出土層位別集計―

	Ⅰ～Ⅲb10層	Ⅱ～Ⅲb23層	Ⅲb23～59層
鹿中手中足	29	9	2
鹿　角	2	1	
陸　獣	7	11	17
クジラ	64	36	35
海　獣	1	1	5



第31図　骨角器、4

e．木製品（第32図～39図）

出土地区は壕跡地区の旧沢地内遺物廃棄場所である27Ｋ２区、27Ｋ７区、27Ｋ20区、樋状木製品出土地区、及び昭和55年度調査の、建物跡遺構部分よりである。全体では約3,400点程の出土がみられた。これを衣・食・住・建築・武具・祭祀信仰・その他用途不明に分類し、分類によってはさらに細分したものもある。以下分類別に掲載する。

衣関係（第32図１～５）

下駄（１～３、５）

１は出土例の中では比較的保存状態が良好なものである。長円形を呈し、左後壺には鼻緒ずれの痕跡がみられる。裏面縁辺は斜めにていねいな面取りが施されている。また台部裏面後壺付近もノミ状工具による整形が施されている。歯部の形状は台形状となっており、頂部は使用による磨滅等のため丸くなっている。歯の作出は後歯にノコによる痕跡がわずかに確認された。推定の大きさ７寸程であり、大人の女性用と思われる。２は隅丸長方形を呈する。縁辺は垂直な面取りが施されている。裏面後アゴ及び後歯残存部は焼成強化している。歯部にはノコによる整形痕がみられる。大きさ４寸９分程であり幼児用の下駄と思われる。３はほぼ長方形を呈する。全体として堅牢に作られている。歯部はノコによる作出である。台部は破損が激しく、後壺は左右とも欠損している。推定の大きさが７寸８分程であることより大人の男性用と思われる。５は隅丸長方形を呈する。台部裏面にはノミ状工具による整形痕が明瞭にみられる。歯部は側面が丸味をもって整形されている。大きさは推定６寸１分～２分程であり子供用と思われる。尚大きさによる分類は青戸葛西城址調査報告書を参考にした。

履物（４）

長辺の中央にコの字型の切込みを有し短辺上部に長方形の切込みを入れる。左右対称形。尚上部には使用によるくぼみがみられる。草履のようなものであろうか。柾目材を使い薄く作られている。

食関係（第34図６～25）

漆器（第34図６～８）

外面は黒漆塗にすべて赤漆で６は植物文、７、８は鶴が描かれている。内面はすべて赤漆塗である。７、８は土圧のため、左右、上下につぶされている。その他図示していないものは皮膜のみのものが殆んどを占める。また木部の残っている破片では殆んどが内面赤漆塗、外面黒漆塗である。

箸（第34図９～24）いずれも縦方向の長い削り出しにより作られている。大きさによりＡ～Ｄ、断面形により１～３に分けられる。Ａは１尺前後、Ｂは８寸～８寸５分、Ｃは８寸、Ｄは７寸程の長さである。また断面形は１は扁平で隅丸のもの、２は多角形で隅丸のもの、３は方形である。Ａ～Ｄ、１～３を組み合わせてＡ１～Ａ３、Ｂ１～Ｂ３、Ｃ１～Ｃ３、Ｄ１～Ｄ３に分類する。大きさの分類については青戸葛西城址調査報告書を参考にした。断面形の違いは製作技法、用途等により異なるのかもしれない。

Ａ類（第34図９～11）魚箸等といわれているものである。９はＡ１、10はＡ２、11はＡ３に分類される。尚11は形状等より見て箸以外のものかもしれない。Ｂ類（第34図12～14）菜箸・魚箸といわれているものである。12、13はＢ２、14はＢ３に分類される。14は縦に剝離、破損している。

Ｃ類（第34図15～20）

一般的な箸である。15、16はＣ１、17、18はＣ２、19、20はＣ３に分類される。

Ｄ類（第34図21～24）

21、22はＤ１、23、24はＤ２である。極めて細く小型のため、子供用の箸か、あるいは大きさより見て、草茸き屋根の草をとめるためのとめぐしといわれているものかもしれない。

はさみぐし（第34図25）

魚を焼く時に用いるくしである。

飯ベラ（第35図26～28）

26は先端部を焼成し、補強、強化している。使用のため先端部はやや磨滅している。27は先端部を焼成し強化している。また全体にすすけたような状態を呈している。使用のため先端部の磨滅は著しい。28はやや小型である。26、27と同様先端部に若干の焼成がみられる。

折敷（第35図29～30）

いずれも大角八寸四方の角折敷である。29は板目が細かく非常にていねいな作りである。それに比し30は板目も荒く、使用のためか中央がややくぼむ。その他図示していないが３寸四方、厚さ３mm程のものも出土している。

容器（第35図31）

方形である。底は一部炭化している。

俎（まないた）（第35図32）

体部上部と下部にそれぞれ2ケ所ずつ穿孔が施される。表面は使用のため擦痕が斜めに多数走る。裏面はノミ状のもので荒い加工が施される。上下の小孔を利用し、固定して使用したものと思われる。

住関係（第35図33、第36図34～46、第37図48、55）曲物の蓋、底板（第35図33、第36図34、35）

35は縁辺が斜めに削り加工されている。また図示していないが中央に小孔のある蓋も出土している。底板には表面を焼成して堅緻にしているものもある。

蓋（第36図36）

方形であり、極めてていねいな加工が施される。縁辺は斜めに加工が施されている。尚中央の小孔にはつまみの一部が残存している。

栓（第36図37、38）

37は極めてていねいに整形されている。尚熱した鉄製品で縁辺の面取りが施される。下部には木製の楔が打ちこまれている。38は下端部を多面形に加工し、中央部には上下より抉入を入れる。下端部断面形は不整多角形を呈する。

取手（第36図39、40）

39は右下半部を欠損する。断面形は下半部はほぼ方形であるが、着手部分は内側に若干の丸味を有する。着手部分以外は非常に脆くなっている。

ヘラ（第36図41～43）

41は全体に扁平であり、体部は方形を呈する。体部中央に小孔あり。42、43は断面が先端部にいくに従い薄くなる。先端部は丸味を有する。

札（第36図44～46）

45は薄い板を削り出し、先端に丸味をつけ上部縁辺両側に抉入を入れ、表面をていねいに加工したものである。46は棒状のものに上端、下端にきざみを入れ、縁辺を斜めにノミ状工具で削る。裏面は平担であり、×の焼印状のものが中央部に入る。44は46を小型化したような形態であり、上端、下端近くにきざみが入る。断面はかまぼこ状を呈する。

鉤（第37図48、55）

48はていねいな整形、加工が施されている。上部に小孔あり。55は炉鉤と思われる。上部に紐を結ぶためと思われる抉入が入る。

建築関係（第37図49～54、第38図56～58）

杭（第37図49～52）

49は断面形は下部が不整六角形、上部が四角形を呈する。杭にしては上部、下部の整形がていねいであり、杭というよりも樽等の栓という可能性も考えられる。50は中央部よりやや下に抉入が入る。先端部は鋭利であり、下端には若干の擦痕が入る。抉入部分に紐を結びつけて打ちこんだのであろうか。52は丸太材に長い削り出しを行ない、さらに先端をとがらせたものである。頭部には焼成痕あり。

角材、板材、柾材（第37図53～54、第40図56～58）。53は下部にノミ状の工具でほぞ穴状に加工されている。表面にも荒い加工が施され、すすけたような状態である。尚左右面、裏面とも打ち割ったままである。角材である。54は長方形の柾目材であり上下に数個の竹釘が打ちこまれている。板材。56は方形の板材である。打ち割り後、かんな状の工具でつるつるにしている。57はほぞ状の方形の小孔のある板材である。58は柾材である。

武具（第38図59、60、67、72）

鞘（第38図72）

方形の板材の角を丸くし、内側を削りこみ内弯させた2枚を重ね合わせたものである。小刀用か。

中柄（第38図67）

全体をていねいに削り出し基部はやや段差をつけ細くする。先端部は下から上へさらに二次的な加工を施す。骨角製中柄とほぼ同様な形状を呈する。出土地点は樋状木製品出土地区である。

弓（第38図59、60）

全体に丸味をもたせて作ってあり、両端は細く扁平である。

祭祀、信仰関係（第38図65）

鏃形（第38図65）

断面は扁平なかまぼこ状を呈し、中央にやや高い一条の稜を形成する。裏面は平担であるが、基部のすぐ上に段差をもつ箇所あり。平安時代頃より存在する木製模造品と思われる。

その他（第38図61～64、66、68、70、71、73～80）

用途不明のものである。図示したものはその代表的なものである。61は断面方形であり上部に抉入を入れたものである。62は断面方形であり、上部に穿孔を施す。64はヘラ状のものである。縁辺

を斜めに削り出している。66は中央を細く削り両端とは段差を有する。中央に細いきざみあり。68は中央部に浅い溝と深い溝を交互に削り出している。70は先端部の小孔に竹釘状のものが入っている。材質は非常に固い。71は柾目材を包丁形に削り出す。断面形は上部より下部にいくに従い薄くなる。ヘラか。73は丸太材を砲弾形に削り出したものである。下部には二条の浅い溝状の削り出しが入る。74は下部にいくに従い厚さを増す。塔婆板の可能性あり。76は扁平な棒状のものである。先端は薄くややとがっており、ヘラの可能性がある。77は中央部に段差を有し、下部へかけてていねいな加工を施している。表面にはみがきをかけている。焼成痕あり。80は断面が方形を呈し、極めてていねいな整形を施している。炉鉤の可能性もある。

ま と め

約3,400点の内訳としては、衣関係7点、食関係約900点、住関係約130点、建築関係約130点、武具約30点、祭祀、信仰関係1点、その他用途不明約2,200点程である。用途不明品を抜いた分類の中の各比率は衣関係0.6％、食関係75.1％、住関係は11％、建築関係11.3％、武具は2％程である。これらよりみると、おもに生活に関してのものが圧倒的に多く、武具等はわずかであった。特に箸は圧倒的多数を占める。またグリッド毎出土総点数は27K7区が多く、次いで27K20区、27K2区である。これは旧沢の中央が27K7区27K20区を通っているためで、27K2区は沢の立ち上がり部分が多かったため、及びその土質等により木製品の残存状況が悪かったためと考えられる。また寺の沢地内、樋状木製品出土地区でも木製品が約100点程出土しているがやはり箸の比率が高い。さらに箸のみの細分類毎の比率ではC類が全体の8割を占める。グリッド別では27K7区がC類の比率が最も高い。また屋根のとめぐしの可能性があるD類は27K20区の比率が最も高い。

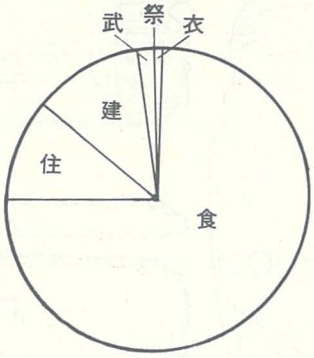
（斉藤邦典）

挿図No	大分類	名称	出土区	層位	最大長	最大幅	最大厚	備考
3	衣	下駄	27K2.7 東壁	Ⅲb	20.5	8.5	1.9(5.5)	
1	衣	下駄	27K2.7 東壁	Ⅲb	19.0	9.0	1.1(5.0)	
2	衣	下駄	27K2	Ⅲb 39	14.0	7.7	1.3(3.5)	
5	衣	下駄	27K7	Ⅲb 40	16.0	7.7	0.6(3.2)	
4	衣	草履	27K7	Ⅲb	30.4	10.1	0.5	
9	食	箸	26M4	Ⅲc′1	31.5	1.0	0.7	A1タイプ
10	食	箸	27K20	Ⅲb	38.0	1.2	1.2	A2タイプ
11	食	箸	27K20	Ⅲb	35.2	1.1	0.8	A3タイプ
13	食	箸	27K7	Ⅲb	25.8	0.7	0.9	B2タイプ
12	食	箸	27K7	Ⅲb	26.4	0.7	0.7	B3タイプ
14	食	箸	27K20	Ⅲb	29.3	0.9	0.5	B3タイプ
15	食	箸	27K20	Ⅲb	21.4	0.7	0.4	C1タイプ
18	食	箸	27K20	Ⅲb	21.7	0.7	0.5	C1タイプ
16	食	箸	27K20	Ⅲb	22.1	0.7	0.6	C2タイプ
17	食	箸	27K20	Ⅲb	22.7	0.7	0.5	C2タイプ
19	食	箸	27K7	Ⅲb	23.5	0.6	0.5	C3タイプ
20	食	箸	27K20	Ⅲb	24.0	0.6	0.5	C3タイプ
21	食	箸	27K20	Ⅲb	18.2	0.3	0.4	D1タイプ
22	食	箸	27K20	Ⅲb	15.8	0.5	0.4	D1タイプ
24	食	箸	27K7 南壁	Ⅲb	12.6	0.6	0.5	D2タイプ
23	食	箸	27K20	Ⅲb	14.8	0.4	0.4	D2タイプ
25	食	はさみぐし	27K20	Ⅲb	26.5	1.1	0.7	
27	食	へら	27K7	Ⅲb	18.6	5.4	0.7	
26	食	へら	27K7	Ⅲb	19.3	5.5	0.7	
28	食	へら	27K20	Ⅲb	15.8	3.5	0.7	
31	食	容器	27K7	Ⅲb	8.8	6.0	0.9(3.0)	
29	食	折敷	27K7	Ⅲb 50	18.0	24.8	0.7	
30	食	折敷	27K7	Ⅲb 40	9.0	24.3	0.9	
8	食	漆器	27K2	Ⅲb	12..2	13.0	0.6	

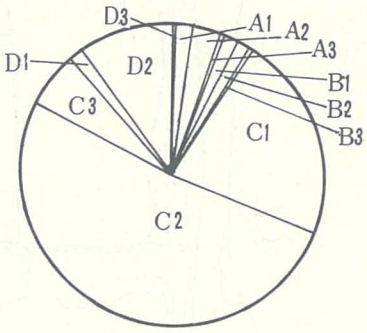
第2表　木製品計測表(1)

7	食	漆　　器	27K7	Ⅲb	11.7	16.2	0.6	
6	食	漆　　器	27K20	Ⅲb	9.2	9.3	1.0	
32	食	ま な 板	27K20	Ⅲb	40.0	20.5	1.8	
33	住	底　　板	27K2.7 東壁	Ⅲb	22.6	22.5	1.2	
34	住	底　　板	27K2.7 東壁	Ⅲb	18.0	18.6	0.8	
35	住	底　　板	27K7	Ⅲb 61	6.3	6.5	0.8	
36	住	蓋	27K7	Ⅲb	5.6	6.3	1.0	
37	住	栓	27K7	Ⅲb	6.8	3.7	1.7	
38	住	栓	27K7	Ⅲb	11.5	2.8	1.9	
40	住	取　　手	27K2.7 東壁	Ⅲb	22.5	6.6	1.2	
39	住	取　　手	27K2.7 東壁	Ⅲb	25.3	10.1	1.8	
41	住	へ　　ら	27K7	Ⅲb	19.2	8.7	0.7	
42	住	へ　　ら	27K20	Ⅲb	15.9	1.6	0.4	
43	住	へ　　ら	27K20	Ⅲb	13.3	1.4	0.4	
47	住	浮　　子?	27K7	Ⅲb	16.9	14.5	7.0	
	住	お　　盆	27K7	Ⅲb 61	65.8	35.0	1.9	
46	住	札	27K2.7 東壁	Ⅲb	38.2	4.7	1.5	
44	住	札	27K2.7 東壁	Ⅲb	30.8	2.0	1.8	
45	住	札	26M4	ロームブロック	18.8	3.5	0.6	
48	住	鉤	27K7	Ⅲb	10.2	5.0	2.8	
55	住	鉤	27K7	Ⅲb 50	13.5	3.0	3.2	
50	建築部材	杭	27K7	Ⅲb	24.8	4.9	4.2	
52	建築部材	杭	27K7	Ⅲb	38.0	4.5	4.2	
49	建築部材	杭	27K7	Ⅲb	20.8	4.2	4.8	
51	建築部材	杭	27K20	Ⅲb	30.5	6.7	5.0	
53	建築部材	角　　材	27K7	Ⅲb	25.5	7.6	6.0	
54	建築部材	板　　材	27K20	Ⅲb	33.5	8.6	0.8	
57	建築部材	板　　材	27K20	Ⅲb	37.2	15.4	1.8	
58	建築部材	柾　　材	27K20	Ⅲb	37.0	4.2	0.3	
56	建築部材	板　　材	27K7	Ⅲb 46	39.0	19.0	3.0	
72	武　　具	さ　　や	27K20	Ⅲb	23.6	4.0	2.1	
59	武　　具	弓	27K2	Ⅲb 32	68.0	2.5	1.7	
60	武　　具	弓	27K7	Ⅲb	67.0	1.8	1.2	
67	武　　具	中　　柄	25M24	Ⅲc′1	18.5	1.3	1.2	
65	祭　　祀	鏃　　形	27K7	Ⅲb	19.5	4.1	0.9	
73	そ の 他		27K2.7 東壁	Ⅲb	25.3	14.0	4.5	
64	そ の 他		27K7	Ⅲb	10.8	1.3	0.4	
79	そ の 他		27K7	Ⅲb 49	32.0	2.2	0.6	
76	そ の 他		27K2.7 東壁	Ⅲb	28.4	1.9	0.6	
70	そ の 他		27K7	Ⅲb	17.5	1.4	1.2	
69	そ の 他		27K20	Ⅲb	7.0	2.4	1.2	
71	そ の 他		27K7	Ⅲb	21.5	3.4	1.2	
66	そ の 他		27K20	Ⅲb	21.0	1.1	0.9	
68	そ の 他		27K2.7 東壁	Ⅲb	19.0	1.7	0.6	
75	そ の 他		27K2.7 東壁	Ⅲb	27.3	8.6	1.4	
80	そ の 他		27K2	Ⅲb 41	23.1	5.3	1.3	
61	そ の 他		27K20	Ⅲb	77.0	3.1	2.2	
62	そ の 他		27K2	Ⅲb 41	81.8	2.8	2.0	
77	そ の 他		27K2.7 東壁	Ⅲb	20.3	10.2	6.5	
63	そ の 他		27K20	Ⅲb	8.2	3.3	1.2	
74	そ の 他		27K7	Ⅲb	30.3	10.2	2.0	
	そ の 他		25L17	Ⅲc	150.0	22.8	1.7(7.2)	
78	そ の 他		27K20	Ⅲb	15.2	4.8	2.2	

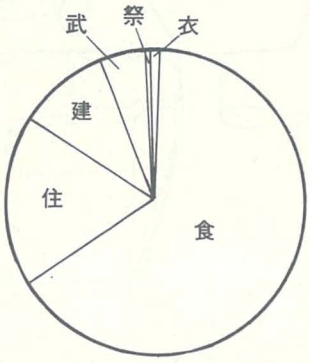
第2表　木製品計測表(2)



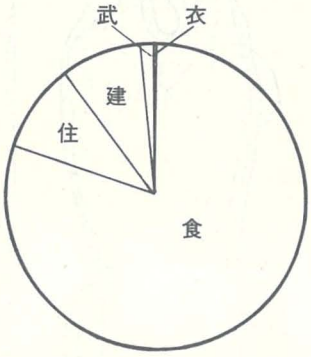
総合比率



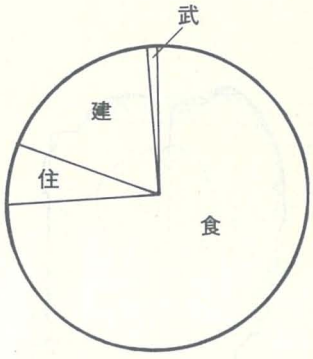
箸総合比率



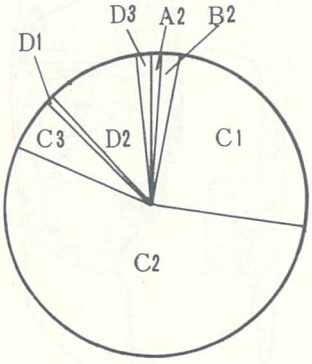
27K2



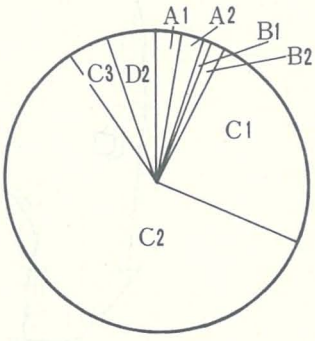
27K7



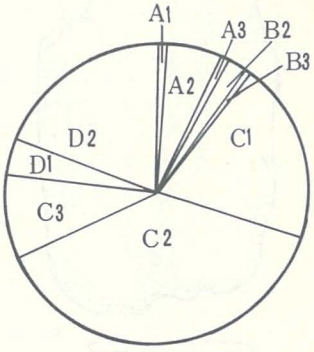
27K20



27K2



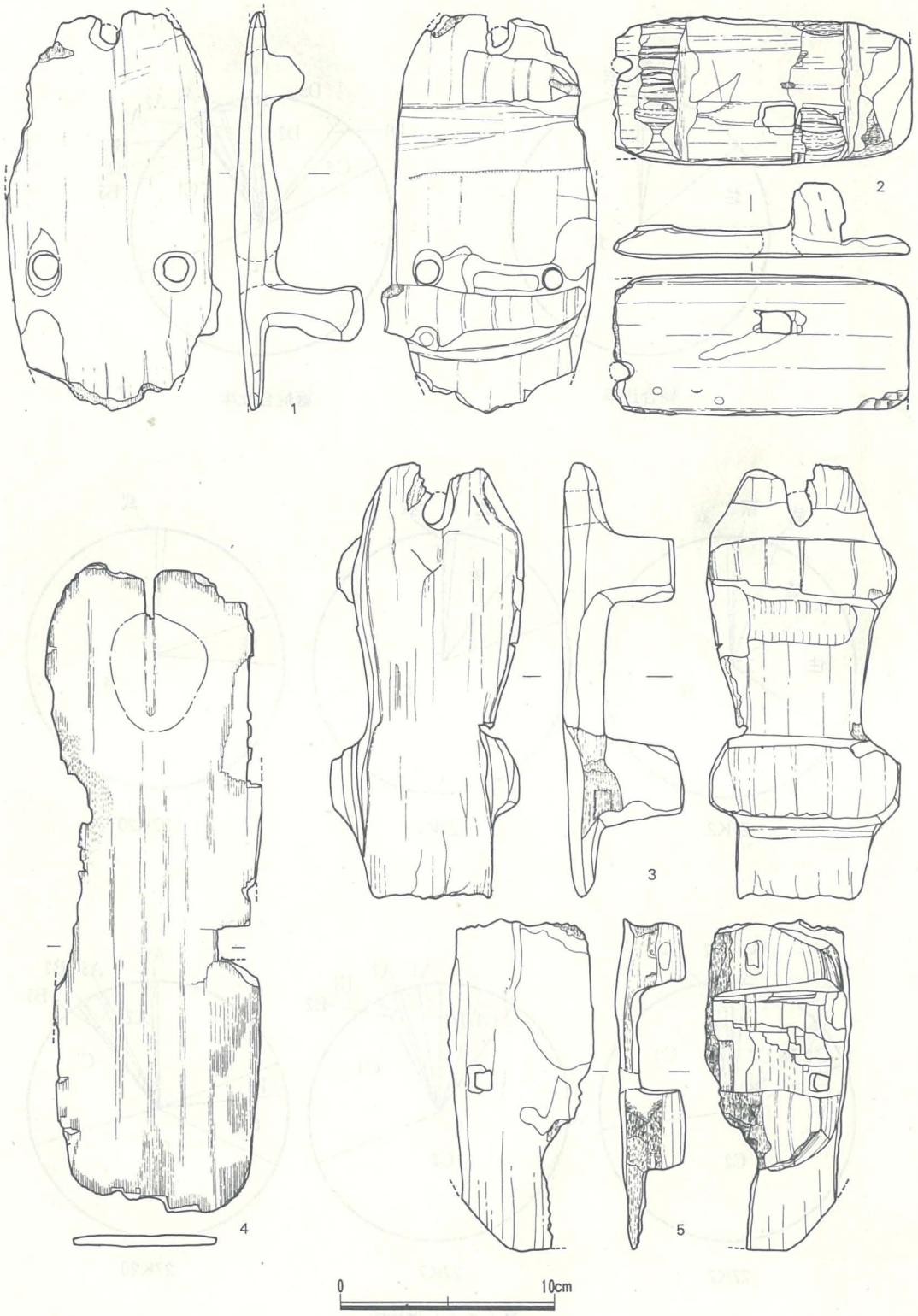
27K7



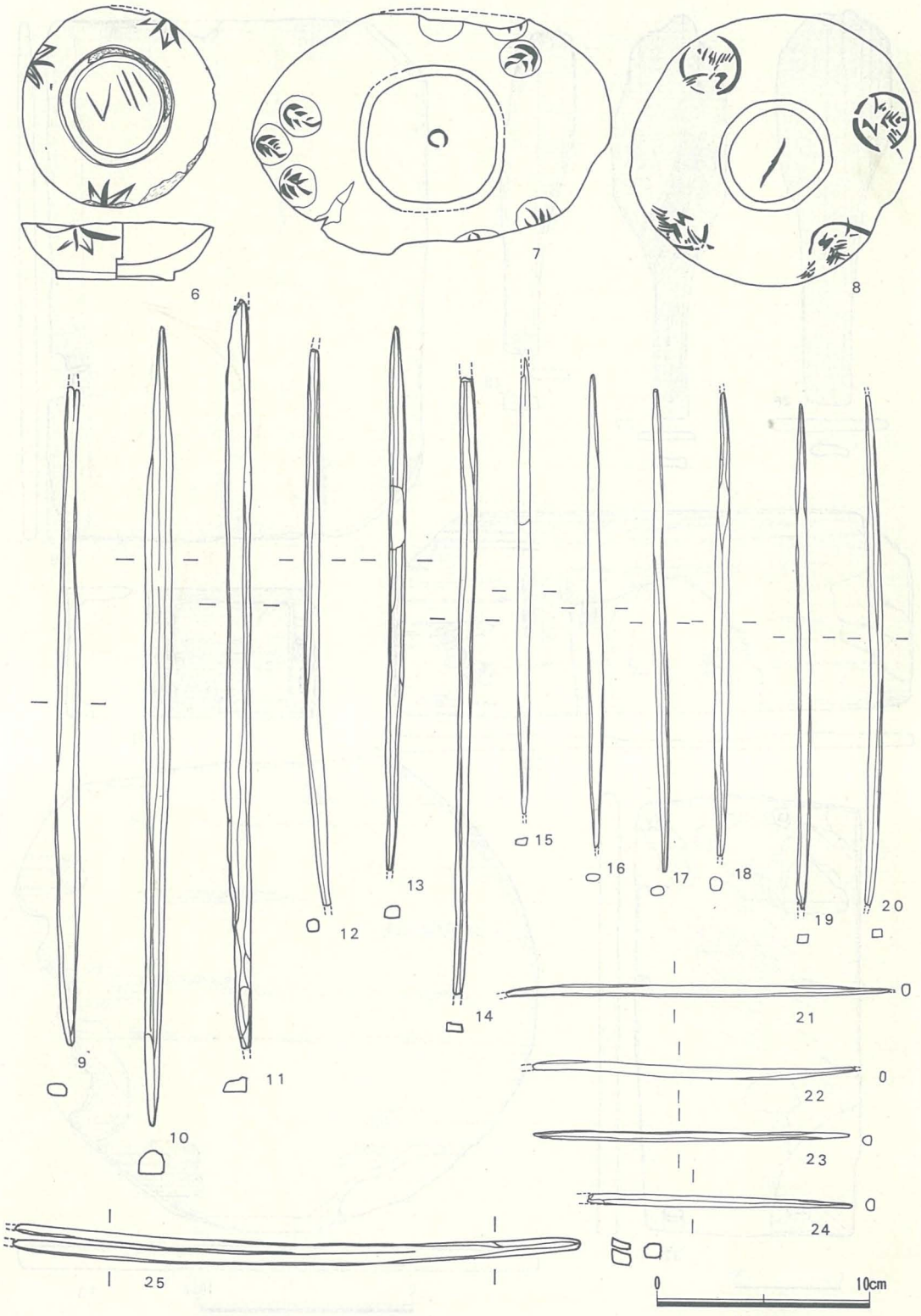
27K20

箸グリッド毎比率

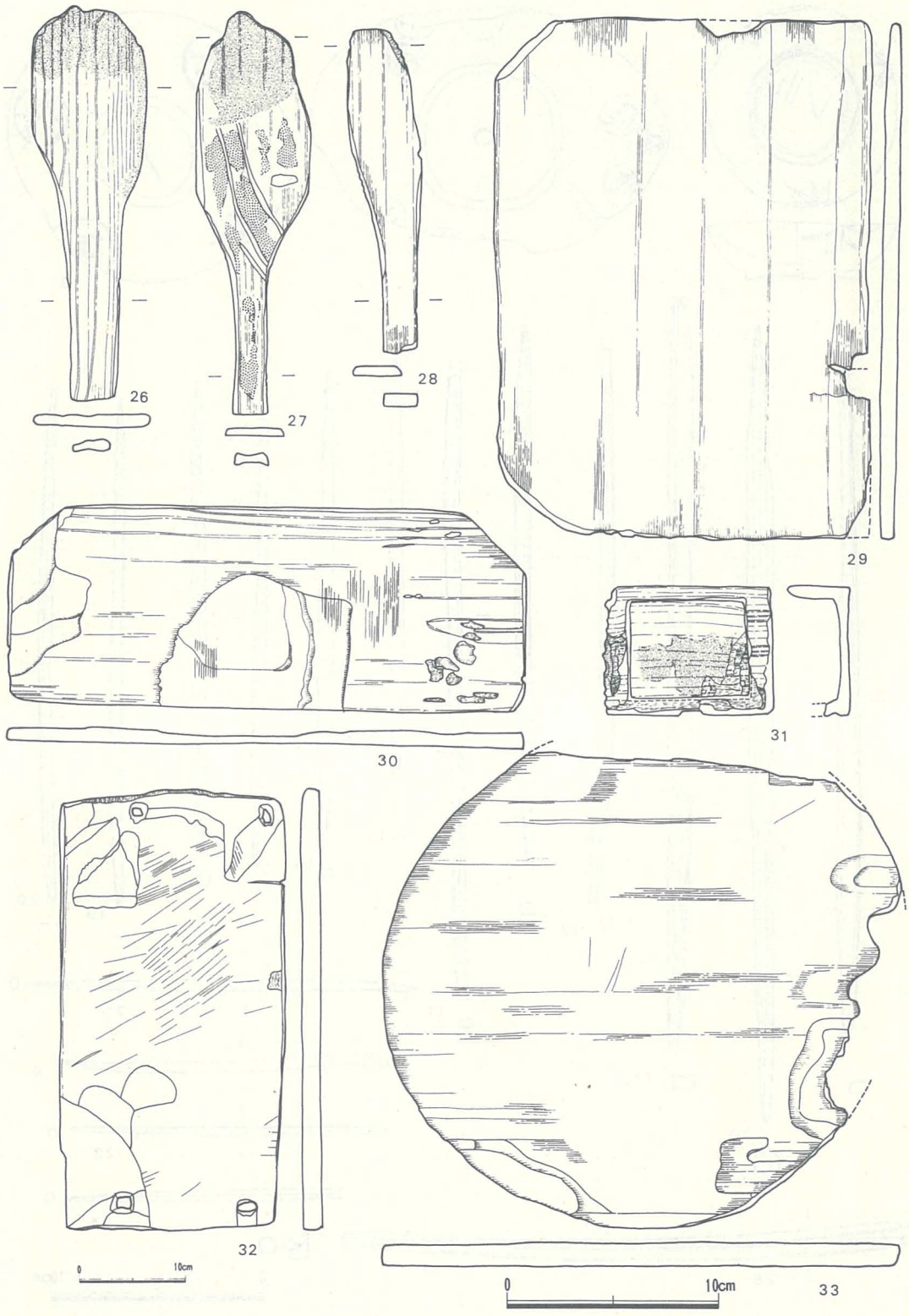
第32図　木製品円グラフ



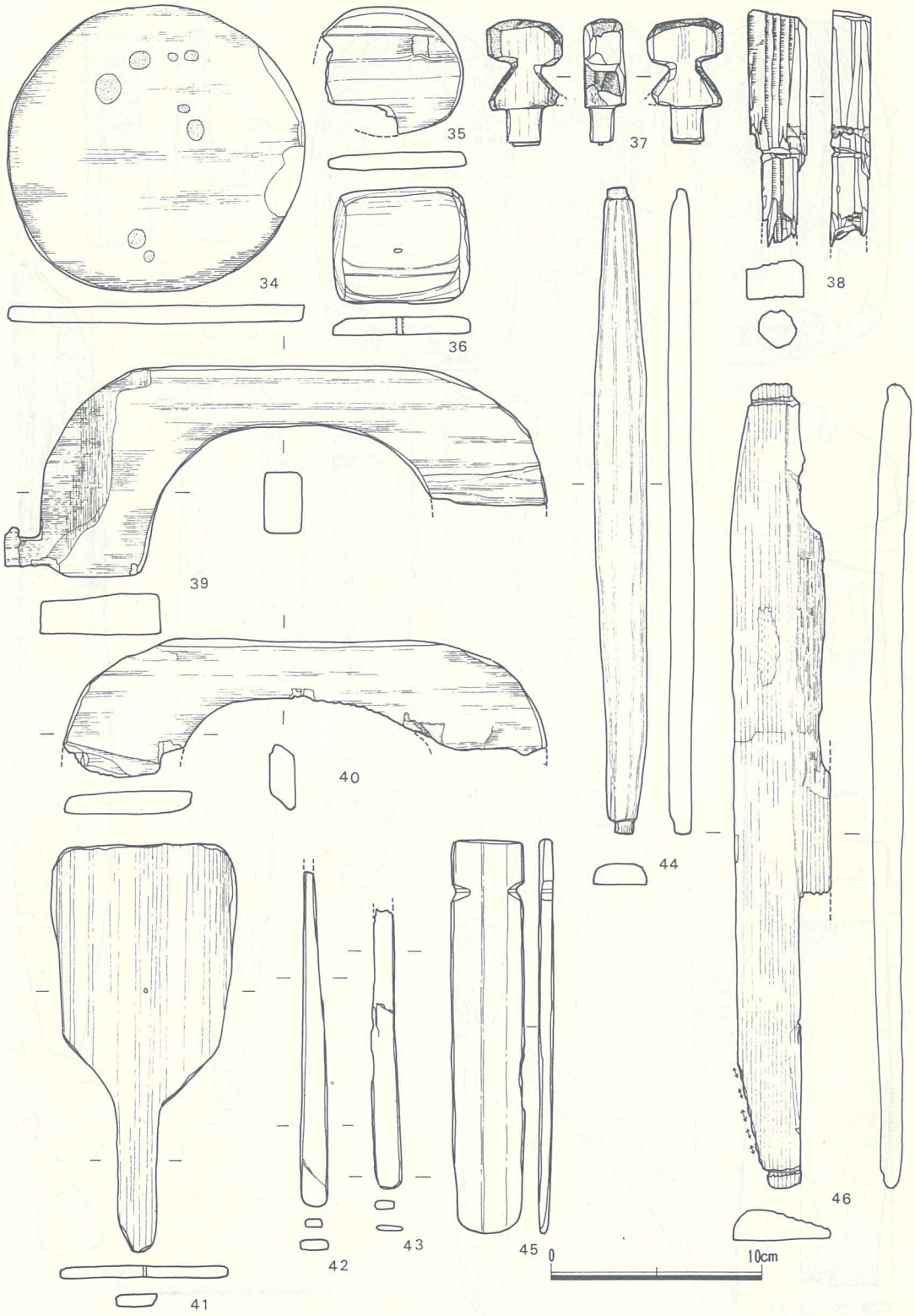
第33図　木製品（衣）1



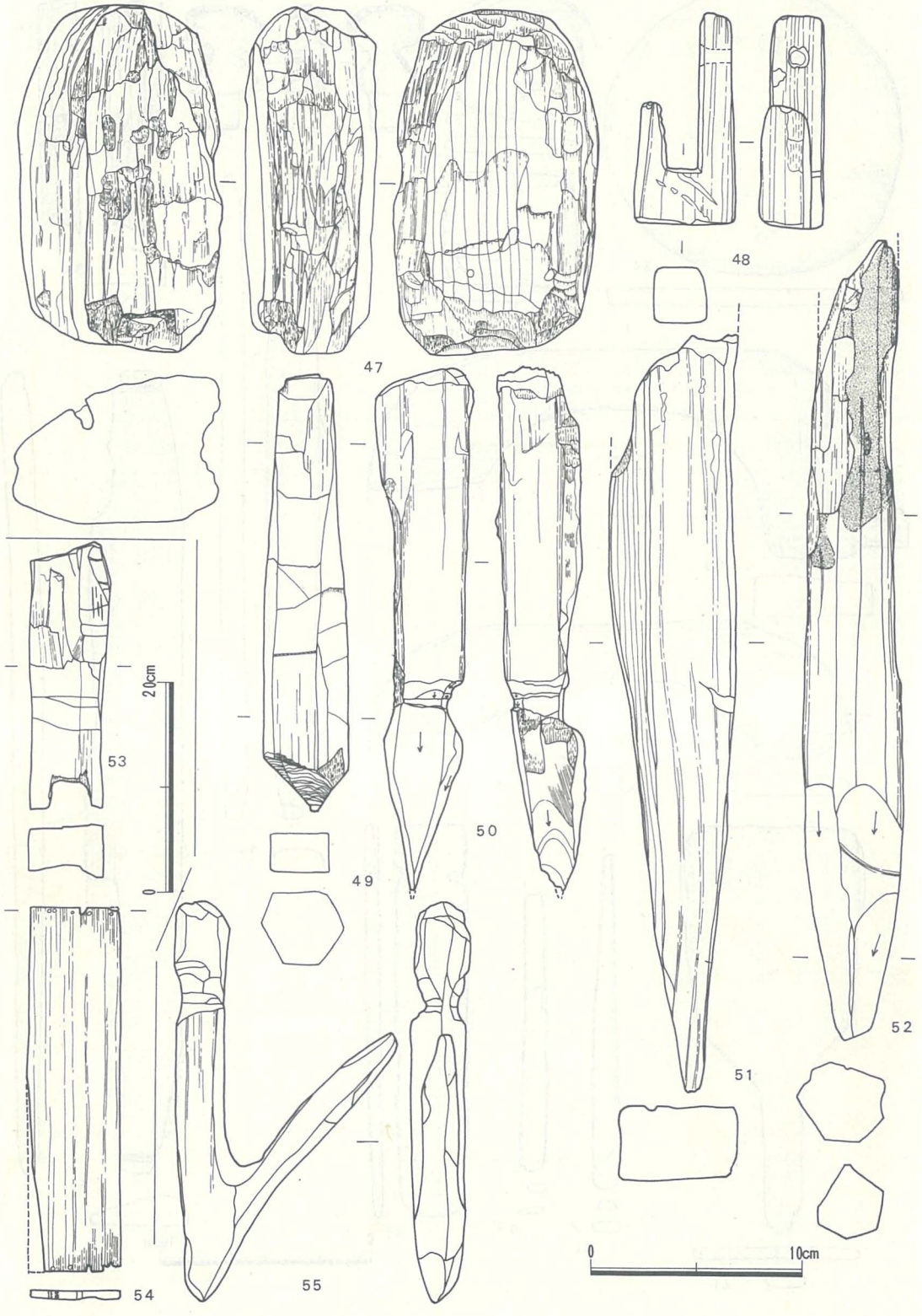
第34図　木製品(食) 2



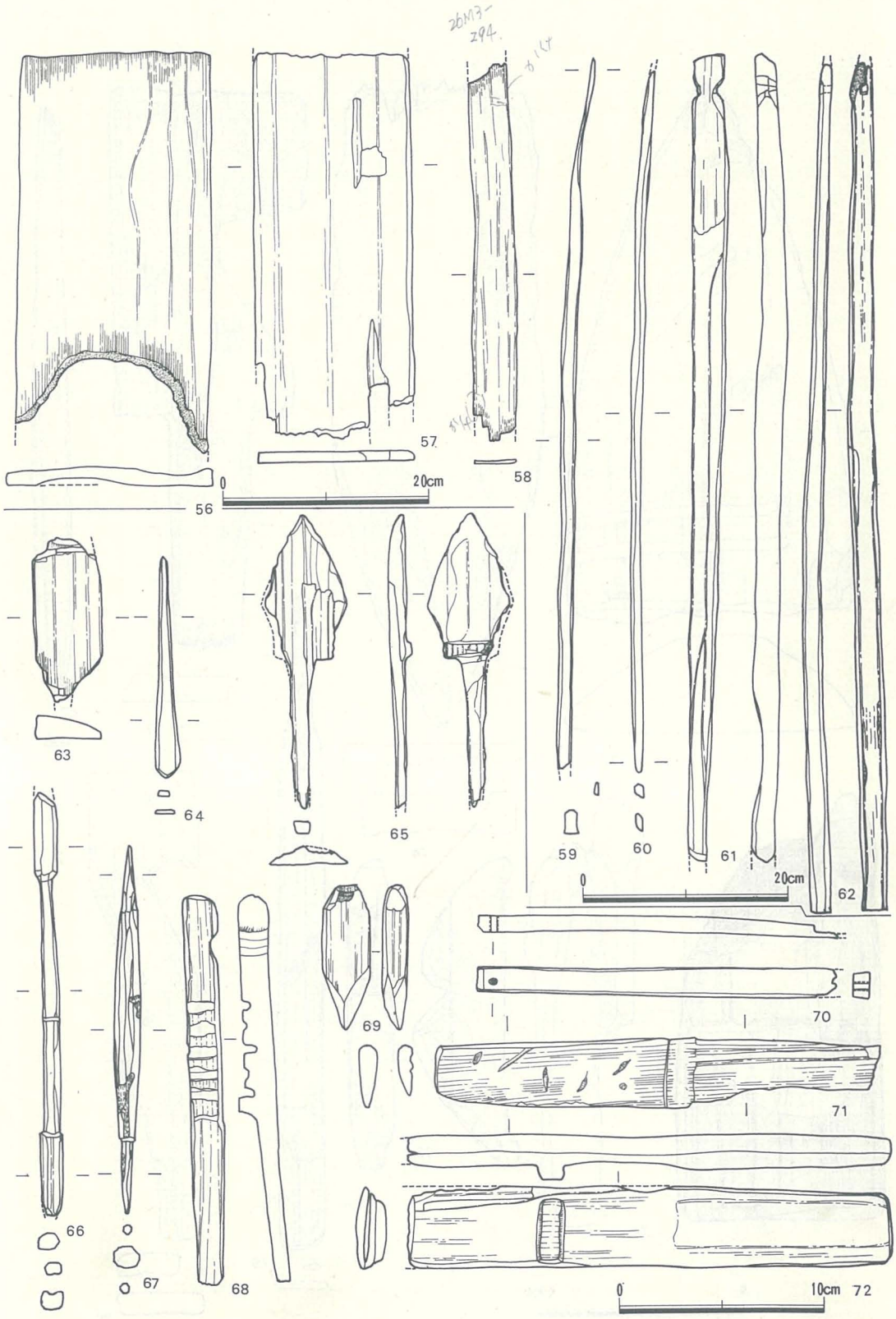
第35図　木製品(食住) 3



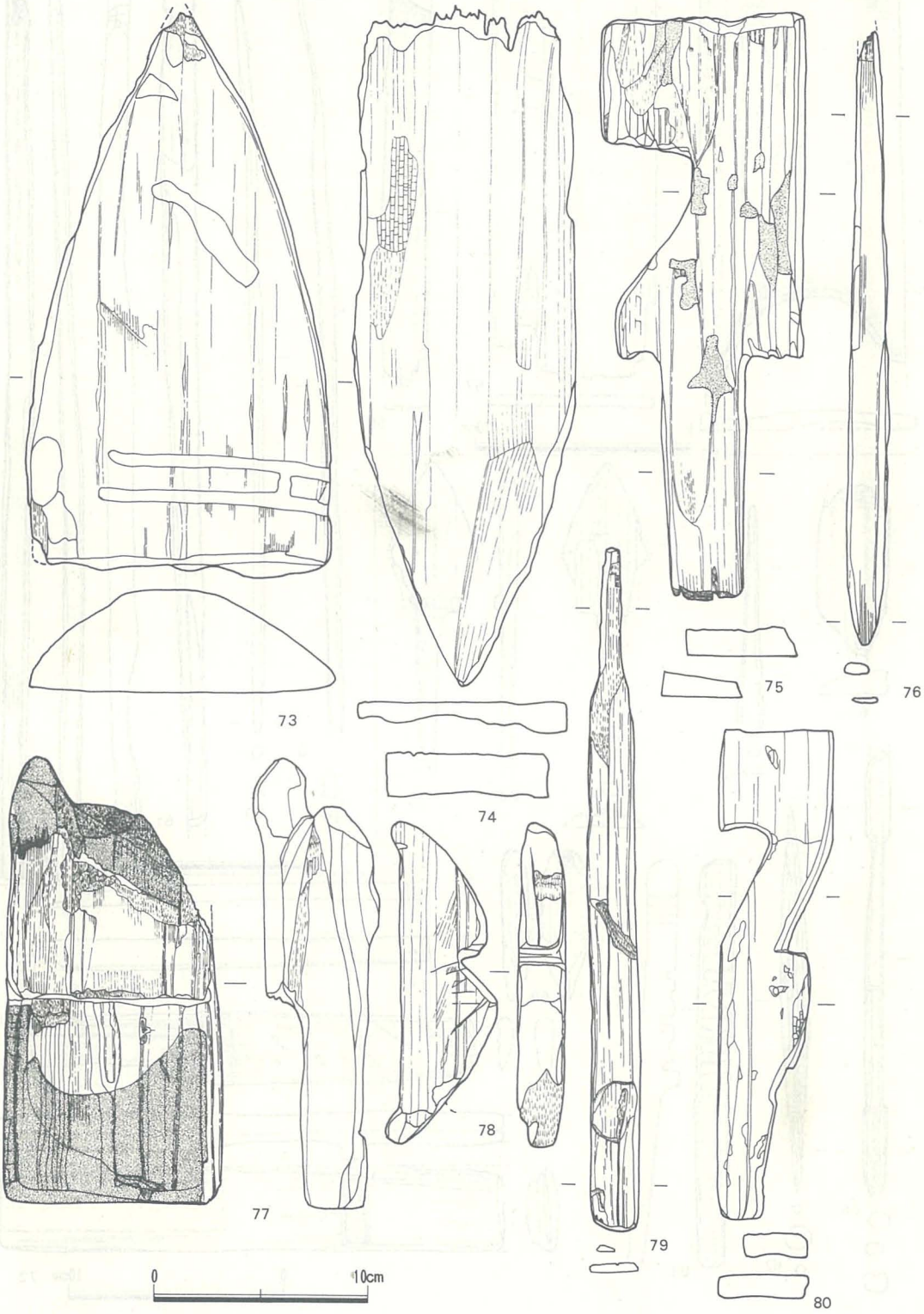
第36図　木製品(住) 4



第37図　木製品(建築関係、その他) 5



第38図　木製品（武具、その他）6



第39図　木製品（その他）7

f．古銭（館神八幡宮跡周辺部出土寛永通宝）

（附図３、第40図）

本調査では八幡宮跡周辺（特に円形土留上を中心に多く出土した。）より出土した古銭は約1,200枚を数え、そのうち渡来銭はわずか20枚程度である。過去の調査（54～56年度）では約600枚の古銭のうち渡来銭は500枚を越える数に対し、寛永銭は約90枚位で発掘区一帯に散発的な出土をみるだけであった。そこで本項では、今回多量に出土した寛永銭をとりあげ若干の分類を試みた。

尚、本資料の分類には約1,200枚のうちから欠損品や錆のため銭文が顕著に解読できないものを除き約600枚の寛永銭を抽出した。そして、それらを拓本にとり銭径、銭文の微妙な変化をみることにした。寛永通宝は、江戸初期に常陸水戸で鋳造されたものに始まり、長く明治初年に至る約260年もの間全国各地の鋳銭場（銭座）によって鋳造されたものである。そして銭文が１種類しかなく、鋳造期や鋳造地によって銭径や、銭文が微妙に変化しており、分類していくと限りなく多種類に及ぶ。しかし、今日に至っては数種類の専門図譜が刊行され多くの分類が可能になっている。よって本資料の分類においては、「日本貨幣図鑑―郡司勇夫―1981」の分類をもとに行い、比較的顕著な識別資料を掲載した。（第40図）

第３表は鋳造期、鋳造地別による諸特徴を示しそれによると、まず二種に大別される。初期の寛永銭といわれるものは、寛永期（1624）から明暦期（1655）頃までのもので、当時は径寸26.4㎜、量目１匁（3.75g）という幕府の規定によって鋳造されていたので、比較的大形化したものであった。そして文字が大きく、太く、その文字が著しく小変化するという特徴をもっている。（第40図1～9）そして、元禄８年（1695）に銭貨の改鋳が行われたことで少しずつ小形化され文字も細く小さくなる。その書体も美形のものが多くなり、初期の頃のものとは、ほぼ識別が可能になる。（第40図10～35）そこで前者を「古寛永」と呼び、後者は、「新寛永」と呼んでいる。江戸時代は日本の隅々まで貨幣使用がゆきわたった時代である。そういった歴史的背景とともに寛永銭の変化について大まかにふれてみたい。

幕府は全国的な商品流通制度をめざしていたため、大量の貨幣を鋳造しなければならなかった。それに合わす様に16世紀中頃から金銀鉱山の開発が盛んになり金銀の産出が急増した。それでもまだ貨幣需要をみたすことができない為幕府は各地の審領内でも鋳造しなければならなかった。そこで幕府は寛永13年（1636）に初めて寛永銭の鋳造を開始した（第３表１）寛永銭は先の寛永３年に水戸で鋳造されている。そして後に（寛永14年）水戸を始め八ケ所の鋳銭所を置いて鋳造した（第３表2～5）。当時は他の古銭（永楽銭等）も同価で伴用していたが、寛永銭の大量鋳造をはかり他の古銭も鋳潰して鋳造していた（第３表６～13）。まもなく貿易の激化に伴い金銀の流出が増加する反面、金銀の産出が減り始めた。こうした事情にあっても、全国的な貨幣製度を弱めることはできなかった。そして元禄８年（1695、この頃ようやく金銀貨が全国にゆきわたる）、金銀の改鋳に伴い銭貨も改鋳され小形化された（第３表14～18、寛文期以降の経済規模に通貨量を合せようとする配慮があった）。しかしすぐ後に（正徳４年）銭貨の改鋳があり当初のものに復した（第３表19）。これは結局、通貨の質を重視する貨幣論的な発想にもとづいたとされている。

そしてさらに続く幕府の金貨主義の影響を受け銭貨の改鋳があり、又小形軽量化（第３表23～31）と共に元文４年（1739）から初めて鉄銭がでた。しかし、地方の銭座ではまだ銅銭のみ鋳造する所が多く、銭形も大中小がある（第３表32～34）。こうして、金貨中心的な貨幣政策の中でくり返し行われた金銀改鋳の影響を受け、銀不足が生じ、銀化の定量化が行われた。それにより銭貨にも大きな変化を生じ、一文銭の他に四文銭が鋳造された（第３表35）。第40図36は本資料の鋳造地分布図である。15世紀中頃より、アイヌ民族の居住下にあった北海道の南端に和人地（本州系領主の勢力圏で後の松前藩）が併存していた。そして、小規模な城を築き「館主」といわれる階層が形成され政治的権力を握る様になった。しかし、本来の階層としては武士的なものではなく、道南と本州との商業活動（対アイヌ，対本州）を支配する商人（豪商）であった。その代表的な資料として、中世期に流通した古銭のほとんどが含まれていた函館市志海苔古銭がある。勝山館においても、本資料の他、陶磁器、金属製、木製品、骨角製品等の豊富な資料からそういった性格をもっていると思われる。

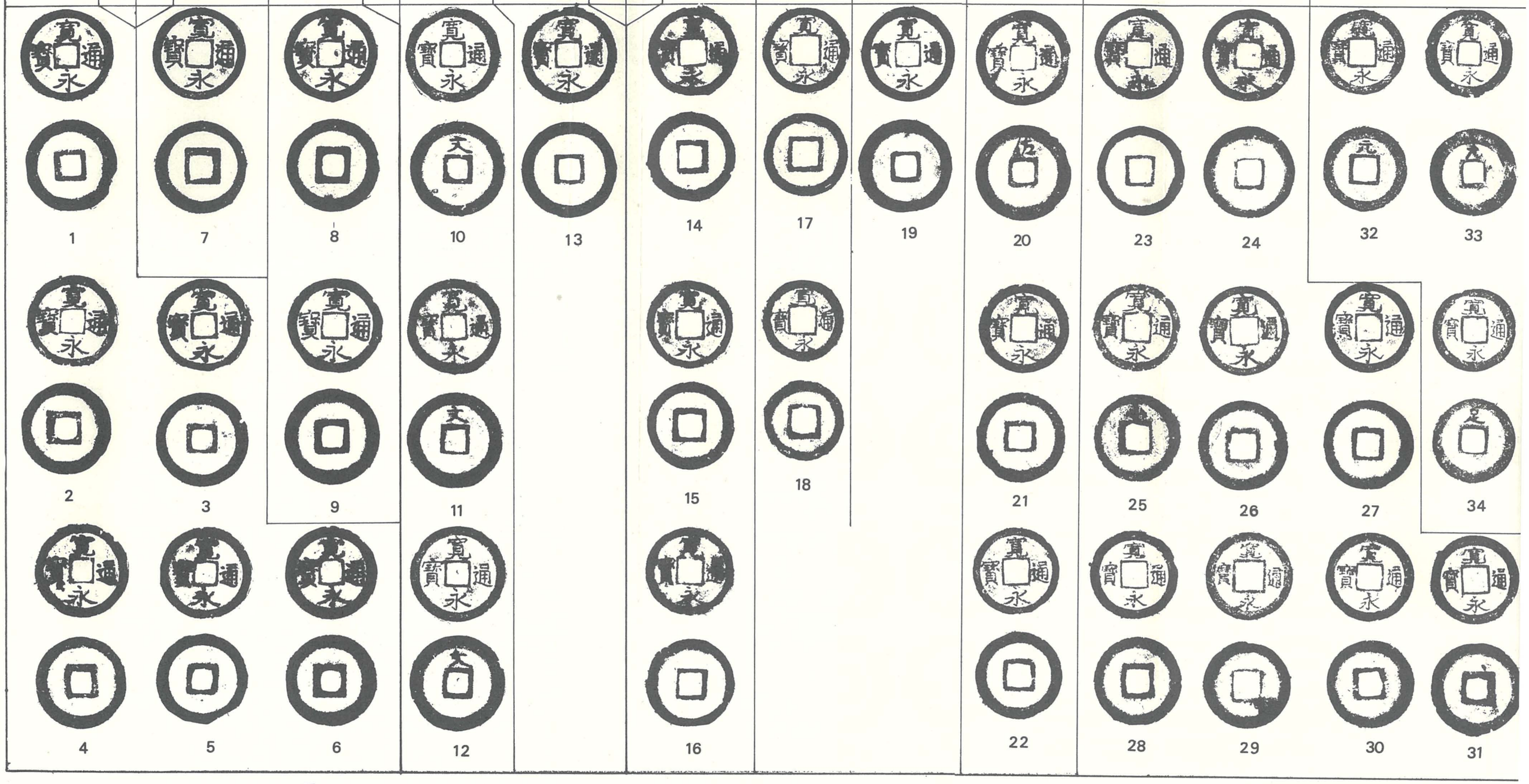
（藤田　登）

	No	銭種	鋳造期	鋳造地	銭径 mm	内郭 mm	厚さ mm	重量 g	備考
古寛永	1		寛永13年	江戸	23.0	5.4	1.6	4.1	銅銭、山城仁寺、摂津でも鋳造
	2	水戸銭	寛永14年	常陸水戸	24.3	5.7	1.2	2.7	銅銭
	3	仙台銭	〃	陸奥仙台	24.5	5.2	1.3	3.9	〃
	4	松本銭	〃	信濃松本	24.8	5.3	1.2	2.6	〃
	5	竹田銭	〃	豊後中川内膳	24.6	5.4	1.1	2.8	〃
	6	井の宮銭	寛永16年	駿河井の宮	24.5	5.5	1.2	2.8	〃
	7	沓谷銭	明暦2年	駿河沓谷	24.6	5.9	1.3	3.1	〃
	8	鳥越銭	〃	江戸鳥越	25.3	5.5	1.3	3.4	〃
	9		寛永～明暦	不明	24.6	3.0	1.2	6.0	〃
新寛永	10	文銭	寛文8年	江戸亀戸	25.1	5.4	1.5	3.6	銅銭、背に「文」の字有
	11	〃	〃	〃	25.4	5.6	1.5	3.8	〃 〃
	12	〃	〃	〃	25.4	5.5	1.4	3.4	〃 〃
	13		延宝元年	〃	25.6	5.5	1.3	4.0	〃 〃
	14		元禄～宝永	江戸及山城	23.7	6.0	1.1	3.0	銅銭、元禄8年より銭貨は小型化
	15		〃	〃	24.3	6.0	1.2	2.8	銅銭
	16		〃	〃	23.7	6.0	1.1	2.3	〃
	17		〃	〃	22.5	6.9	1.1	2.5	〃
	18		〃	〃	21.6	6.4	0.9	1.7	〃
	19		正徳4年	江戸亀戸	25.1	5.7	1.2	2.9	銅銭、寛文期のものに類似
	20	享保佐字銭	享保2年	佐渡相川	25.4	5.5	1.5	3.9	銅銭、背に「佐」の字有
	21	七条銭	享保11年	山城七条	23.9	6.0		2.0	銅銭、「通」の初通1が「ユ」でなく「マ」、「マ頭通」
	22		〃	江戸十万坪	23.0	6.2	1.2	2.3	銅銭、「千田新田」ともよばれる
	23	伏見銭	元文元年	山城伏見見	23.8	6.1	1.3	3.2	銅銭、「通」の初画が「マ頭通」
	24	〃	〃	〃	24.4	6.5	1.1	2.8	〃 〃
	25	小字銭	〃	江戸小梅	23.2	6.7	1.1	2.3	銅銭、小型軽量化、元文4年より鉄銭も加わる、背に「小」
	26	元文亀戸銭	〃	江戸亀戸	23.8	6.7	1.1	2.4	銅銭、「永」の字が大きく目立つ
	27	秋田銭	〃	出羽秋田	24.0	6.2	1.1	2.3	銅銭、「永」字の未画がはね上っている
	28	深川銭	〃	江戸深川平野新田	23.4	6.2	1.1	2.4	銅銭、「寛」字の未画が長くくねる「虎の尾」
	29	藤沢銭	〃	相模藤沢吉田島	23.2	7.1	1.1	2.2	銅銭、文字が極めて小型化
	30	加島銭	〃	摂津加島	23.6	6.0	1.3	3.9	銅銭、銭、「永」の第4画が長く書きおろす
	31	元文佐字銭	〃	佐渡相川	24.8	5.6	1.1	2.2	銅銭、背に「佐」の字有
	32	元字銭	寛保元年	摂津高津新地	22.6	6.4	1.2	1.3	銅銭、背に「元」の字有、寛保元年製造開始
	33	〃	〃	不明	23.3	5.5	1.1	1.8	〃 〃
	34	足字銭	寛保2年	下野足尾	22.3	6.2	0.8	1.7	銅銭、背に「足」の字有
	35	四文銭	明和元年	江戸十万坪	28.4	5.9	1.2	5.9	銅銭、裏面の波数は「十一波」

第3表　寛永銭の種別

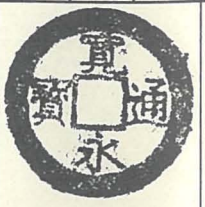
江戸

1623	1644	1648	1652	1655	1658	1661	1673	1681	1684	1688	1704	1711	1716	1736		1741	
寛永	正保	慶安	承応	明暦	万治	寛文	延宝	天和	貞享	元禄	宝永	正徳	享保	元文		寛保	

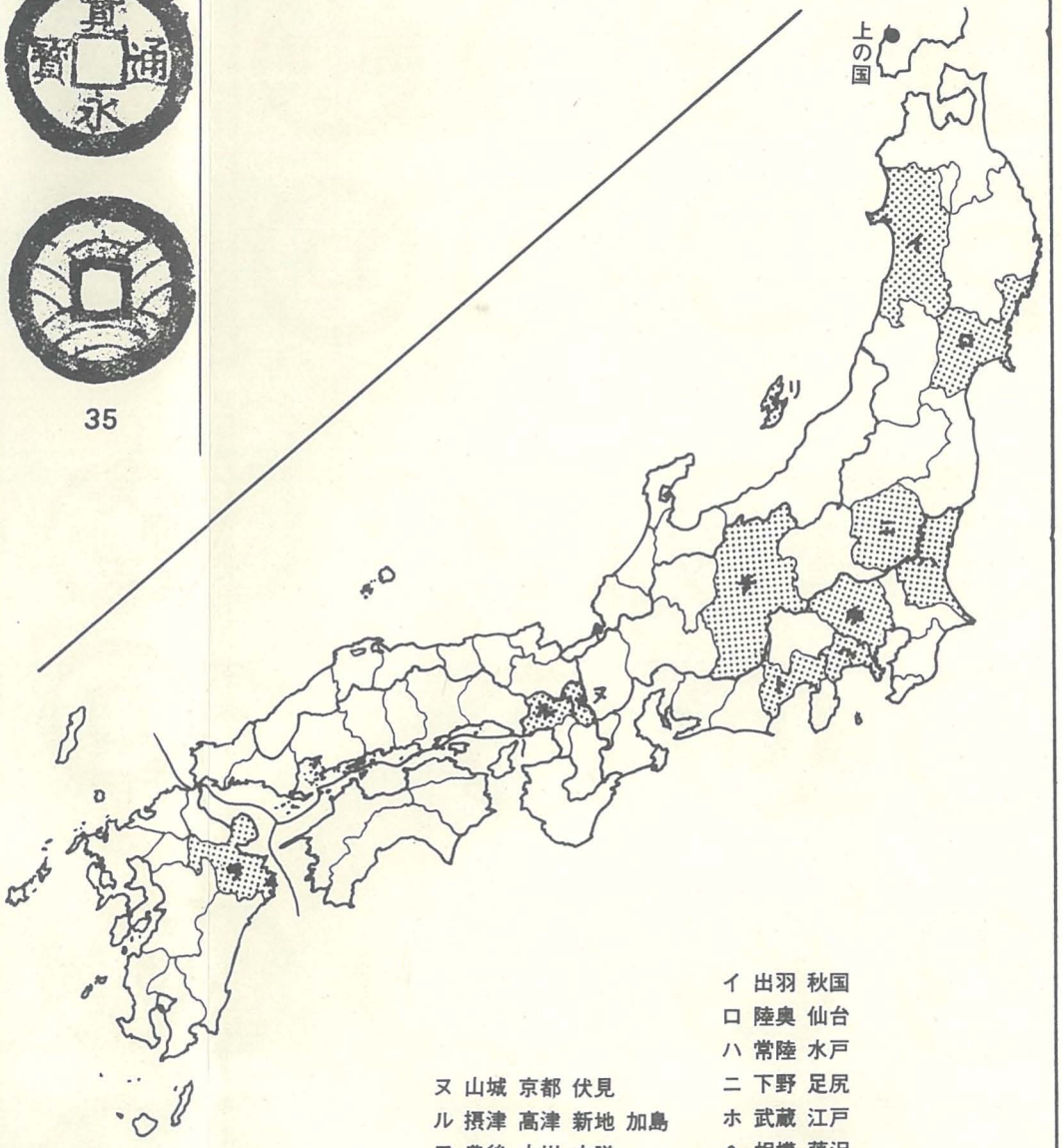


40図

1744	1748	1751	1746	1772
延享	寛延	宝暦	明和	



35



ヌ 山城 京都 伏見
ル 摂津 高津 新地 加島
ヲ 豊後 中川 内膳

イ 出羽 秋国
ロ 陸奥 仙台
ハ 常陸 水戸
ニ 下野 足尻
ホ 武蔵 江戸
ヘ 相模 藤沢
ト 駿河 井の宮 沓谷
チ 信濃 杉本
リ 佐渡 相川

36 鋳造地分布図

Ⅳ　勝山館跡出土の人骨及び動物遺存体

1．人　　骨　　百々幸雄・鈴木隆雄

a．第1号人骨と第7号人骨(PL－32、人骨1)

ⅰ）個体別・性別・年令

第1号人骨は下位胸椎（Th8～Th12)、腰椎(L1～L5)、仙骨、左右寛骨および下位肋骨が解剖学的な位置関係を崩さずに発掘された。第7号人骨は、同一層位ではあるが、第1号人骨より約2m離れて発見されたもので、頭骨（下顎を含む）と第1頸椎からなる。

第7号頭骨は、性別は男性と判定されるが、男性としては全体的に華奢に過ぎる観がある。年齢は主縫合の癒合度や歯の咬耗の程度からみて、壮年期にあることは確実である。一方、第1号人骨は寛骨の大坐骨切痕の形態からみて、明らかに男性であるが、椎骨も含めて男性としてはかなり華奢である。また、年齢は椎体や椎間関節の状態、寛骨の耳状面の形状からみて、明らかに壮年期にある。これらのことから考えて、かなり離れて発見されたにもかかわらず、第1号人骨と第7号人骨は同一個体である可能性がきわめて高い。したがって、以下、両者を同一個体とみなして記載をすすめることにする。

ⅱ）頭骨(第7号人骨)

計測値は第5表に示す通りである。計測法はすべてMARTIN-SALLER (1957)に従った。

上面観：類卵形で、長幅示数は74.9で長頭型に属する。この長頭性はアイヌ的とみなすよりは、むしろ中世の和人的特徴とみなす方が妥当かと思われる。主縫合の複雑さは中等度。右に頭頂孔を認める。

側面観：眉間、眉弓とも発達は弱く、ナジオンの陥入も浅い。これらは非アイヌ的特徴である。頭頂弧長は前頭弧長より長く、この点も非アイヌ的である。側頭筋線の発達は弱く、乳突上稜もむしろ弱い。左に頭頂切痕骨を認める。左右とも外耳道骨瘤は存在しない。乳様突起は大きさ中等。左右とも頬骨横縫合の痕跡はない。強い歯槽性の突顎があり、中世の和人的である。長高示数は、70.1で正型に属する。

後面観：外後頭隆起の発達は弱く、項平面のレリーフも強くはない。ラムダ骨なく、左右ともアステリオン骨、後頭乳突縫合骨もない。横後頭縫合の痕跡もない。幅高示数は93.6で中型に属する。

前面観：前頭縫合なく、眼窩上孔も存在しない。上顔高は63mmで、現代の和人やアイヌよりも低く中世の鎌倉材木座頭骨の平均値に近い。眼窩は比較的高く、眼窩口の輪郭は円形に近い。和人的である。眼窩示数は84.4で高型に近い中型に属する。鼻根部は、鼻骨と右上顎骨前頭突起が破損するため、詳細は不明であるが、左上顎骨前頭突起はほぼ完全に前頭位をとるので、鼻根部の水平弯曲はきわめて弱かったものと推定される。これは中世の和人に特徴的な形態である。梨状口は幅が著しく狭く、鼻示数は39.6で狭型に属する。鼻の形態は、近世アイヌ、現代および中世の和人のいづれとも異なる。犬歯窩はかなり深い。頬骨の外側への張り出しは弱い。

底面観：口蓋は幅広く、口蓋示数は95.3で広型に属する。口蓋隆起や口蓋管の形成はない。卵円孔、棘孔に異常はない。左にベサリウス孔が存在する。左右ともフシュケ孔なく、下顎窩も正常。後頭顆関節面に二分傾向はない。左に舌下神経管の二分が認められる。

下顎：男性としてはかなり小さい。オトガイ結節とオトガイ隆起はともによく発達する。左右とも下顎底に角前切痕が存在し、非アイヌ的である。左右とも顎舌骨筋神経管はない。下顎枝示数は、65.4で、下顎枝はかなり幅広い。

歯：歯式は次のとおりである。

℧ 8 7 6 5 4 3 2 1	1 2 3 4 5 6 7 8 ℧
℧ 8 7 6 5 4 3 2 1	1 2 3 4 5 6 7 8 ℧

℧：未萌出

咬耗はⅠ度程度で、う歯は認められない。咬合様式は鋏状で、この点も非アイヌ的である。

以上のように、頭骨では、眉間から眉弓にかけて平担であること、眼窩が比較的高く輪郭が円形に近いこと、頭頂弧長が前頭弧長より長いこと、下顎に角前切痕が存在すること、咬合様式が鋏状であることなど、アイヌよりも和人を思わせる形質が優勢である。さらに、上顔高が著しく低いこと、頭型が長頭型であること、鼻根部が著しく平坦であること、歯槽性の突顎が著明であることなどは、中世の和人に共通する特徴であり、この頭

骨が中世の和人のものであることを物語っていると思われる。

ⅲ）頸椎(第7号人骨)

全体として小型である。上関節窩に二分傾向なく、関節面に加齢的な変化はない。

ⅳ）第1号人骨

第8胸椎から第5腰椎までが連続した状態で保存されるが、このほか第1または第2胸椎もこれと同一個体と思われる。胸・腰椎とも椎体および椎間関節に加齢的変化は認められない。仙骨にも異常はない。寛骨および仙骨とも耳状面に加齢的な変化は認められない。寛骨の大坐骨切痕は深く鋭く切れ込んでおり、本人骨が明らかに男性であることを示している。肋骨には特記すべきことはない。

b．1および7号人骨以外の散乱人骨について

（PL－31－2、33、人骨2）　（鈴木隆雄）

比較的よくまとまって出土した第1および7号人骨以外にも、数個体分と考えられる人骨が出土している。しかし、それらの人骨は、ほとんどが断片的であり、また出土地点も広く分布しているなどの点から、個体識別は不可能であった。それらの出土した人骨片については第4表にまとめておく。これら散乱人骨中には、興味ある古病理学的所見を呈するものや、明らかに焼かれたと考えられる人骨片等が数点出土しており、ここではそれらの所見を中心に概略を記載しておく。

ⅰ）骨梅毒症と診断された症例

出土人骨のうち、頭蓋片を含む数点の骨片に明らかに骨梅毒症であると考えられる特徴的な骨病変を示すものが認められた。いずれも形態学的特徴から熟年個体に属するものと判定され、恐らく同一個体のものであると推定される。性別は後頭骨や筋粗面などの形態から男性と判定される。梅毒性病変を示すものは頭蓋片、右大腿骨、左脛骨、左腓骨の計4ケ所である。

頭蓋片においては(PL－33)、後頭骨の外後頭隆起の上方に、クレータ状陥凹を呈する骨溶解像とその周辺の骨硬化像が認められ、また左頭頂骨についても著しい骨硬化像を供う“ひきつれ”たような瘢痕を示している。頭蓋内板にはまったく変化を認めない。このような頭蓋の病理学的所見はその形態学的特徴からみて骨梅毒症性のものと診断される。更に先に述べた四肢骨についても、古人骨に通常認められる非特異的化膿性骨膜骨髄炎とは異なる像を呈する所見が認められる(PL－33－d, e)。特に脛骨は、骨幹部のうち近位部は著しく膨隆している。表面は一部粗な面を形成するが、大部分は平滑である。X線所見では肉眼病変に一致した部位に陰影の増強があり骨硬化の所見を呈している。大髄骨では粗線の下方から膝窩面にかけて、小さなクレータ状の陥凹を伴なう骨膨隆が存在しやはり硬化所見を呈している。腓骨についても、病変は極めてわずかで限局性ではあるが、骨膜炎様の樹皮状の形成像が認められている。これら下肢骨に出現した、比較的骨表面平滑な骨硬化を伴なう膨隆（肥厚）の所見は、次に述べる非特異的骨膜骨髄炎像とは異なり、骨梅毒の可能性を強く示唆するものであろう。

ⅱ）非特異的化膿性骨膜骨髄炎と診断された症例(PL－33－f)

出土人骨のうち、〝K－3・26K・24Ⅰ〟とラベルされた左脛骨についても興味ある所見が得られている。この脛骨はその形態からみて、若年個体のものと推定され、先に述べた梅毒性骨病変を示す個体とは明らかに異なる個体のものである。本脛骨には骨幹部ほぼ中央の内・外両側面にかけて明らかな骨膜炎の所見が認められる。特に外側面に存在する部分では、本来の骨皮質からの膨隆が著しく、比較的境界鮮明な樹皮状の骨肥厚が認められ、更にそこには直径1～2㎜の髄腔と交通する小孔が数個形成されている。これは恐らく骨炎の過程での腐骨と、瘻孔の形成によるものであろう。内側面のものは、骨表面著しく不整であり、活動性が高いと考えられる骨膜炎様骨増殖像が存在している。骨折の所見は認めない。このような限局性の骨膜性骨増殖像は化膿性骨膜炎あるいは骨膜骨髄炎の存在を強く疑わせるものである。鑑別すべき疾患としては、骨梅毒症や悪性骨腫瘍が考えられる。特に本個体が若年個体であることから当然造骨性変化をもたらす骨肉腫との鑑別が問題となるが、骨肉腫の好発部位は長管骨のメタフィーゼ部分であり、またその古病理学的像は本例と異なり、放射状骨針形成、炎光像など凄じい程の骨皮質破壊を伴なう造骨像であるとされている点などから鑑別可能である。本例は非特異的化膿性骨膜骨髄炎と考えられるものであるが、しかしその起炎菌がなんであったかを推定することはほぼ不可能である。しかし現代の臨床医学から

みた場合本症の起炎菌としては黄色ブドウ球菌によるものが圧到的に多いとされている。

ⅲ）焼かれた形跡のある大腿骨について

若年個体に属すると考えられる左大腿骨(〝K－3・27K－7・N－260″）には、焼かれた所見が認められた。本大腿骨は近・遠位の両側骨端部が破損消失しているが、骨幹部は比較的よく保存されている。骨幹部はその全長のほぼ⅔にわたり、前後面とも骨表面は黒く変色し、焼成骨に特有の金属的な硬さを有し、焼成による炭化を示していると考えられる。海綿質への変化は明瞭ではない。特記すべき病理学的変化や人為的損傷なども認められない。このような骨幹部の焼成による炭化が、どのような時期になされたものかを正確に判定することは極めて困難であるが、他の散乱人骨からは焼成骨がまったくないことや、本大腿骨における焼け方の程度が部位により大きく異なっていることなどから、恐らく死後かなりの時間を経過してから、この大腿骨1本だけが偶然の要因によって焼かれたと考えることも可能である。

以上、勝山館跡出土の中世人骨に認められた興味ある骨の古病理学的変化や所見について、それらの概略を記載した。特に、骨梅毒症性病変を示す症例については、本人骨の年代学的側面からみて我国の梅毒の起源とも深く関係してくる資料であり貴重であるとともに、本道最古の骨梅毒症の症例である可能性が極めて大きい点など重要であると思われる。尚、我国における梅毒の起源については、これまで富士川、土肥らの医学史的考察から室町時代後期の永正九年（1512年）頃に移入されたものであることが、ほぼ確実視されており、また形質人類学的な立場からも支持しうるものと考えられている。従って今回報告した梅毒症性病変をもつ個体は16世紀初頭以降のものであると推定しうる。一方、古病理学研究上、四肢骨における骨梅毒症性病変と鑑別すべきものの1つとして、よく非特異的化膿性骨膜骨髄炎が取上げられるが、今回の勝山館出土の非特異的炎症像を示すものと診断された若年脛骨の例は、骨梅毒症性病変との鑑別診断上の差異が比較的よく現われており、よく対比しうるものであると考えられる。（尚、今回の骨梅毒の症例に関する詳細な古病理学的研究については、本稿と別に報告する予定である。）

最後になったが、今迄述べた以外の出土骨片について簡潔に記載しておく。

下顎骨（K－3、27K－7、Ⅲb－29、人－2）両側の関節突起の一部を破損するが、保存は良好である。底線はほぼ直線的に走るが、角前切痕は弱いながら存在している。筋粗面の発達は良好。顎舌骨筋神経溝に骨橋なし。下顎枝示数は、65.5(38/58)。全体として熟年男性のものと推定される。歯の咬耗は著しく強く、5本の残存歯（右C、P_1、M_1、M_2、左M_1）の歯冠は歯頸の近くまで咬耗が進行し、かつそれは外下方から内上方にかけて咬耗している。カリエスや歯周疾患の痕跡は認めない。(PL31－3)

肩甲骨（K－3、27K－7、Ⅲ－b)、左右1個ずつであり、同一個体のものと推定される。棘突起や烏口突起等の破損著しい。肋骨面における筋線(肩甲下筋付着線)の発達は良好である。

寛骨（K－3、27K－7、人－22及びK－3、27K－2、N－163、Ⅲb′－13）左右1個ずつであるが、寛骨臼のいわゆる〝Y字軟骨〟の骨化が完成しておらず、幼若個体のものであると判定された。両側とも残存する部分は腸骨体の部分、および坐骨の一部である。

大腿骨は全部で5本である。うち3本は成年以上のものであるが、焼成大腿骨1本を含む2本は粗線の発達や長さ等からみて若年個体のものと考えられる。個体識別は不可能であった。

稿を終えるにあたり、終始御指導、御助力いただいた札幌医科大学第2解剖学教室・三橋公平教授、ならびに教室員の皆様に感謝する。特に梅田光雄技官には写真撮影に多大な御助力をいただき深謝する。　（札幌医科大学第2解剖学教室）

部位		出土個数	年令推定
頭蓋			
	脳頭蓋片	1	熟年
	下顎骨	1	熟年
肩甲骨		右1，左1	?
肋骨		破片約20個	?
脊椎			
	頚椎	3	?
	胸椎	10	?
	腰椎	1	?
	その他	破片約10個	
寛骨		右1，左1	幼若(同一個体)
大腿骨		右2，左3	幼年・成年・熟年(混入)
脛骨		右（—），左2	
腓骨		右（—），左1	?

第4表　K－3出土散乱人骨片一覧

マルチン No.	項　　目		マルチン No.	項　　目	
1	最　大　長	187	48	上　顔　高	63
5	基　底　長	103		48：45	(47.0)
8	最　大　幅	140		48：46	63.6
	8：1	74.9	51	眼　窩　幅	45
9	最小前頭幅	92	52	眼　窩　高	38
	9：8	65.7		52：51	84.4
12	最大後頭幅	110	54	鼻　　幅	21
17	バジオン・プレグマ高	131	55	鼻　　高	53
	17：1	70.1		54：55	39.6
	17：8	93.6	60	上顎歯槽長	49
23	水平周径	525	61	上顎歯槽幅	62
24	横　弧　長	308		61：60	126.5
25	正中矢状弧長	360	62	口　蓋　長	43
26	正中矢状前頭弧長	122	63	口　蓋　幅	41
27	正中矢状頭頂弧長	126		63：62	95.3
	27：26	103.3	65	下顎頭間幅	115
28	正中矢状後頭弧長	112	66	下顎角幅	100
29	正中矢状前頭弦長	109	68	下　顎　長	70
30	正中矢状頭頂弦長	113	69	頤　　高	27
31	正中矢状後頭弦長	94	70	下顎枝高	52
40	顔　　長	99	71	下顎枝幅	34
43	上　顔　幅	104		71：70	65.4
45	頬骨弓幅	(134)	72	全側面角	83°
46	中　顔　幅	99	73	鼻側面角	87°
47	顔　　高	108	74	歯槽側面角	67°
	47：45	(80.6)	77	鼻頬骨角	151°

第5表　勝山館跡出土第7号頭骨計測値

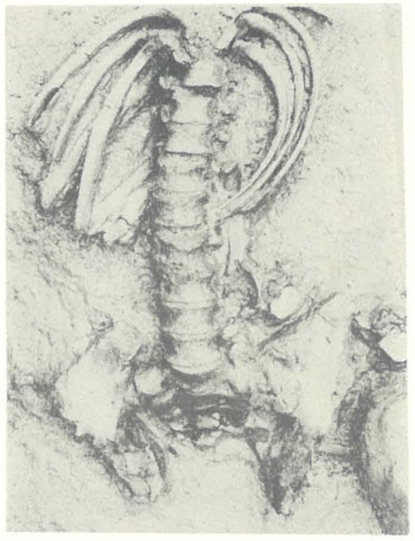
第41図　人骨、獣骨出土状況（平面分布）

1

2

3

4　第7号人骨



5　第1号人骨

PL31　人骨、獣骨出土状況

2．動物遺存体

西本　豊弘

昭和56年以前に出土した動物遺存体についてはすでに昨年度の概報に述べている。ここでは、昭和57年とそれ以前に出土した動物遺存体の数量をすべて示すとともに、新しく判明した種と当遺跡の動物遺存体の特徴のひとつであるウマ、イヌ、ネコの家畜について、その概要を述べることとする。

1．新たに判明した種について

昭和57年度の資料に主に含まれており新たに判明した種は、貝類ではサルアワビ、イシダタミ、アクキガイ科の1種(ヒレガイ類)、アズマニシキガイ、マガキ、エゾバカガイである。魚類はツノザメ類(椎骨39)、ネズミザメ？(椎骨2)、マダイ？(上顎骨1)、ニホンサバ(椎骨1)、フグ類(歯板1)、アイナメ(歯骨1)、ブリ(歯骨1)、ヒラメ（椎骨2）である。鳥獣類はトビ、アビ類、エゾヤチネズミ、ニホンアシカ、ネコである。

2．家畜について

a．ネ　　コ

57年以前はほとんど出土していなかったものであり、57年度分に頭蓋1をはじめほぼ全身の部位が出土している。上腕骨、橈骨、脛骨の出土量とその形状から少なくとも成獣4、若獣1の計5個体分以上が含まれている。ネコの大きさは若干の大小があるが、頭蓋骨、四肢骨の大きさからみて現代の家猫とほぼ同大である。

b．イ　　ヌ

イヌは57年度のⅢ層下部より多量に発掘された。四肢骨、椎骨、肋骨等が一括して発見される場合が多いが、一頭分が完全に出土したものはなく、上肢や下肢のいずれかが欠けている。成獣が多いが幼、若獣もかなり出土している。推計最小個体数は成獣9、若獣3、幼獣2の計14個体である。当遺跡出土のイヌの形質は、四肢骨が非常に太くたくましい感じのすることが特徴である。四肢骨のみをみればオホーツク文化犬に匹敵するが、頭蓋はオホーツク文化犬にみられる吻部の幅広いものはみられない。ただし、現代雑種犬や本州縄文犬よりも吻部の幅が若干広いようである。また、頬骨弓が左右に強く張り出し、頬骨弓幅の最も大きい部分が比較的後方に位置する。後頭部の膨隆は弱い。成獣頭蓋の最大頭蓋長と基底頭蓋長を表に示したが、最大頭蓋長から体高を推計すると、雄と思われるものは47cm～50cm、雌と思われるものは45cm～46cmとなった。なお、雌雄の推定は、矢状稜が発達し左右の眼窩側頭稜がブレグマ附近で合体するものを雄とし、矢状稜が弱く左右の眼窩側頭稜が合体せずに後頭部まで達するものを雌と推定した。当遺跡のイヌの大きさをみると、頭蓋骨、四肢骨及び推定体高のいずれも本州縄文犬よりもはるかに大きい。四肢骨の形状と大きさではオホーツク文化犬に類似するものもあるが、頭蓋の形態は異っている。現代アイヌ犬の標準は雄では体高48.5cm～51.5cm、雌では45.3cm～48.5cmとされており、当遺跡のイヌではこれよりも若干小さいと言える。しかし、現代アイヌ犬の基準は品評会用のもので、大きな犬を好む傾向を反映したものである。アイヌ犬という品種がいつ頃確立したものか定かではないが、頭蓋や四肢骨の形質は現代アイヌ犬と矛盾するものではなく、江戸時代の「アイヌ犬」が当遺跡出土のイヌの大きさ程度であったかもしれない。形質と大きさからみて、当遺跡のイヌは「アイヌ犬」の系統上に位置するもののひとつであろうと推測される。

c．ウ　　マ

ウマは、56年度及びその以前に幼獣下顎骨や四肢骨、遊離歯が出土していたが、57年度には成獣頭蓋1や橈骨、尺骨等が出土した。頭蓋は老獣に近い成獣であり、部分的に火を受けた跡を止めている。ウマの形質については断片的な資料のため詳しくは分らないが、頭蓋の上臼歯列長167.8mm、中足骨長276mmは木曽馬の範囲に入る。また、臼歯は小さく、下顎・歯の幅が狭いことが特徴であり、寿都津軽陣屋出土の江戸時代末期のウマの特徴と同じである。これらの形質的特徴からみて、当遺跡出土のウマは、北海道和種に近い形質の小型馬で、本州より持ち込まれたものと思われる。

以上、家畜の形質についてみてきたが、ネコとウマは現在のところ北海道で最も古い出土例となる。ネコは愛玩用として、またウマは武士の乗馬用として本州より持ち込まれたのであろう。イヌは、本州で飼われていたものか在地のものか定かではないが、その出土状態からみて埋葬されたものではなく解体されて捨てられたと思われる。恐らく皮か肉か利用されたのであろうか。東京都葛西城の例のように、タカ用の餌とされていたかは定かではない。（札幌医科大学第2解剖学教室）

第6表　貝類出土量

種名＼地区		27 K 区	27K区以外
1	クロアワビ	45	20
2	カサガイ類	4	0
3	サルアワビ	1	0
4	クボガイ類	90	27
5	イシダタミ	1	0
6	ツメタガイ？	0	1
7	エゾチヂミボラ	3	2
8	イボニシ	4	1
9	ヒメエゾボラ	37	27
10	ヒレガイ？	2	2
11	エゾタマキガイ	19	6
12	アカガイ	7	1
13	ベンケイガイ	13	1
14	イガイ類	15	6
15	ホタテガイ	5	0
16	アズマニシキガイ	1	0
17	マガキ	2	0
18	コタマガイ	3	1
19	エゾバカガイ	1	0
20	ハマグリ	0	2
21	ビノスガイ	4	6
22	ウバガイ	3	2
23	ベニサラガイ	7	4
計		267	109

第8表　鳥類出土量

27 K 区		27K区以外の区	
カラス類	上腕骨L1	カラス類	上腕骨L1
アホウドリ	上嘴骨1	アホウドリ	中手骨1
〃	上腕骨L1	カモメ類	上腕骨L2
〃	橈骨R1	〃	尺骨L1
〃	尺骨R1	アビ類	尺骨1
〃	脛骨R1、L1	カモ類	橈骨L1
トビ？	頭蓋1	〃	尺骨R1
ワシ類	上嘴骨1	ワシ類	上腕骨L1
〃	上腕骨L1	〃（大型）	橈骨R1
〃	尺骨L1	〃（〃）	尺骨R1
ヒメウ	尺骨L1	〃（〃）	中手骨R1
〃	大腿骨R1	種不明鳥骨3	
ウミウ	上腕骨R1		
〃	橈骨R1		
〃	尺骨R1		
ツル類	中足骨1		
〃	（加工品）		
種不明鳥骨9			

第7表　柱状ブロックサンプル出土の魚類椎骨数
（耳骨を含む）

No	ニシン	ニシン耳骨	サケ	ホッケ	カレイ	ウグイ	マダラ	カサゴ(ソイ)	ニホンサバ	種不明	分析量(ℓ)	分析量(kg)
A1	145	39	10		1						6.3	6.0
2	201	31	15	1	1	12	1	1		1	5.7	5.35
3	108	26	5		4		2		1		3.0	2.9
4	2	2								2	2.3	2.25
5	37	9			2					2	1.2	1.05
6	28	1		1	1					1	1.9	1.9
7	51	5	2		2					3	2.1	2.25
8	45	7		5	1		1	1		2	2.0	2.2
9	107	14	2	3	1					1	3.2	3.15
10	1										3.6	3.7
11	2		1								2.9	3.6
12	4	3								1	1.8	2.45
B1	18	3	2	1							2.0	2.0
2	61	30	1								2.5	2.35
3											2.5	2.1
4	61	9	3		4						2.5	2.55
5	9	2	1							1	1.9	1.9
6	102	14			4	3				1	2.8	2.65
7	51	16		1						2	2.3	2.5
8	49	3	1		1					6	3.5	3.95
9	2	1	1							1	1.6	2.65
10											4.55	4.1
C1			1					1		1	4.5	4.5
2	20	5			2	1				2	3.2	3.3
3	51	3	3	1						2	2.2	2.0
4	222	14	7	6	2					1	6.7	6.4
5	3	2									0.9	0.95
6	16	2	1	1							2.2	2.05
7	22	2	4								2.4	2.2
8	31	4	1								1.6	1.85
9	43	1	1	1	1					1	1.3	1.45
10	22	2									3.1	3.25
11	2									2	1.6	1.6
12	85	1								10	1.2	1.2
13	43	9	1	3							4.0	4.2
14	13	1	1	1	1						1.5	1.6
15											2.0	2.0
16	70	11	4	4		1				19	1.2	1.3
17	282	47		14	3		3			7	4.9	5.0
18	3	2	1	1						1	0.6	0.75
19	52	10	2	1		1		1		2	3.5	3.25
20	1										3.0	3.2
21	32	9	1				2			2	2.3	2.55
22	147	27		1	3						4.7	5.0
23	71	8									2.4	2.6
24	25	3	1		2					1	2.6	3.1
計	2,340	378	73	46	36	18	9	4	1	75		

第9表　27K区出土の哺乳類出土量

部位＼種名	ネコ	イヌ	ウマ	キタキツネ	エゾタヌキ	エゾシカ	その他
頭蓋	1	7、若1 幼1	1	2	1		ドブネズミ1 エゾヤチネズミ1
上顎骨 r ℓ	2 3	1 幼1 3				幼1	
下顎骨 r ℓ	1 2	6 若1 8 若1	幼1 幼2 fr1	2 3	1	4 1 若2	ドブネズミ1 ドブネズミ1
遊離歯		犬歯2 下M₁RL 各1	上臼歯1 下臼歯2 上未出歯2			RI、1 R下M₃3	アシカ♂上C2 アシカ♂下CR1L2 オットセイ♂下CR1 ヒグマ下CR1、下M₂R1
第1頚椎		5		2	1		
第2頚椎	1	4		2		2	
肩甲骨 r ℓ	2 1	5 若3幼1 5	1 1	若1		7 4 若2	ヒグマ1
上腕骨 r ℓ	3 若1 1	3 下1若2 5 若1		1		1 上1下5 上1下8	アシカ類1、オットセイ♂1 オットセイ若1
橈骨 r ℓ	4 4	2 若1 3	2	2 1 若1		上4下4若下2 上5下1	エゾヤチネズミ1 ニホンカワウソ1
尺骨 r ℓ	3 2	6 若1 2 若1	1 幼1	1		1 2	オットセイ♀またはアシカ♀1
寛骨 r ℓ	1 1	9 若1 6 若1		3 1		1 1	
大腿骨 r ℓ	2 2	8 若2幼2 9 若3幼1		1 1		上2若上1下1 上若1下1	ドブネズミ2 ドブネズミ1
脛骨 r ℓ	3 3 上1下1	8 上1幼2 5 若1	若1	1 1	若1	上若1下3 上4下9	
腓骨 r ℓ	1 2	3 3		1 1			
踵骨 r ℓ	2 1	7 4	fr1			10 10	
距骨 r ℓ	1	2 3				8 5	
中手骨 中足骨	7	39	3	10	8	16	
指骨	1	8	基節骨2	1		24	エゾオオカミ第3中手骨1 ヒグマ基節骨1、トド指骨2
椎骨	13	108		37		8	
肋骨		118		43		24	
その他		鼻骨片1	下顎連合部1			角片7	陸獣骨片456、陸獣肋骨23、海獣骨片22、指骨1、クジラ6
計	73	434	24	119	12	199	534

註、r：右、ℓ：左、上：近位部、下：遠位部、若：若獣、幼：幼獣、C：犬歯、I：切歯、M：臼歯、fr：破片

第10表　27K区以外の区から出土の哺乳類出土量

部位＼種名	ネコ	イヌ	ウマ	キタキツネ	エゾタヌキ	エゾシカ	その他
頭蓋		1					
上顎骨 r/ℓ			1				
下顎骨 r/ℓ		1、若1			1 2	1 幼1	テン1 エゾノウサギ1
遊離歯		下CR1	上臼歯14 下臼歯13				アシカ♂下CL1、オットセイ♂C1、ヒグマ上C1
第1頚椎			1				
第2頚椎							
肩甲骨 r/ℓ		1 1					
上腕骨 r/ℓ		若1				1	
橈骨 r/ℓ						上1、下1 下2	
尺骨 r/ℓ						1	
寛骨 r/ℓ		1					
大腿骨 r/ℓ			1				ドブネズミ1
脛骨 r/ℓ	1、若1	下1				下1、若下1	ドブネズミ1 ニオンカワウソ1
腓骨 r/ℓ							
踵骨 r/ℓ			1	1		4	
距骨 r/ℓ							
中手骨 中足骨			2		4	3	
指骨			基節骨若1 末節骨1			6	
椎骨							
肋骨						5	
その他						角片10	陸獣骨片115、肋骨1 海獣骨片9、鼓骨片1、椎骨2、クジラ片1、フン石1
計	2	9	35	1	7	38	138

第11表　ネコ四肢骨及び頭蓋計測値　(mm)

部位＼項目		最大長	上関節幅	中間幅	下関節幅
上腕骨	L	96.5	18.9	7.7	18.1
〃	R	115.2	21.5	7.7	19.2
尺骨	R	112.4	11.0	4.9	—
〃	L	114.4	11.5	5.2	—
〃	L	106.4	10.4	4.2	—
〃	R	113.4	11.6	5.0	—
橈骨	L	93.8	8.2	6.7	10.7
〃	R	95.5	8.7	6.9	12.3
〃	L	90.9	8.3	6.2	11.0
〃	L	97.6	9.1	6.7	12.4
〃	L	86.9	8.0	6.2	11.7
〃	R	97.7	9.0	6.5	12.4
大腿骨	L	115.0	21.4	8.9	19.3
〃	L	116.4	19.1	8.4	17.2
脛骨	L	115.2	20.9	7.9	14.7
〃	R	113.3	20.3	7.5	14.8
〃	L	—	—	8.0	14.4
〃	L	117.2	18.6	7.4	13.0
〃	R	117.2	18.6	7.9	13.3
頭蓋		最大頭蓋長(Ⅰ～Pro)　96.0			
		基底頭蓋長(Ⅰ～B)　81.0			

第12表　イヌの頭蓋の計測値と推定体高　(mm)

No	出土地区	層位	推定性別	最大頭蓋長(Ⅰ-Pro)	基底頭蓋長(Ⅰ－B)	推定体高(Ⅰ-Proによる)
1	26K	Ⅰ	♂	190.0	160.7	500
2	27K 4	〃	♀	166.9	153.7	460
3	27K 7	Ⅲb～26	♂	183.2	165.1	480
4	〃	〃	♀	166.7	151.7	450
5	〃	Ⅲb～31	♀	166.7	149.9	450
6	〃	〃	♂	175.5	156.0	470
7	〃	〃	♀	165.8	149.0	450
8	〃	〃	♂	181.2	162.0	480

註1．性別は矢状稜の発達の程度と側頭稜の形状から推定した。
2．I：Inion Pro：Prosthion B：Basion
3．推定体高は、山内忠平1958「犬における骨長より体高の推定法」鹿児島大、農・学術報告7の第Ⅲ式を用いて最大頭蓋長より推定。

V. まとめ

館神八幡宮跡の調査結果、1473年武田信広創建当時の遺構は検出出来ず、1770年に建立の現上ノ国八幡宮本殿（上ノ国町指定文化財）のものと思われる礎石が検出された。この東側にはほぼ同時期の階段状遺構が検出された。又礎石南・西側を巡る土堤はこの時期に築成されたことも判明した。寛永通宝や陶磁器等多くの近世遺物の出土は、館神八幡宮に対する、代参、一代一参等の松前氏の崇敬心や、上ノ国地内の信仰、祭祀が連綿と継続していたことを示す証左であろう。

階段状遺構の下位、礎石の一部等に重複して中世の遺構があり遺物も出土した。上述の近世遺構の南及び北にも、柱穴列、竪穴状遺構等がみられた。これらについては、近世遺構下位の調査が不可能なこと[1] 1770年の八幡宮建立時に一部削平された可能性があること等、障害もあるが次年度の調査により、初期勝山館跡形成期とも言うべき、館神八幡宮創建頃の該地区の実態に迫りたく思う。

階段状遺構南斜面下の調査結果、空壕Aが現自然研究路の西、54・55年検出の寺ノ沢側と連続し館神八幡宮跡を囲繞し、華ノ沢側に切り落されることが判明した。空壕Bも同様に連続する。尚BとAの間に別な溝が存在していたが、これについては良く解らない。又、Aの壁に平担面のつくられていることも留意しなければならない。

今後は館内から空壕Aにいたる（わたる）道の位置を追求する必要がある。

樋状木製品の検出された寺ノ沢地内では、関連する杭列、池？等が明らかとなったが周辺部を含め更に検討を行う必要がある。

27K 2・7区を中心とする空壕C及び一部その外壁を形成する旧沢地内の遺物廃棄層（魚貝層）の年代等については曲折を経たが、1741年の大島火山灰の下位にあり、中世の形成として大過ないようである。本層は空壕B・Aの覆土中には殆んど含まれていず、又空壕A・B・Cの新旧については概報Ⅱ、Ⅲに明らかな如く順に古いことから、空壕Cの廃絶後、A、Bの壕の形成・使用時と推測出来、更に本層の下位には壕Aの基盤と同質の掘り上げ土が堆積していることから壕Aの時期と限定出来よう。一方本層中の遺物の年代は、陶磁器の項で記した如く16世紀中葉が主体となっておりこれを空壕Aの機能していた勝山館の最盛期とみることができよう。

廃棄層中の遺物は分析の途上にあるが、一、二特徴的なものを例示し、本館の問題点を指適したい。

各種遺物のうち和人的特徴を有するものとアイヌ的特徴を有する二者について略述する。前者の主なものは、陶磁器、金属製品、鉄滓及び人骨、ウマ、ネコ等の骨であり、後者は骨角器、ガラス玉、人骨？、イヌ、海獣骨（アシカ類）である。

和人的な物は、大半が本州からの移入品であり消費を目的としたものと、更に他所に運ばれる等供給の用にされたものである。

このうち法具の出土は、勝山館への宗教の到来を具体的に示すものとして重要である[2]。又、茶釜、茶入、天目茶碗、楽茶碗等の出土は、図示はしていないが茶臼の出土と共に、16世紀の本州各地の武士階級に共通する文化内容を伝えるものである。楽茶碗[3]の移入について付言すると1590年蛎崎慶広が聚楽第で初めて秀吉に拝謁し、1593年朱印状を受ける記事がある。しかし勝山館に将来の経緯迄は辿れない[4]。ウマは大阪夏の陣に参戦した慶広の二男忠広が佐竹氏より贈られた馬に騎乗している記事等[5]、蛎崎氏のウマの導入を示す具体例である。これは道産馬の起源に関する定説[6]に一石を投ずるものでもあり、後年上ノ国が馬の産地として名を知られることとの関係上興味深いものがある[7]。

鉄製品、中でも鉄滓の大量出土は鍛冶遺構の存在を示すものであり、コシャマインの戦い発端の挿話を挙げる迄もなく、後述の骨角器類の加工痕からも消費と供給の両者に跨がる重要な資料である。

アイヌ的なものの典型は大量の骨角器類である。特にその中柄については擦文・チャシ更に近世アイヌ資料、アイヌ民具資料に系列を繋ぎ得た。アシカ類の骨の出土については、その捕獲に相当な困難が伴ったこと[8]、徳川家康への献上の記録等が傍証となろう[9]。天然記念物の北海道犬には上ノ国系統犬が知られている。

人骨については別に述べられている。

このような和人的なものとアイヌ的なものが一

つの館内の同一包含層を中心としたほぼ同一時期の遺物として出土することをこの勝山館跡の一大特徴とすることが出来る。

本州からの大量の物資の流入は当然それと引き換えとなるものを必要とする。筆者は、蛎崎氏、初期松前氏の最大関心事は対蝦夷交易の独占にあったことを先に指摘したが、[10]出土遺物から見る本館は、奥狄[11]その他各地の蝦夷物資や本州系物資の集散地であると同時に、生産手段の一部を供給しつつ、館の構成の中に対本州向け物資の一部の生産を担い得る人員を組み入れていた館との想定ができるのではあるまいか。[12]夷狄商舶往還の法度がなり、最初の和夷安定期[13]に勝山館跡の最盛期が一致することは示唆的である。

本概報では、勝山館跡の最盛期と推される16世紀中葉の状況について推測を加えつつ略述した。

しかし乍ら、勝山館跡の初源と終末については充分な資料が得られていない。又館内部の構造についても殆んど解明されていない。

特に空壕Cが形成され、館神八幡宮の創建された15世紀後半についての資料が乏しい。これについて、館東側、侍屋敷跡と伝える〝桧ノ沢〟(華ノ沢)内にかつて貝塚が認められたとの記述[14]は留意しなければならないことである。

今後共館内各所への調査を継続し、勝山館跡の全貌解明を図りたく思う。諸先学のご教示をお願い申し上げるものである。　(松崎水穂)

《註》

(1) 近世の遺構は保存することが原則とされた。

(2) 勝山館跡北端に1443年に開基を求める上国寺があり、他に法華堂跡等の伝承もある。

(3) 井上喜久男氏のご教示による。

(4) 1610年花山院忠長が流罪となり花沢館に居た記事について、森広樹氏から示唆を受けた。

(5) 新羅之記録、福山秘府

(6) 北海道大百科事典、北海道新聞社、1981年

(7) 上ノ国村史、1956年

(8) 奥尻町史、1969年、調査員前田正憲の教示による。

(9) 新羅之記録

(10) 拙稿、北海道勝山館跡の調査、日本考古学年報34、1983

(11) 新羅之記録『唐渡之嶋』よりの『道服』の記述がある。

(12) 1591年九戸城攻めの折、蛎崎慶広が蝦夷人を連れて参戦していること(参河後風土記)や、道南の館の興亡に蛎崎氏の謀略説があること等留意される。

(13) これ以後勝山館への攻撃の記録はない。

(14) 桧山南部の遺跡、1956年

(30頁註より続き)

(16) 世界陶磁全集14、1976

(17) 昆野靖他、大瀬川遺跡1981

(18) 田村俊之他1981、'82

(19) 21図3で碗、皿Ⅰを一部15世紀に含めたのは見込み、高台共露胎の類例について大窯Ⅰ期中に見い出せなかったためである。

(20) 井上喜久男1982

(21) 工藤竹久他1982

(22) 今井二三夫他1978

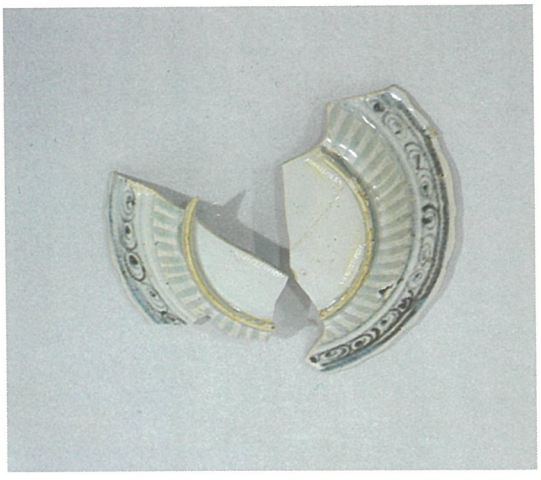
(23) 青磁皿の分類については充分になし得ず本表からは除外した。各遺跡の年代については各報告書等記載のものをそのまま使用した。勝山館、蛎崎氏等に関するものは新羅之記録によった。尚洲崎館の年代について概報Ⅰで1458年と誤って記したので訂正したい。尚国内の中国陶磁を出土する15世紀の遺跡には染付の出土が稀であり本遺跡における青磁碗の出土状況から一部を15世紀代に遡らせて他と区分し、21図3を作成しているが、件の廃棄物層は厚い所では4mに達しているにもかかわらずまだ出土層位の検討を行っておらず、又、(註24)に述べるところでもあり更に検討したい。

(24) 筆者は陶磁器を出土する遺跡の年代については伝世されることの多い舶載品より、国産品による方が良いのではないかとの考えを述べたことがある(註1)。この意味で、本表は不完全な試案であり後日国産陶器類を再検討し欠を補う所存である。尚、小稿で割愛した擂鉢の中に洲崎館からは出土している珠洲系のものが見られず、このことからも本資料の初現時期は珠洲Ⅴ～Ⅵ期以降と考えている。青磁等の伝世については新羅之記録にある。

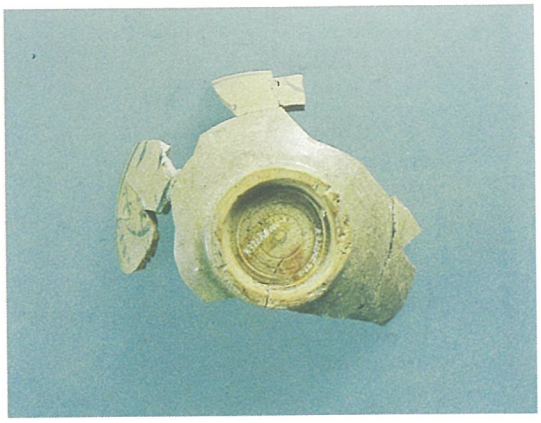
(25) 茶器や青磁の名品は蛎崎・松前氏と諸大名との親交の証として受贈が行われている。又、何かの慶事等に際し茶を一同で喫する事も行われたらしい。(新羅之記録)

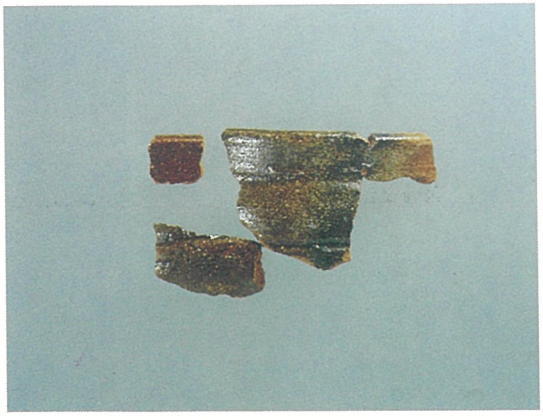
(26) 北海道教育委員会1975

図　　版



PL 1　舶載磁器





PL 2　国産陶器と舶載磁器

空壕A南北セクション

空壕A・B全景 1（北方より）

空壕A・B全景 2（南方より）

PL 4

PL 3　発掘区全景

館神八幡宮跡全景

礎石建物跡全景 1（西方より）

石積の階段全景

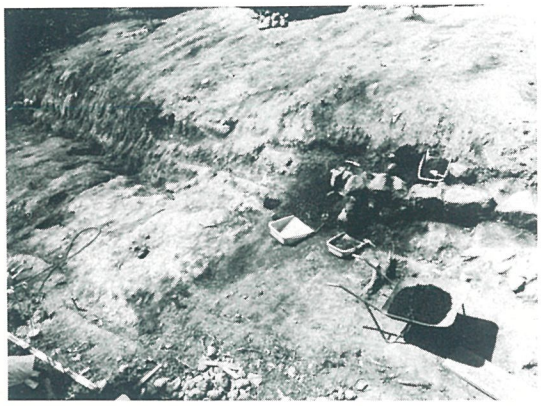
礎石建物跡全景 2（南方より）

土留セクション

掘立柱建物跡全景 1

2（東方より）

石列

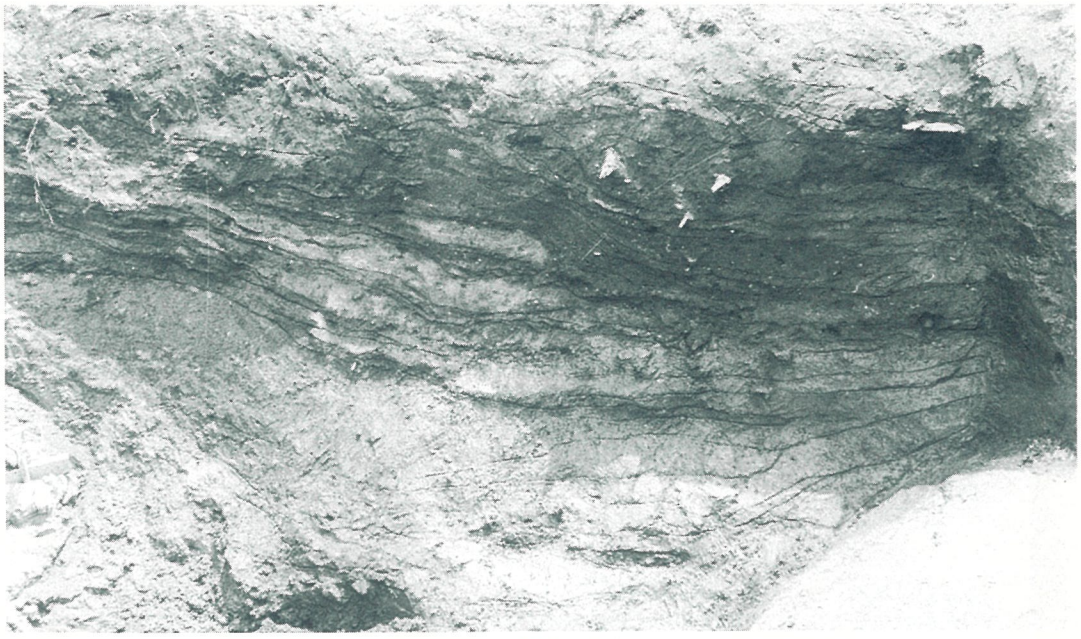


柵列全景（北方より）

石製品出土状況 1（盤）

柵列部のセクション

石製品出土状況 2（臼）



27K 2 、 7 区東壁セクション

Ⅲb層下部遺物出土状況(獣骨魚貝類、木製品)

Ⅲb層下部獣骨出土状況

Ⅲb層下部獣骨出土状況

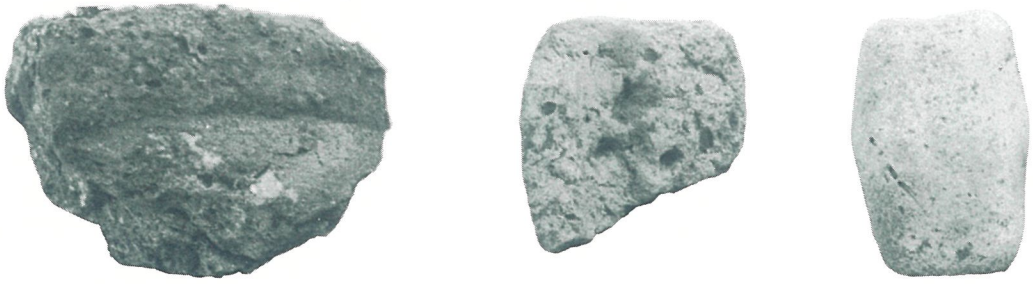
Ⅲb層下部木製品出土状況

PL 8　舶載磁器と国産陶磁器（八幡宮跡）

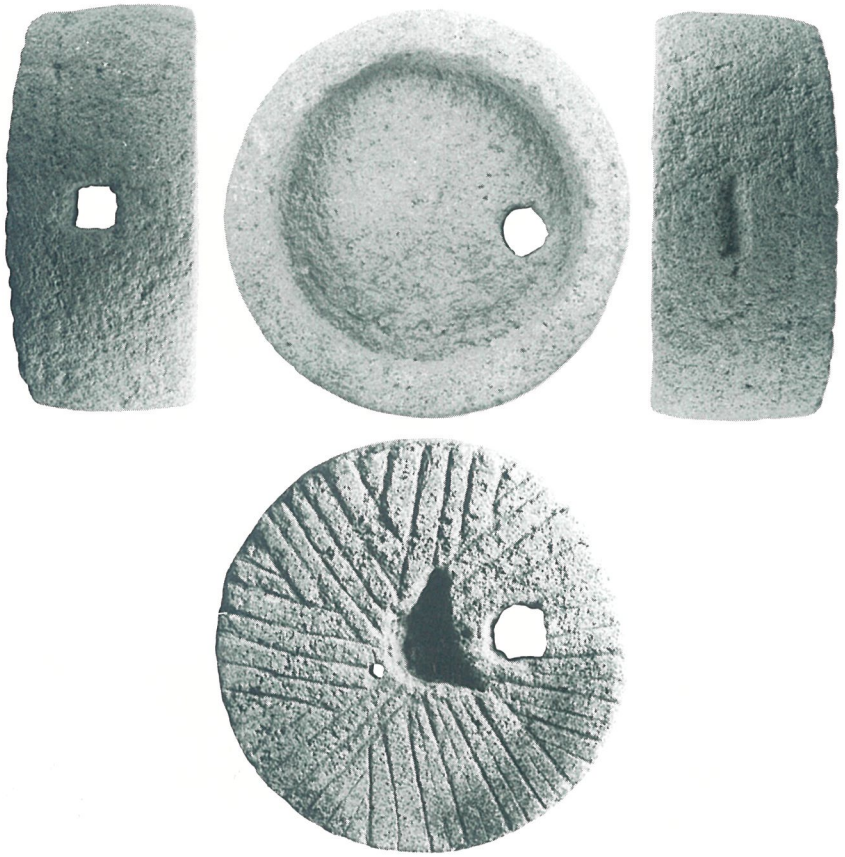
PL 9　国産陶器（八幡宮跡）

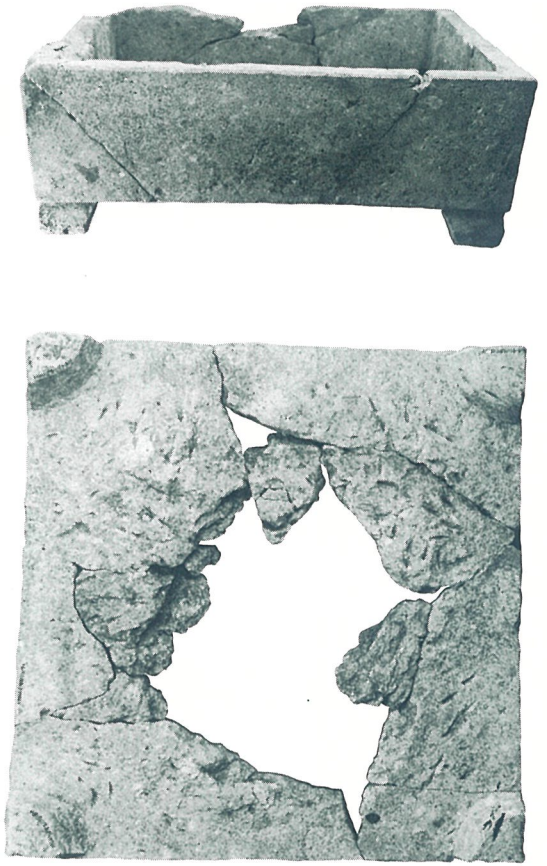
PL10　国産陶磁器（八幡宮跡）

PL11　鉄製品（八幡宮跡）

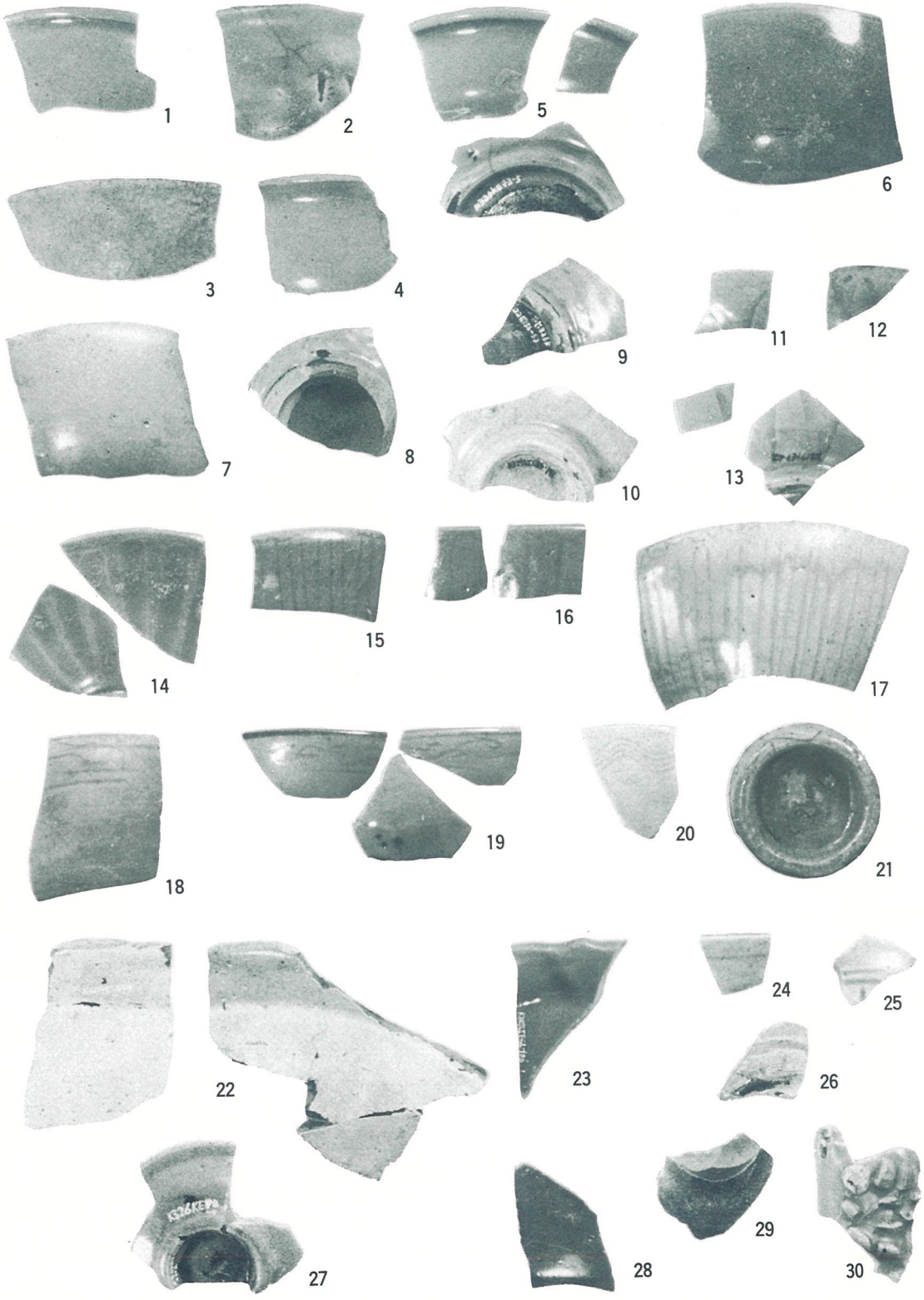


PL12　銅製品と陶器類（八幡宮跡）

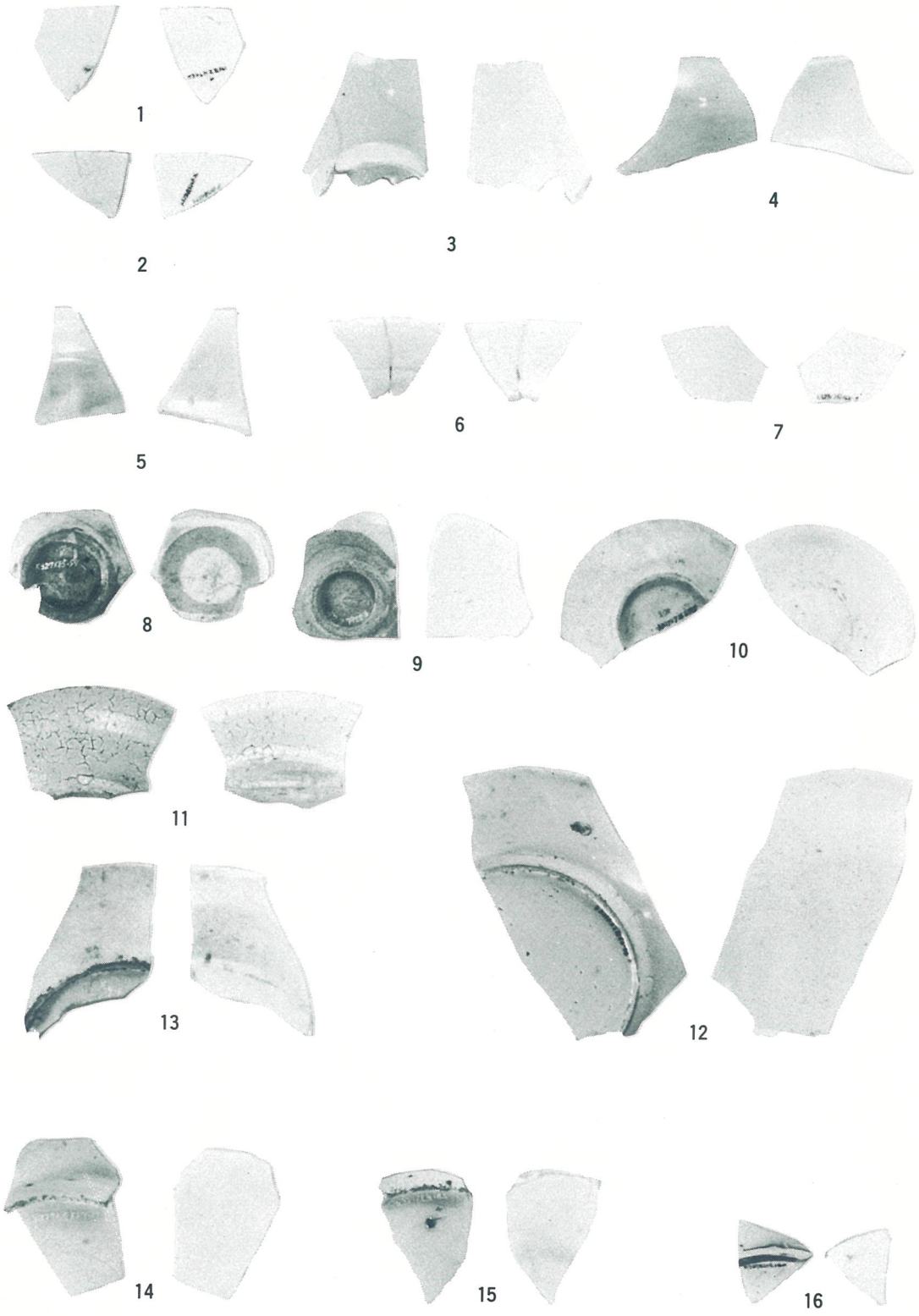




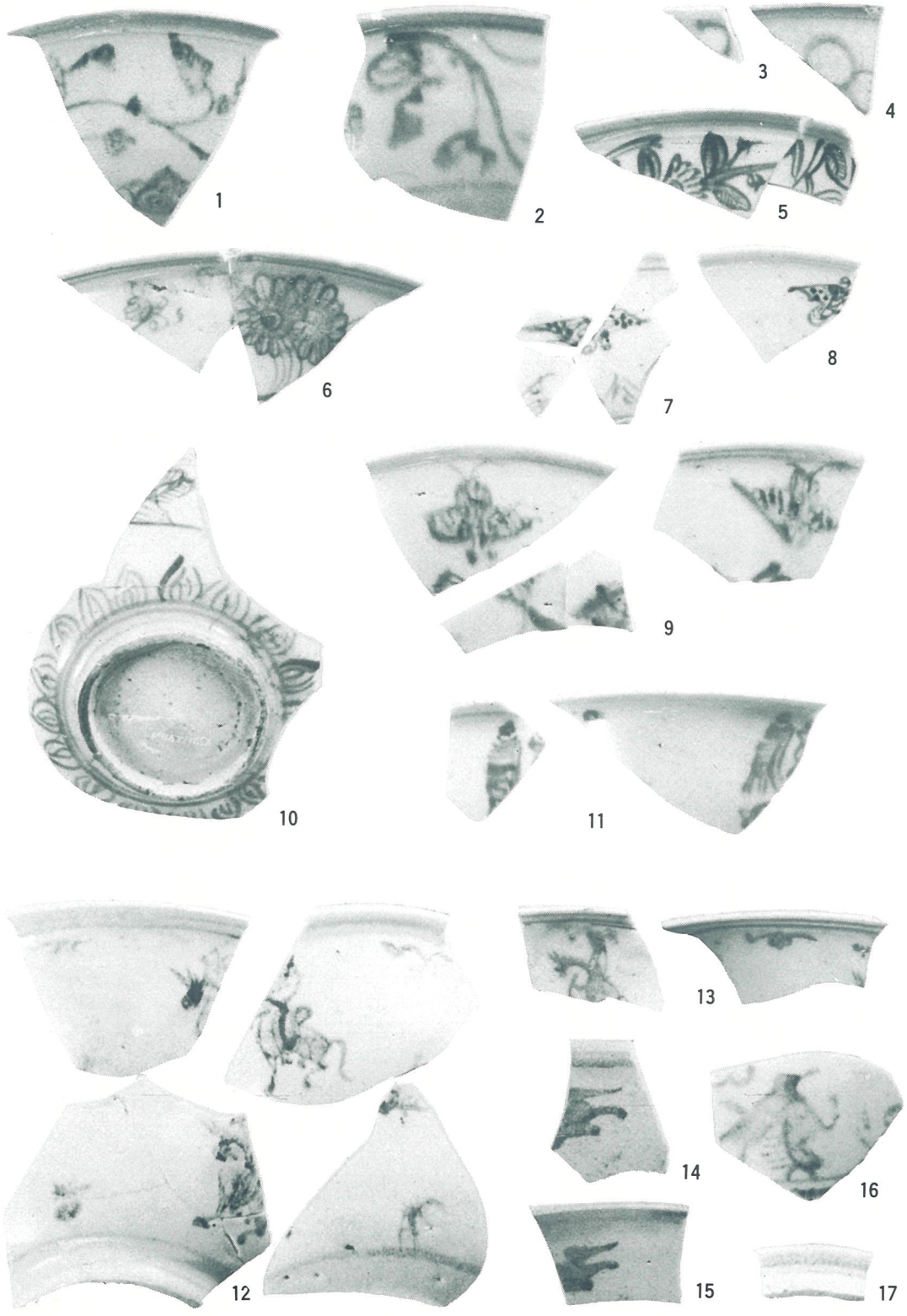
PL13　石製品（八幡宮跡）


1
2
5
6
3
4
9
11
12
7
8
10
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30

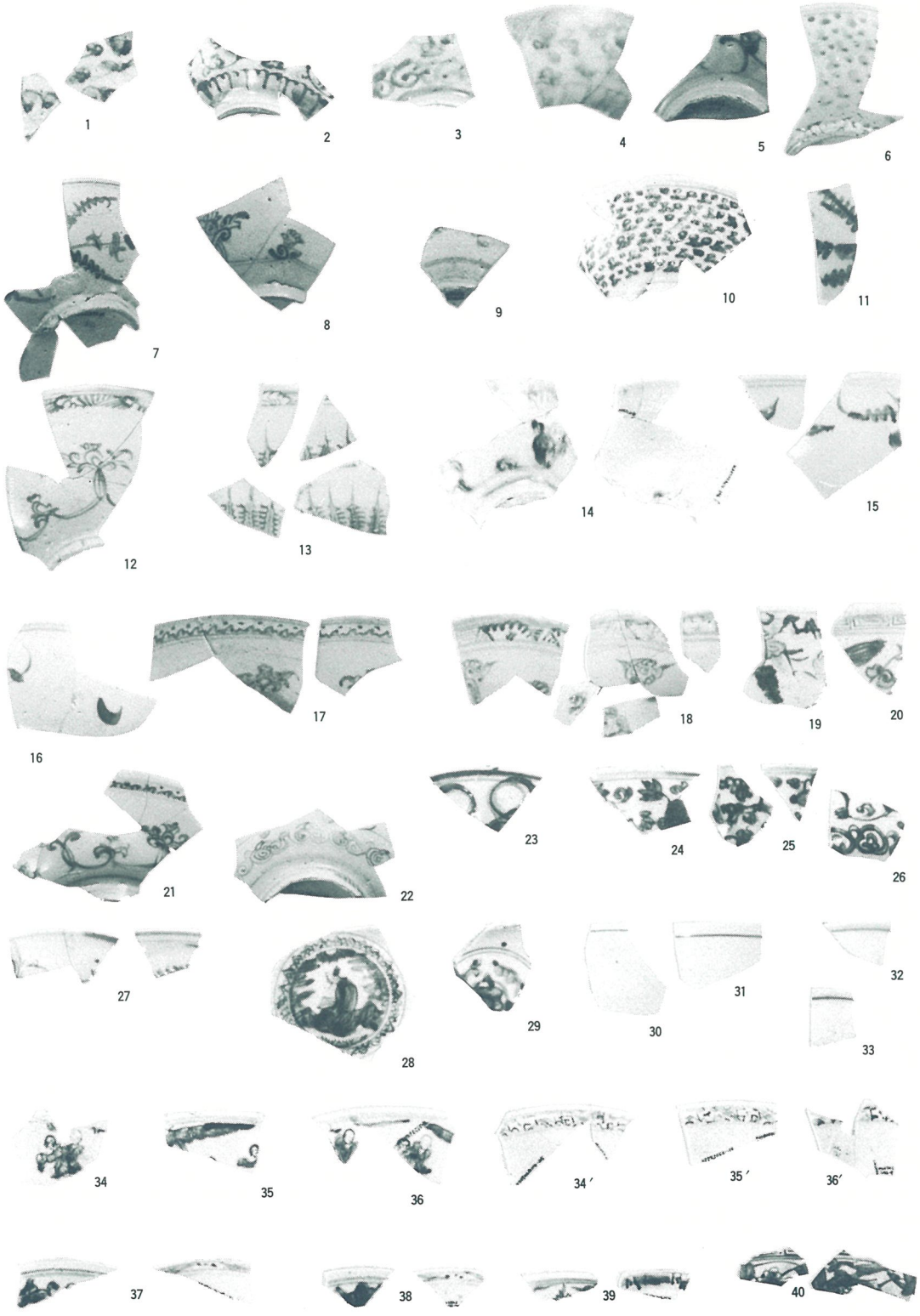
PL14　舶載磁器(青磁)



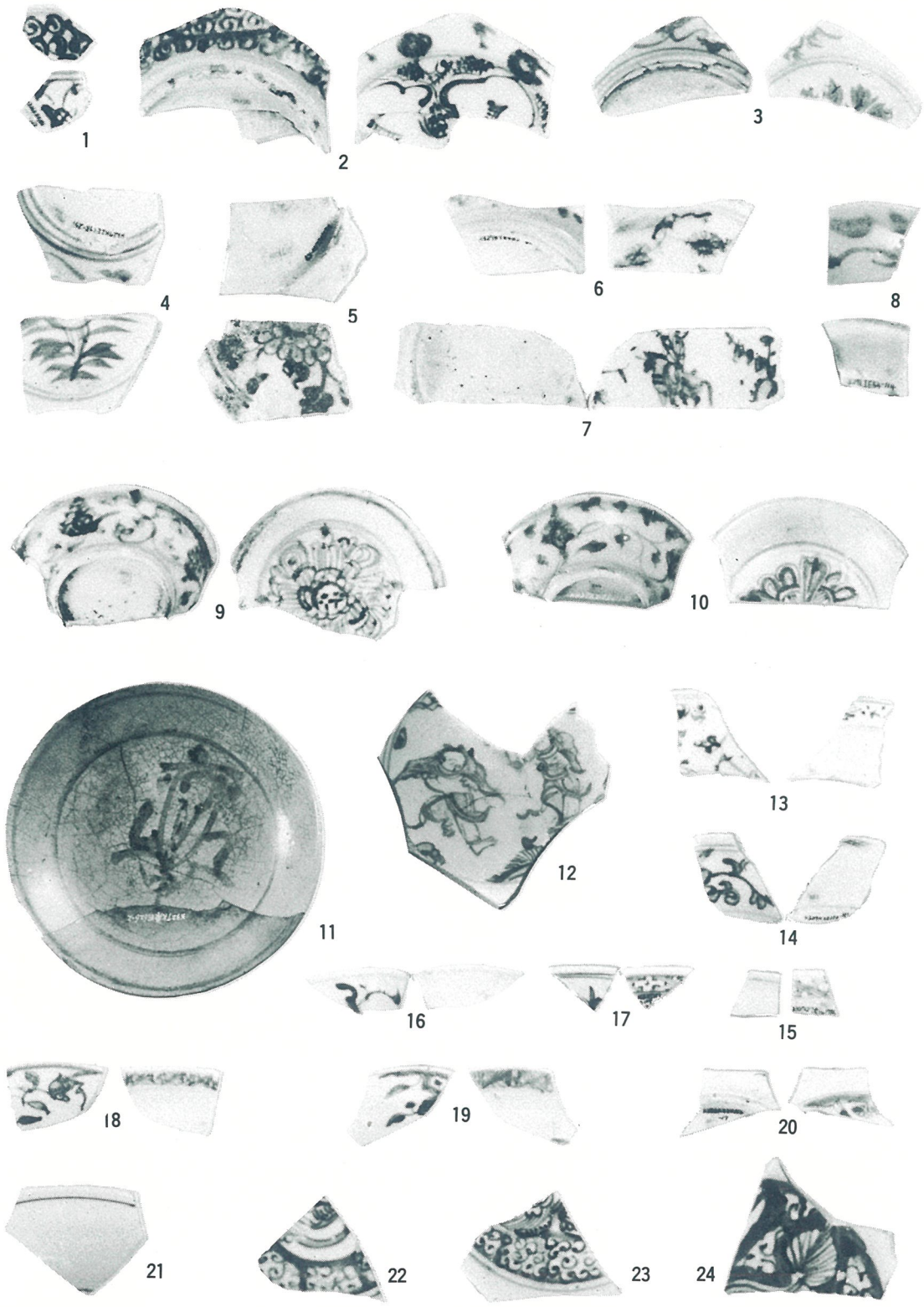
PL15　舶載磁器(白磁)



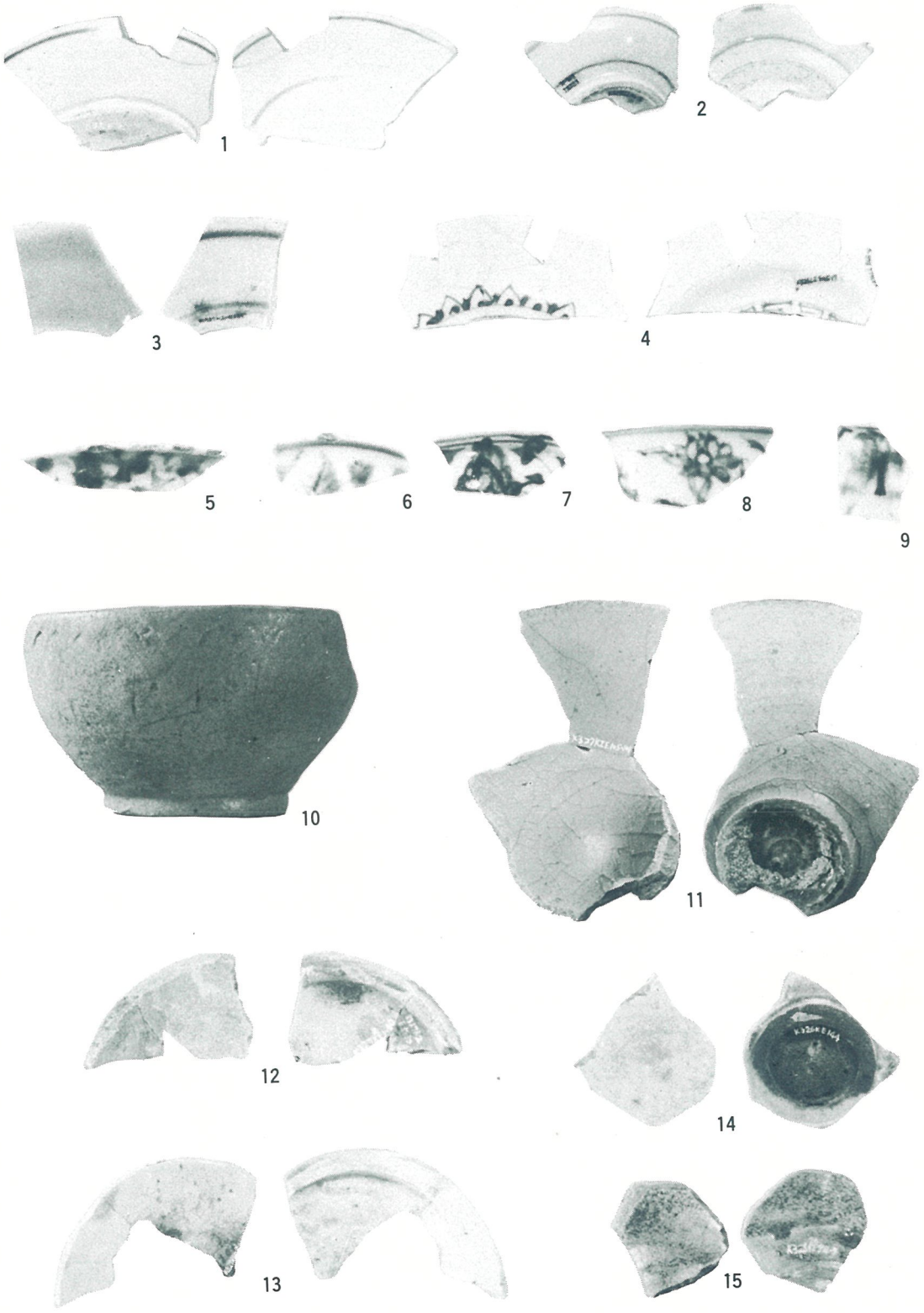
PL16　舶載磁器(染付碗)



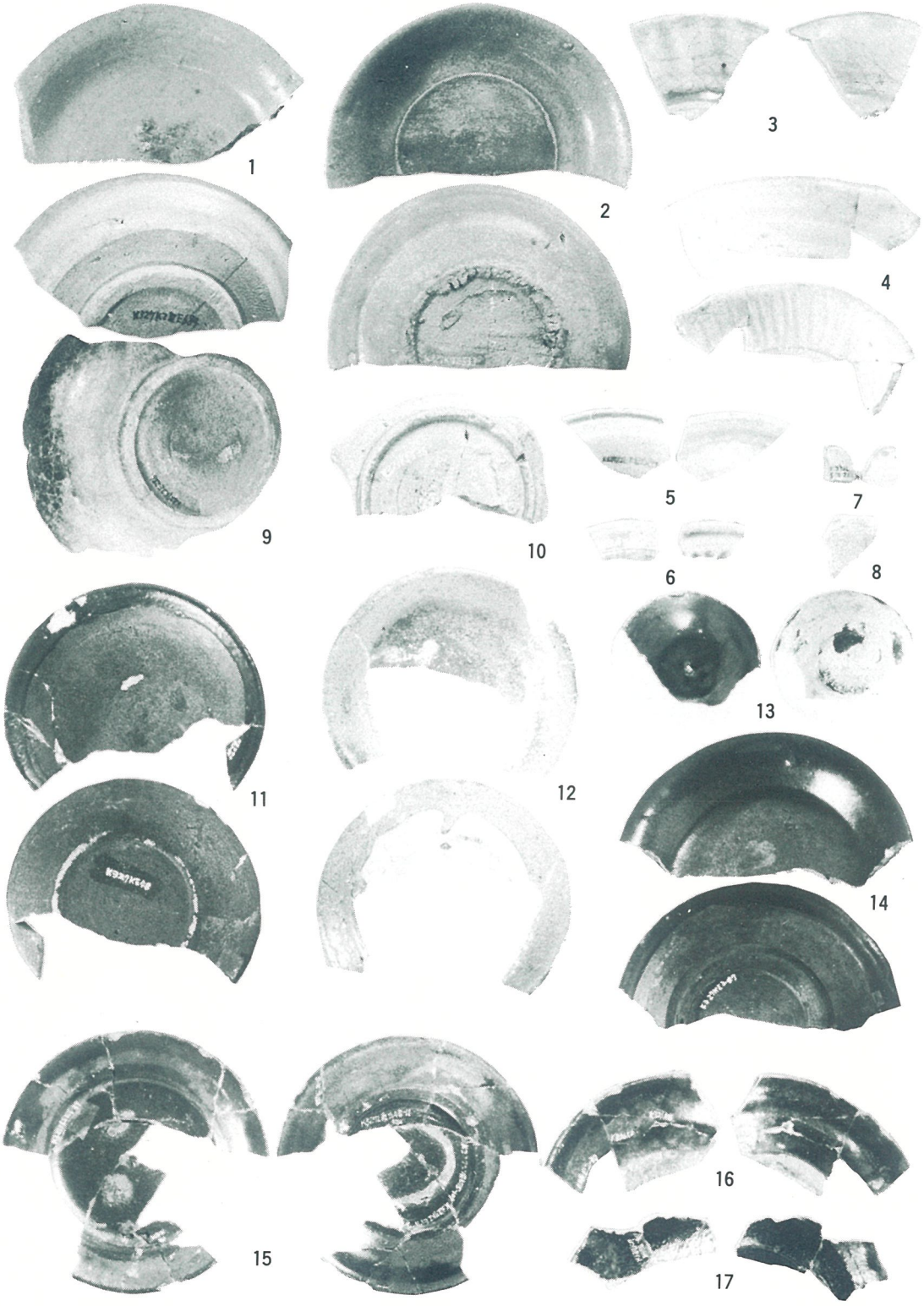
PL17　舶載磁器（染付碗）



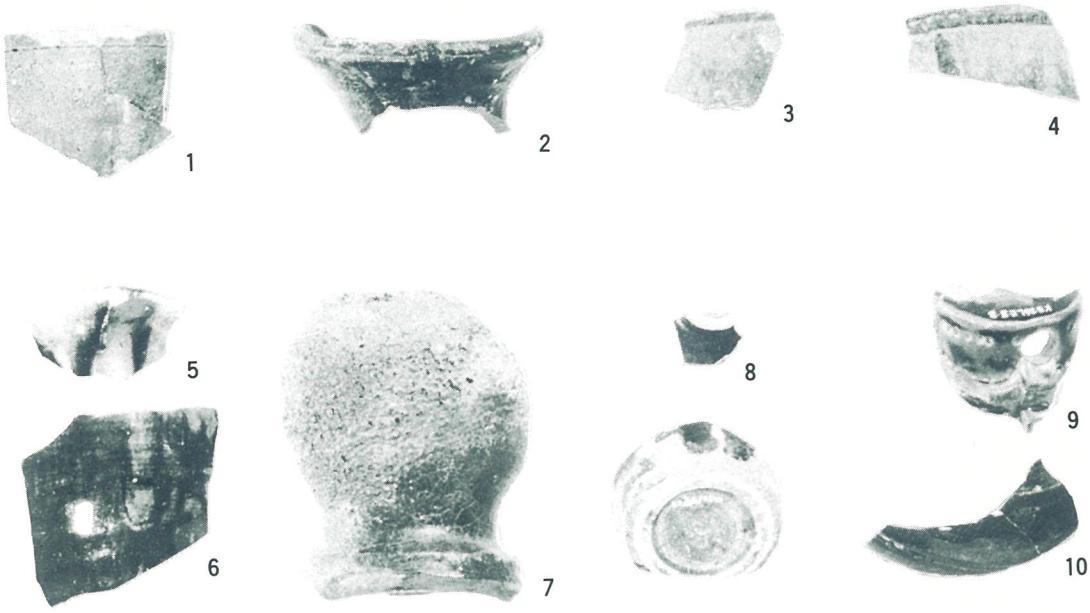
PL18　舶載磁器(染付皿)

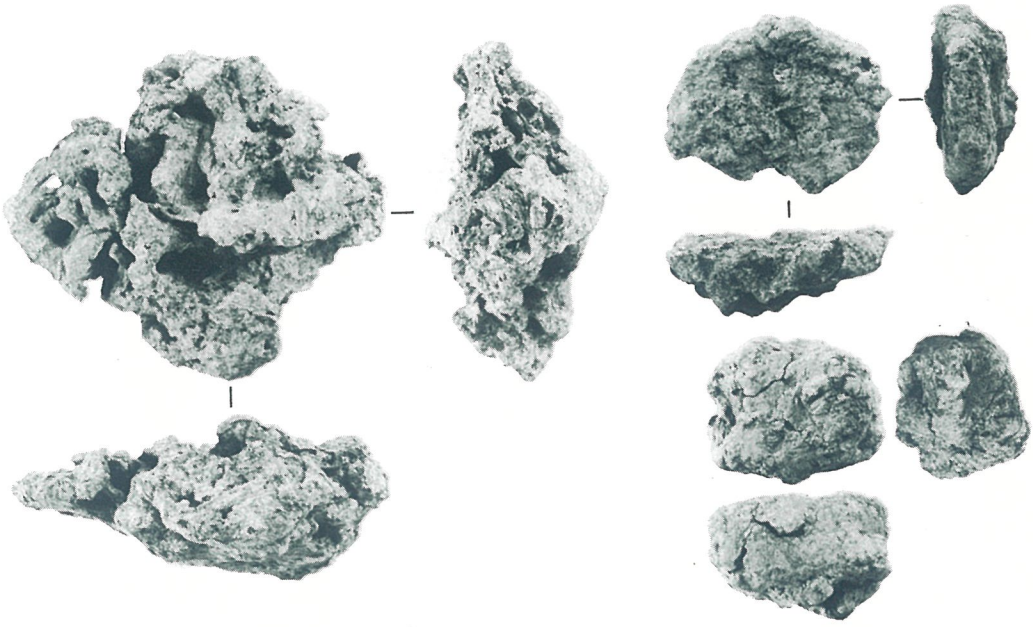


PL19　舶載磁器(染付皿)、**国産陶器**(美濃碗他)

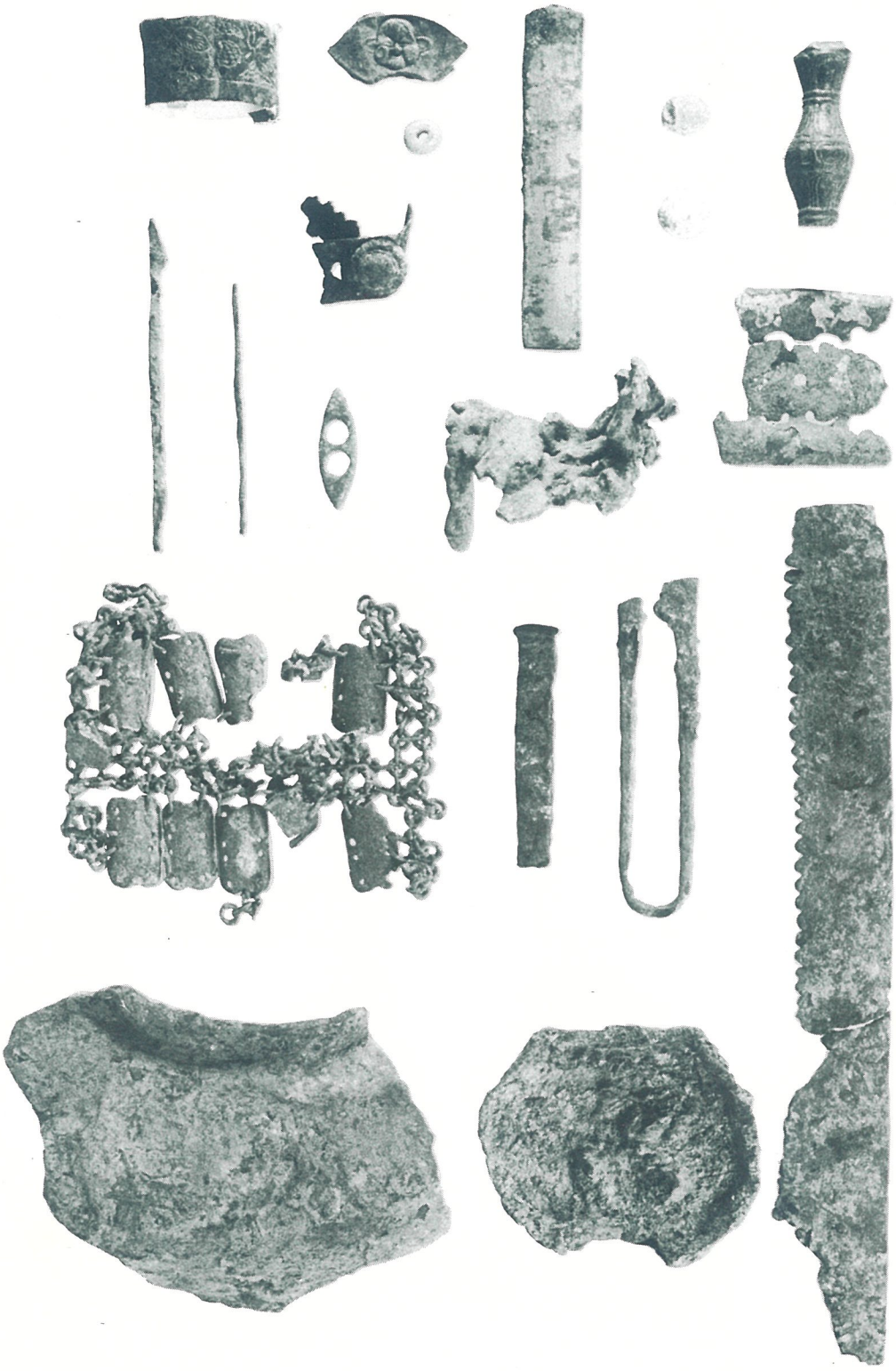


PL20　国産陶器





PL21　上、国産陶器(鉄釉)下、鉄滓

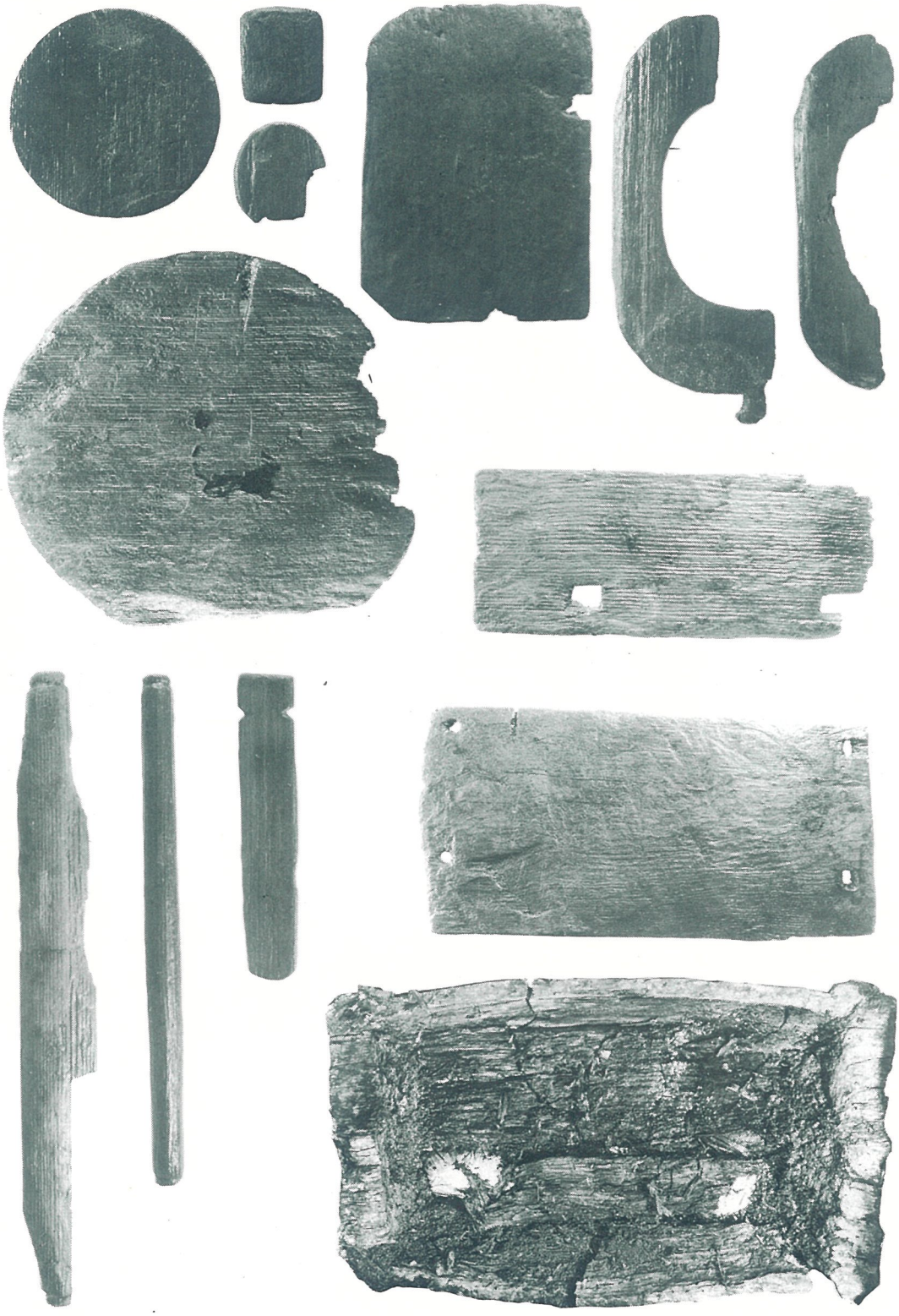


PL.22　**金属器**(鉄及び銅製品)

PL23　骨角器1

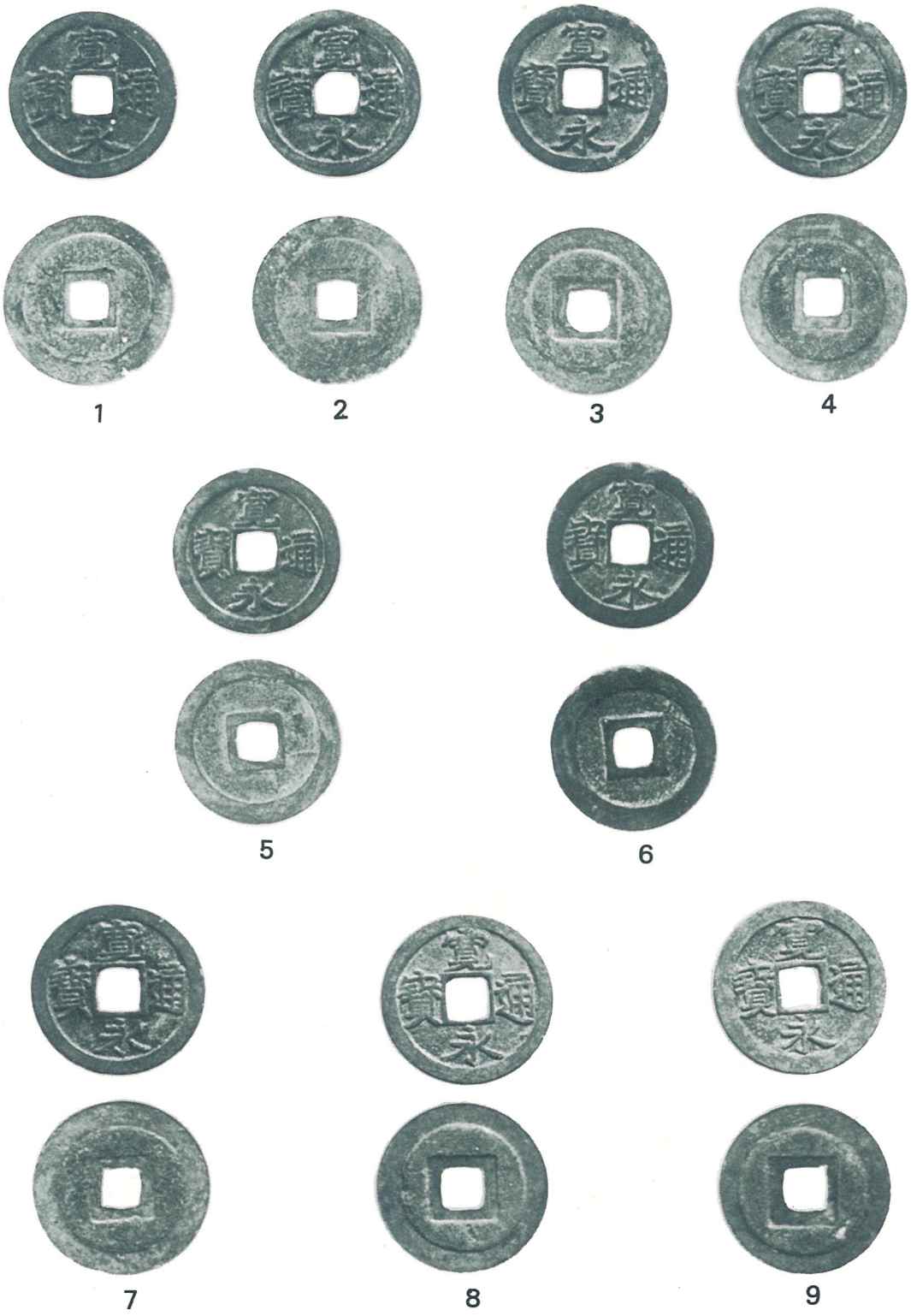
PL24　上、骨角器 2（未製品）下、木製品 1

PL25　木製品 2



PL26　木製品 3

PL27　木製品 4



PL28　古銭 1（古寛永）

10

11

12

13

14

15

16

17

18

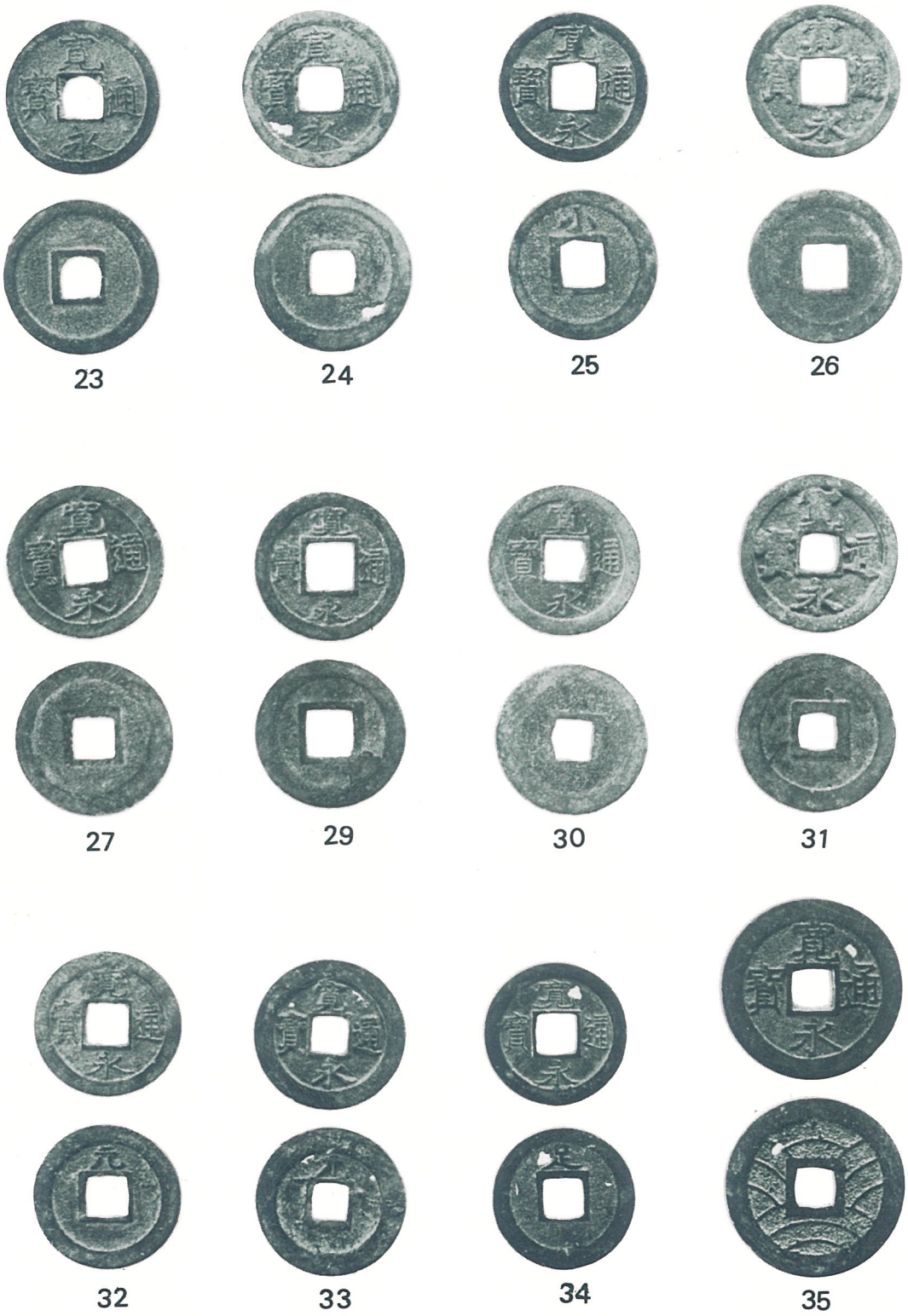
19

20

21

22

PL29　古銭 2（新寛永）

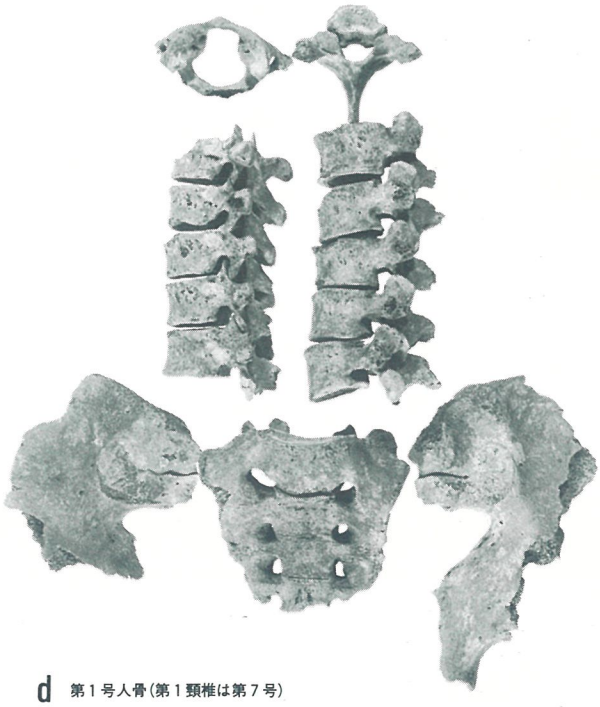


PL30　古銭 3（新寛永）

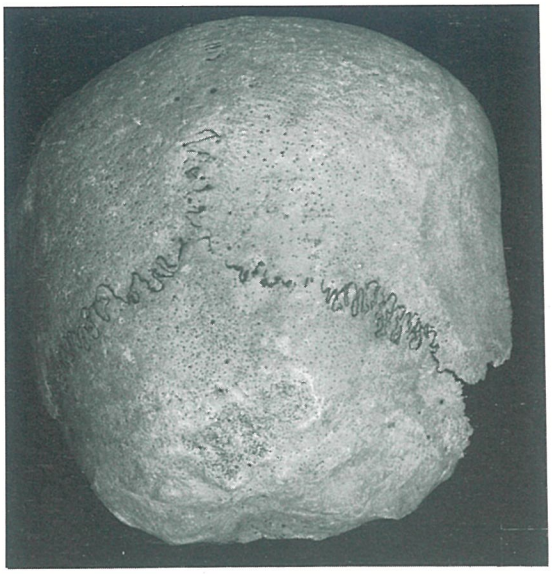
a 第７号頭骨側面観

b 第７号頭骨前面観

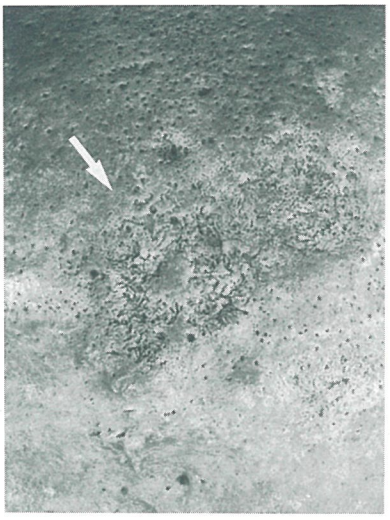
c 第７号頭骨上面観



d 第１号人骨（第１頸椎は第７号）



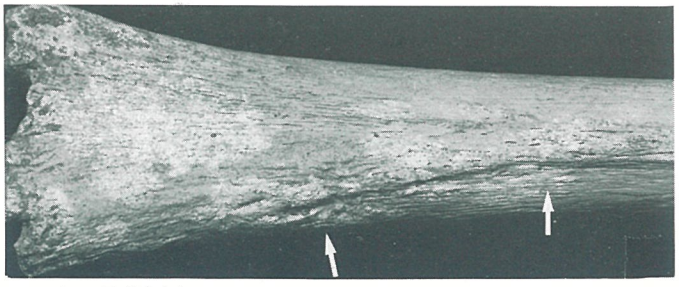
a　頭蓋片



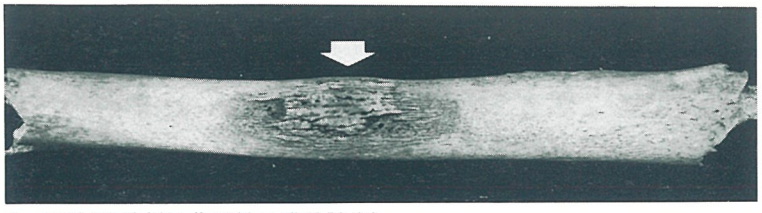
b 後頭骨梅毒性病変)

C　左頭頂骨(梅毒性骨病変)

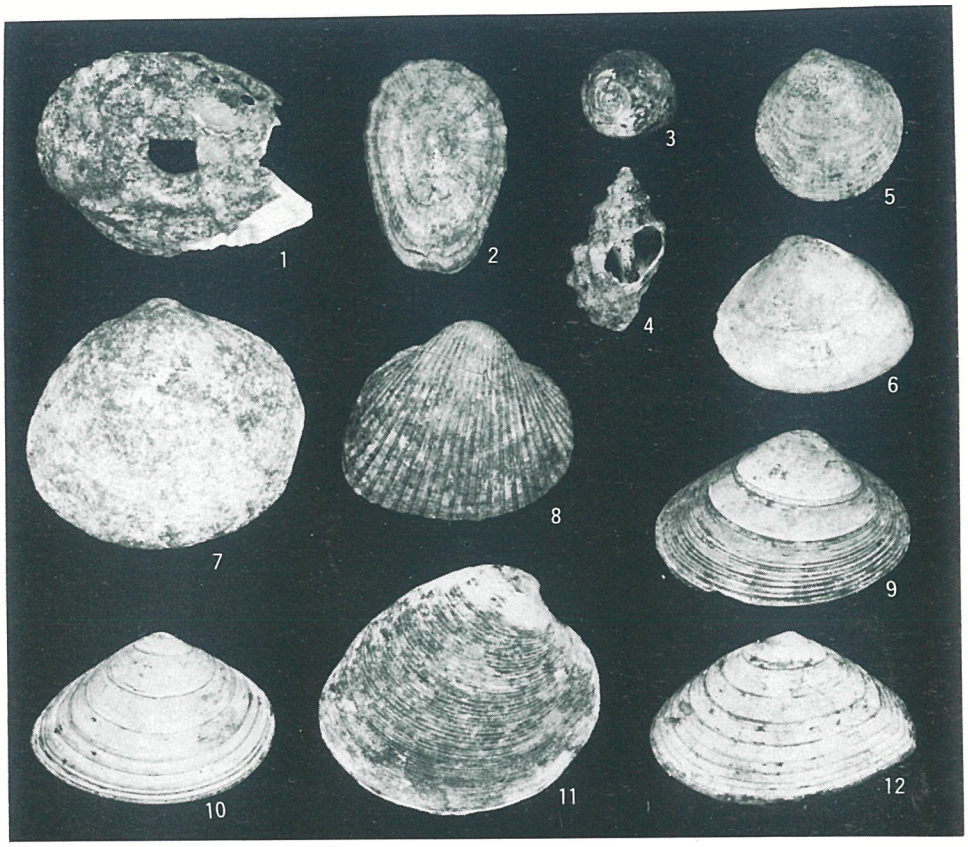
d　**脛骨**(梅毒性骨病変)



e　**大腿骨**(同上)

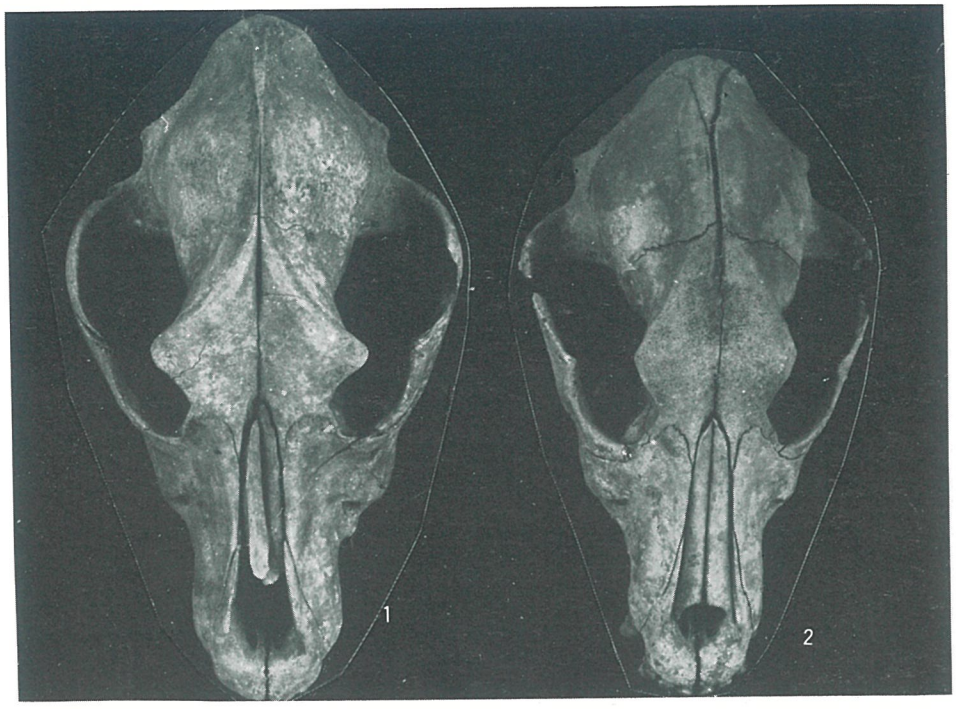


f　**脛骨**(非特異的化膿性骨膜骨髄尖)



上段、貝類(1/2)、1．クロアワビ　2．サルアワビ　3．クボガイ　4．イボニシ　5．エゾタマキガイ　6．ハマグリ　7．ベンケイガイ　8．アカガイ　9．エゾバカガイ　10．コタマガイ　11．ビノスガイ　12．ベニサラガイ
下段(1/2)、1・4キタキツネ(1．頭蓋骨　4．左下顎骨)　2・3エゾタヌキ(2．頭蓋骨　3．左下顎骨)

1～14　ネコ（1．頭蓋　2．左下顎骨　3．右骨甲骨　4．軸椎　5．頚椎　6．右上腕骨　7．右橈骨　8．右尺骨　9．右寛骨　10．右大腿骨　11．右脛骨　12．左腓骨　13．右踵骨　14．右距骨）**15．ニホンカワウソ**　左橈骨　**16．エゾオオカミ**中手骨又は中足骨　**17～19．ヒグマ**（17．右第２後臼歯、18．基節骨　19．右下犬歯（縮尺2/3）



イヌ　上段(約3/5)、下段(2/3)
1．♂?頭蓋　2．♀頭蓋　3．左上腕骨　4．右尺骨　5．左橈骨　6．左大腿骨　7．左脛骨
8．左腓骨　9．左踵骨　10．左距骨　11、12．中足骨

ウマ(頭蓋約1/3、その他1/2)
1．後頭部　2．上顎骨　3．幼獣左下顎骨　4．幼獣右肩甲骨　5．中足骨　6．右　橈・尺骨

史跡　上之国勝山館跡　Ⅳ

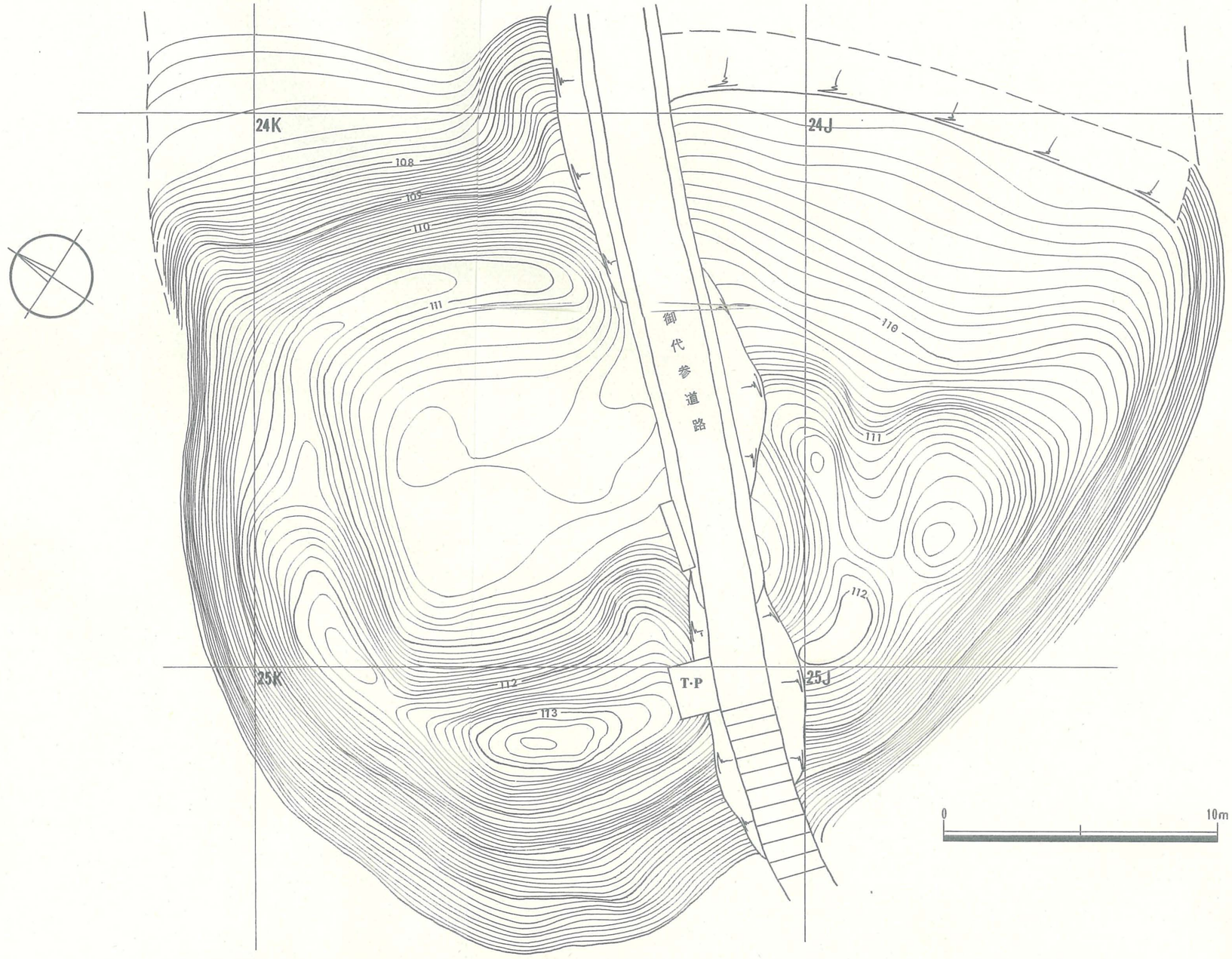
―昭和57年度発掘調査環境整備事業概報―

発　行　上ノ国町教育委員会
北海道桧山郡上ノ国町大留100

印　刷　昭和58年３月25日

発　行　昭和58年３月31日

印刷所　富士プリント株式会社



附図1　館神八幡宮跡地形図

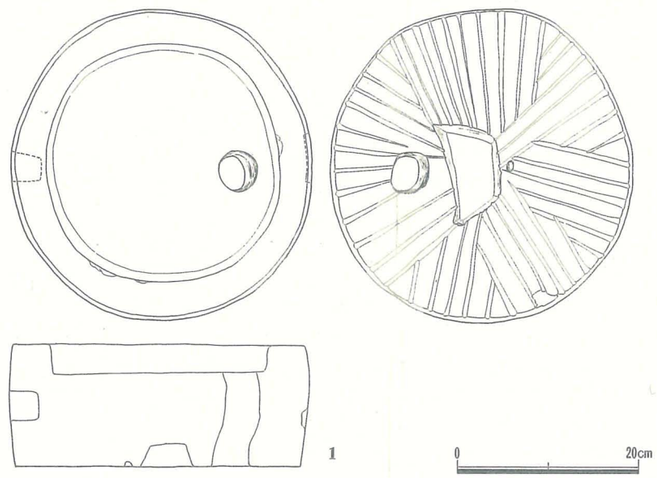
附図1　墓跡部遺構分布図

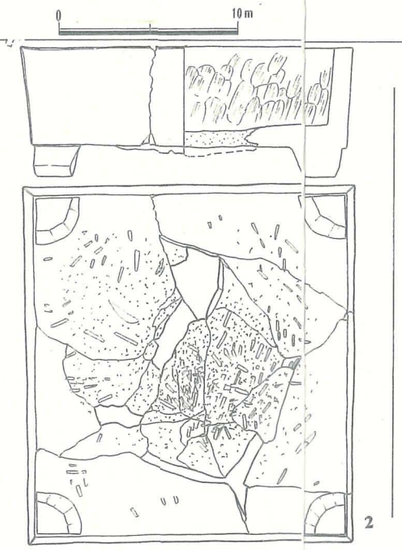
白色火山灰上面の等高線
木製品出土地区
0
10m
26I
26J
26K
26L
27I
27J
27K
27L
28K
28L
(B地区)
(C地区A)
(C地区B)
1
2
3
4
5
6
7
⑧
⑨
⑩
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109

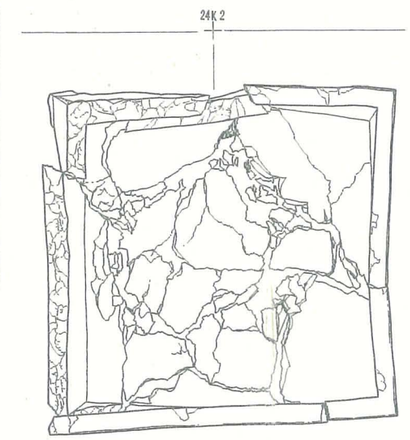
附図 2 遺跡部地形図

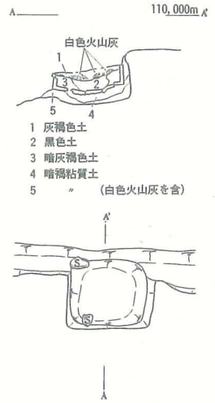
I

II









〈上之国勝山館跡Ⅳ〉

附図3　上、遺物分布図(Ⅰ、Ⅱ)下、石製品(臼、盤)